

# 中野遺跡 第117地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

埼玉県志木市教育委員会





1. 調査区遠景



2. 調査区全景





## はじめに

志木市教育委員会  
教育長 柚木 博

ここに刊行する『中野遺跡第117地点埋蔵文化財発掘調査報告書』は、教育委員会が令和3年度に受託事業として実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

現在、市内には、15か所の埋蔵文化財包蔵地が登録されています。これらの埋蔵文化財は祖先が残してきた貴重な文化遺産であり、私たちはこれを大切に保護し後世に伝えていく使命があると言えます。

また、中野遺跡については、これまでの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

今回報告する中野遺跡第117地点では、古墳時代後期、中・近世にかけての遺構・遺物が多数発見されました。

今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別の御理解と御協力を頂いた事業主体者、そして深い御理解と御協力を賜りました地元の方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。



## 例 言

1. 本書は、令和3年度に発掘作業を実施した、埼玉県志木市に所在する中野遺跡第117地点の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、分譲住宅建設に伴う道路新設工事及び浸透トレンチ工事部分の記録保存のための発掘調査として、文化財保護法第99条に基づき、志木市教育委員会が調査主体者として実施したものである。
3. 本調査の実施にあたり、工事主体者・志木市教育委員会・株式会社中野技術（代表取締役 菅原広志）の三者による協定を締結した上で、株式会社中野技術が発掘調査支援業務を行った。
4. 発掘作業は令和3年7月27日から令和3年10月8日まで行い、整理作業・報告書刊行作業を令和4年10月31日まで行った。
5. 本書は徳留彰紀・大久保聡・尾形則敏・木村結香が監修し、編集は小林陽子・根本靖・清水理史が行った。執事は第1章、第2章第1節を尾形、第4章第2節を清水、その他を小林が担当した。
6. 96H・97H・98Hより出土した炭化物については株式会社パレオ・ラボ（代表取締役 中村賢太郎）に委託し、自然科学分析（放射性炭年代測定・炭化材の樹種同定・大型植物遺体同定）を行った。
7. 縄文時代の遺物については黒坂禎二（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）氏にご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。
8. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターで一括して保管している。
9. 調査組織は以下の通りである。

### 【志木市教育委員会組織】

調 査 主 体 者	志木市教育委員会
教 育 長	柚 木 博
教 育 政 策 部 長	北 村 竜 一（～令和3年度）
〃	今 野 美 香（令和4年度～）
生 涯 学 習 課 長	土 崎 健 太
生 涯 学 習 課 副 課 長	吉 成 和 重
生 涯 学 習 課 主 幹	浅 見 千 穂
生 涯 学 習 課 主 査	尾 形 則 敏（～令和3年度）
〃	徳 留 彰 紀
〃	大 久 保 聡（令和4年度～）
生 涯 学 習 課 主 任	尾 形 則 敏（令和4年度～）
〃	大 久 保 聡（～令和3年度）
〃	石 川 千 尋
生 涯 学 習 課 主 事	塚 原 会 理（令和4年度～）
生 涯 学 習 課 主 事 補	木 村 結 香（令和3年8月～）
〃	遠 藤 彪 雅（～令和3年度）

志木市文化財保護審議会	井上 國夫 (会長)
”	深瀬 克 (委員)
”	上野守嘉 (委員)
”	新田泰男 (委員)
”	金子博一 (委員)

調査担当者 尾形則敏・徳留彰紀・大久保 聡

【株式会社中野技術】

○発掘調査

調査員	新井 潔
現場代理人	下岡孝明
測量員	下岡孝明
調査補助員	石橋佳奈・鈴木彩乃
作業員	青木利恵・白井 孝・大原美紀・甲斐栄美子・川口砂織・北根麻由・久保田創大・坂本秀也・松尾貴弘・森澤重雄

○整理作業

調査員	小林 陽子・根本 靖・清水理史・新井 潔
調査補助員	佐貫 健
作業員	青木利恵・明石千とせ・石川まゆみ・井上麻美子・白井 孝・内田 恭子・大原美紀・甲斐栄美子・加藤洋子・北根麻由・坂井美樹子・櫛原みゆき・徳光直子・山本圭子

10. 発掘作業及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

11. 令和3年8月11日～13日にかけて国土館大学文学部史学地理学科国史学専攻、夏季考古学実習として、先生引率の下、TA2名、学生47名が学外遺跡見学実習を行った。

12. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

令和3年7月14日付け 教文資第4-778号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）

令和4年3月29日付け 教文資第7-142号

## 凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：5,000 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成27年4月発行  
株式会社ゼンリン

2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。

3. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

4. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

5. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。

6. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

7. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。

8. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は〔 〕、推定値は（ ）を付した。

高：器高 口：口径 底：底径 厚：器厚

9. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

H = 古墳時代後期の住居跡 T = 掘立柱建築遺構 D = 土坑 P = ビット

# 目 次

巻頭図版／はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	8
第2章 発掘調査の概要	10
第1節 調査に至る経緯	10
第2節 調査の経過	11
第3節 基本層序	14
第3章 検出された遺構・遺物	16
第1節 縄文時代の遺構	16
第2節 古墳時代後期の遺構・遺物	16
第3節 中世以降の遺構・遺物	58
第4節 遺構外出土遺物	62
第4章 調査のまとめ	69
第1節 中野遺跡第117地点の成果	69
第2節 中野遺跡における古墳時代の遺構分布	76
[付編] 自然科学分析	
I. 放射性炭素年代測定	87
II. 中野遺跡第117地点出土炭化材の樹種同定	90
III. 中野遺跡第117地点から出土した大型植物遺体	92

図 版

報告書抄録

## 插图目次

第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000) … 2	第30図 98号住居跡出土遺物1 (1/4) … 43
第2図 中野遺跡の調査地点 (1/3,000) … 9	第31図 98号住居跡出土遺物2 (1/4) … 44
第3図 確認調査時の遺構分布図 (1/300) … 10	第32図 98号住居跡出土遺物3 (1/3) … 45
第4図 遺構分布図 (1/250) … 13	第33図 99号住居跡1 (1/60) … 48
第5図 試掘坑配置図 (1/300) … 14	第34図 99号住居跡2 (1/60・1/30) … 49
第6図 基本層序 (1/60) … 15	第35図 99号住居跡遺物出土状態1 (1/60) … 50
第7図 土坑 (1/60) … 16	第36図 99号住居跡遺物出土状態2 (1/30) … 51
第8図 95号住居跡 (1/60) … 17	第37図 99号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3) … 51
第9図 95号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) … 17	第38図 99号住居跡出土遺物2 (1/4) … 52
第10図 96号住居跡1 (1/60) … 18	第39図 99号住居跡出土遺物3 (1/4) … 53
第11図 96号住居跡2 (1/60) … 19	第40図 100号住居跡 (1/60・1/30) … 55
第12図 96号住居跡3 (1/60・1/30) … 20	第41図 100号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) … 56
第13図 96号住居跡4 (1/30・1/80) … 21	第42図 101号住居跡 (1/60) … 57
第14図 96号住居跡5 (1/60) … 22	第43図 古墳時代後期ピット・7号ピット出土遺物 (1/60・1/30・1/4) … 57
第15図 96号住居跡遺物出土状態 (1/80・1/30) … 23	第44図 3号掘立柱建築遺構 (1/60) … 59
第16図 96号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3) … 24	第45図 3号掘立柱建築遺構模式図 (1/80) … 60
第17図 96号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3・2/3) … 25	第46図 中世以降の土坑 (1/60) … 61
第18図 97号住居跡1 (1/60) … 29	第47図 中世以降のピット (1/60) … 61
第19図 97号住居跡2 (1/60) … 30	第48図 遺構外出土遺物1 (2/3・1/3・1/4) … 63
第20図 97号住居跡3 (1/60・1/120) … 31	第49図 遺構外出土遺物2 (1/3) … 64
第21図 97号住居跡4 (1/30・1/60) … 32	第50図 遺構外出土遺物3 (1/3・1/4・4/5) … 65
第22図 97号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/30) … 33	第51図 坏・高环形土器の変遷 (1/8) … 72
第23図 97号住居跡出土遺物1 (1/4) … 34	第52図 甗・甗・壺形土器の変遷 (1/14) … 73
第24図 97号住居跡出土遺物2 (1/4) … 35	第53図 中野遺跡の大型住居跡 (1/200) … 77
第25図 97号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3・2/3) … 36	第54図 中野遺跡住居分布図—古墳後期～奈良・平安— (1/2,500) … 78
第26図 98号住居跡1 (1/60) … 39	第55図 中野遺跡古墳後期住居変遷図 (1/2,500) … 80
第27図 98号住居跡2 (1/60・1/30) … 40	第56図 暦年校正結果 … 89
第28図 98号住居跡遺物出土状態1 (1/60) … 41	
第29図 98号住居跡遺物出土状態2 (1/30) … 42	

## 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧……………	1	第15表	遺構外出土縄文土器一覧(1)……………	66
第2表	発掘調査工程表……………	12		遺構外出土縄文土器一覧(2)……………	67
第3表	95号住居跡出土土器一覧……………	17	第16表	遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期土器一覧……………	67
第4表	96号住居跡出土土器・土製品・鉄製品一覧(1)……………	26		……………	67
	96号住居跡出土土器・土製品・鉄製品一覧(2)……………	27	第17表	遺構外出土奈良・平安時代の土器一覧(1)……………	67
第5表	97号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(1)……………	37		遺構外出土奈良・平安時代の土器一覧(2)……………	68
	97号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(2)……………	38	第18表	遺構外出土中世以降の陶器一覧……………	68
第6表	98号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(1)……………	45	第19表	遺構外出土中世以降の土製品一覧……………	68
	98号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(2)……………	46	第20表	遺構外出土銭貨一覧……………	68
	98号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(3)……………	47	第21表	遺構外出土金属製品一覧……………	68
第7表	99号住居跡出土土器一覧(1)……………	53	第22表	中野遺跡各地点住居一覧(1)……………	81
	99号住居跡出土土器一覧(2)……………	54		中野遺跡各地点住居一覧(2)……………	82
第8表	100号住居跡出土土器・鉄製品一覧……………	56		中野遺跡各地点住居一覧(3)……………	83
第9表	古墳時代後期ピット一覧……………	57	第23表	測定試料および処理……………	87
第10表	7号ピット出土土器一覧……………	58	第24表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果……………	88
第11表	3号掘立柱建築遺構柱穴一覧……………	60	第25表	遺構別の樹種同定結果……………	90
第12表	中世以降の土坑一覧……………	61	第26表	樹種同定結果一覧……………	91
第13表	中世以降のピット一覧……………	62	第27表	中野遺跡第117地点から出土した炭化種実……………	92
第14表	遺構外出土縄文時代石器一覧……………	66			

## 図 版 目 次

### 図版1

1. 調査前現況(北から)
2. 表土剥ぎ(北から)
3. 表土剥ぎ(東から)
4. プラン確認
5. 旧石器試掘坑T P 1(東から)
6. 旧石器試掘坑T P 2(東から)
7. 旧石器試掘坑T P 3(西から)
8. 旧石器試掘坑T P 4(東から)

### 図版2

1. 645号土坑完掘(北から)
2. 95号住居跡完掘(東から)
3. 96号住居跡遺物出土状態(北東から)
4. 96号住居跡遺物出土状態(北から)
5. 96号住居跡遺物出土状態(南から)
6. 96号住居跡カマド完掘(南東から)
7. 96号住居跡P2完掘(南から)
8. 96号住居跡焼土(北から)



図版 3

1. 96号住居跡完掘
2. 96号住居跡掘り方完掘（南から）
3. 96号住居跡作業風景
4. 97号住居跡作業風景
5. 97号住居跡遺物出土状態（南から）
6. 97号住居跡土層断面（北東から）
7. 97号住居跡壁溝遺物出土状態（北から）
8. 97号住居跡カマド遺物出土状態（南から）

図版 4

1. 97号住居跡カマド遺物出土状態（南から）
2. 97号住居跡カマド完掘（南西から）
3. 97号住居跡貯蔵穴A～C全景（北西から）
4. 97号住居跡P5完掘（南から）
5. 97号住居跡完掘（北から）

図版 5

1. 98号住居跡遺物出土状態（南から）
2. 98号住居跡貯蔵穴A周辺遺物出土状態（南から）
3. 98号住居跡貯蔵穴A完掘（南から）
4. 98号住居跡貯蔵穴B完掘（西から）
5. 98号住居跡カマド遺物出土状態（南から）
6. 98号住居跡カマド支脚出土状態（南から）
7. 98号住居跡P5完掘（西から）
8. 98号住居跡掘り方完掘（南から）

図版 6

1. 99号住居跡遺物出土状態（南から）
2. 99号住居跡カマド西遺物出土状態（西から）
3. 99号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状態（南から）
4. 99号住居跡貯蔵穴南遺物出土状態（西から）
5. 99号住居跡P1上面坏出土状態（北西から）
6. 99号住居跡貯蔵穴遺物出土状態（南から）
7. 99号住居跡カマド西遺物出土状態（南から）
8. 99号住居跡カマド完掘（南から）

図版 7

1. 99号住居跡完掘
2. 100号住居跡完掘（北から）
3. 100号住居跡カマド完掘（南から）
4. 101号住居跡完掘（南西から）
5. 1号ピット完掘（東から）

図版 8

1. 6号ピット完掘（南から）
2. 2号ピット完掘（南から）
3. 7号ピット完掘（南から）
4. 7号ピット遺物出土状態（南から）
5. 3号掘立柱建築遺構完掘（南から）

図版 9

1. 646号土坑完掘（北から）
2. 647号土坑完掘（北東から）
3. 648号土坑完掘（南西から）
4. 649号土坑完掘（西から）
5. 650号土坑完掘（西から）
6. 651号土坑完掘（南から）
7. 3号ピット完掘（西から）
8. 4号ピット完掘（北から）

図版 10

1. 5号ピット完掘（東から）
2. 学生見学風景
3. 調査区遠景
4. 埋め戻し風景
5. 埋め戻し後全景

図版 11

1. 95号住居跡出土遺物
2. 96号住居跡出土遺物 1

図版 12

1. 96号住居跡出土遺物 2
2. 97号住居跡出土遺物 1

図版 13

97号住居跡出土遺物 2

図版 14

97号住居跡出土遺物 3

図版 15

1. 97号住居跡出土遺物 4
2. 98号住居跡出土遺物 1

図版 16

98号住居跡出土遺物 2

図版 17

98号住居跡出土遺物 3

図版 18

1. 98号住居跡出土遺物 4
2. 99号住居跡出土遺物 1

図版 19

99号住居跡出土遺物 2

図版 20

1. 100号住居跡出土遺物
2. 7号ピット跡出土遺物
3. 遺構外出土遺物 1

図版 21

遺構外出土遺物 2

図版 22

遺構外出土遺物 3

図版 23

炭化材の走査型電子顕微鏡写真

- 1 a-1 c. コナラ属クヌギ節 (No.20)
  - 2 a-2 c. コナラ属コナラ節 (No.2)
  - 3 a. 樹皮 (No.19)
  - 4 a. イネ科 (No.5)
- a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面

図版 24

中野遺跡第117地点から出土した炭化種実

1. モモ炭化核 (完形)(98H (4H)、d区一括)
2. モモ炭化核 (完形)(97H (3H)、No.361)
3. モモ炭化核 (破片)(96H (2H)、炭2 No.398)

# 第1章 遺跡の立地と環境

## 第1節 市域の地形と遺跡

### (1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.05km<sup>2</sup>、人口約7万6千人の自然と文化の調和する都市である。

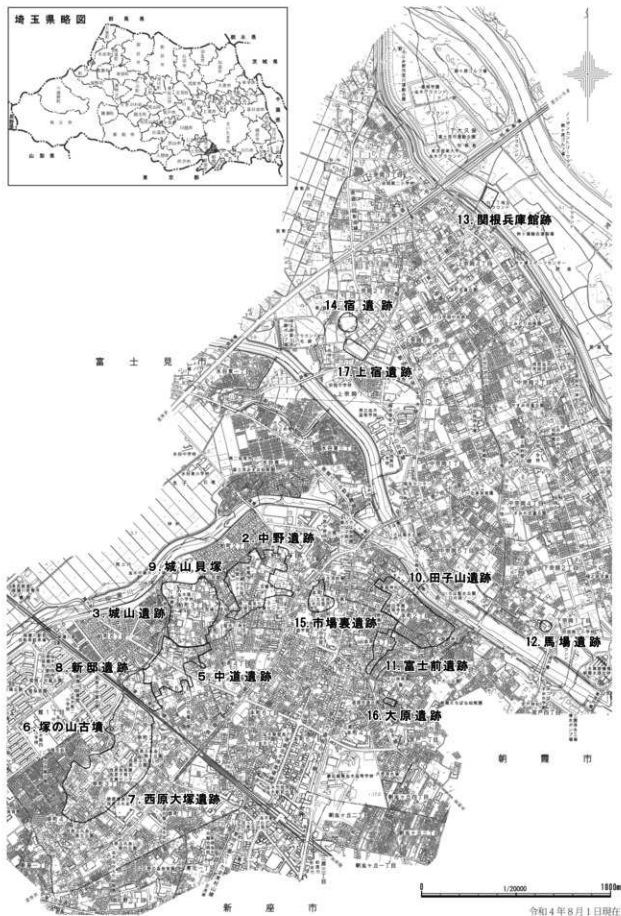
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺

№	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	71,220㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄(早～後)、弥(後)、古(前～後)、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,100㎡	畑・宅地	貝塚・城館跡・集落跡・墓跡	旧石器、縄(草創～晩)、弥(中・後)、古(前～後)、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、跡関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、銅造関連遺物等
5	中道	54,420㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄(早～後)、弥(後)、古(前～後)、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	164,960㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄(前～晩)、弥(後)、古(前～後)、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄(早～中)、古(前～後)、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ビッド群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄(前)	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄(草創～晩)、弥(後)、古(後)、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローマ探掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830㎡	宅地	集落跡	縄文、弥(後)～古(前)、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800㎡	畑	集落跡	古(前)	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	水田	館跡	中世	溝跡、桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥(後)～古(前)、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700㎡	宅地	集落跡	近世以降?	溝跡	なし
17	上宿	8,600㎡	水田・宅地	集落跡・墓跡	平安、中・近世	住居跡、土坑、溝跡、井戸跡	土師器、須恵器、陶磁器、板碑等
合計		522,840㎡					

令和4年8月1日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

令和4年8月1日現在

跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた15遺跡である（第1図・第1表）。

## （2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2か所、平成7（1995）年度には1か所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。最新では、令和元（2019）年に第224地点で立川ローム層のⅣ層下部～Ⅴ層上部・Ⅶ層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・真岩の石核・剥片が約60点出土している。平成28（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91㊦地点からは、礫群1基が検出された。令和元～2（2019～2020）年にかけて発掘調査された中野遺跡第109地点では、立川ローム層Ⅳ層下部～Ⅴ層を中心とする石器集中地点が検出されており、石核調整剥片の良好な接合資料が出土している。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層のⅣ層上部とⅦ層の2か所で石器集中地点が検出されている。平成20・21（2008～2009）年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも1か所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層のⅣ層下部～Ⅴ層上部で石器集中地点2か所、礫群9基が検出された。令和元（2019）年には第96地点で立川ローム層のⅣ層下部～Ⅴ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で石器集中地点や礫群が検出されている。

### 2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡としては、令和4（2022）年に田子山遺跡第172地点で市内初となる燃糸文期の住居跡が1軒検出された。また、平成18（2006）年に発掘調査が実施

された中道遺跡第65地点では、早期末葉（条痕文系）の10号住居跡が検出されている。土器としては、田子山遺跡で摺糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から摺糸文系土器・石器がまとめて出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。令和元（2019）年度に発掘調査が実施された城山遺跡第96地点、令和3～4（2021～2022）年に実施された中野遺跡第116①地点では、前期後葉の諸磯a式期の住居跡が検出されている。そのうち、城山遺跡第96地点では貝層を持つ住居跡が3軒検出された。住居内貝層からヤマトシジミ・マガキが検出されている。平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で200軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡1軒が確認されているが、平成28（2016）年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曾利EⅣ式の両耳壺を出土する住居跡1軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡2軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1か所、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居（敷石住居）1軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。その他、平成26（2014）年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の遺物が比較的多く出土している。最新資料として、平成30（2018）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第216地点で、堀之内1式期の住居跡が1軒検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行Ⅲc式・千網式の土器片が少量発見されている。また、令和3（2021）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第234地点で、遺構外出土ではあるが、縄文時代晩期～弥生時代初頭に位置づけられる土器片が1点発見されている。以降市内では弥生時代中期まで空白の時代となる。

### 3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については令和元（2019）年に発掘調査された城山遺跡第96地点で市内初となる宮ノ台式期の住居跡1軒、方形周溝墓1基が検出された。住居跡からは壺、甕、高坏、挟入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。なお、これらの資料のうち、土器、石器、土製品計44点は、城山遺跡10号住居跡出土遺物として、考古資料として、市指定文化財（令和3年7月1日付け）に指定されている。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原

土器を出土する住居跡が発見されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、龍目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が650軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅剣が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺土器が出土している。なお、鳥形土製品1と壺形土器4点の計5点は、考古資料として、市指定文化財（平成25年3月1日付け）に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

#### 4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後葉から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後葉以降、周辺地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材のほかベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後葉から7世紀後葉にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で265軒、次いで中野遺跡で58軒、中道遺跡で20軒、田子山遺跡で17軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後葉以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形形で2か所にブリッジをもつ小型の円形周溝溝が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

## 5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山・富士前遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器環や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶が2枚とその近くからは鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群と南比企窯跡群の製品という生産地の異なる須恵器環が共存して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

最新では、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、平安時代の住居跡・土壘・溝跡などが検出され、宗岡地区における自然堤防上に立地する遺跡の存在が明らかになりつつある。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、市指定文化財（平成25年3月1日付け）に指定されている。

## 6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と大塚千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』(註1)にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記』(註2)に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板磚と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土し



ており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鋳造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鋳造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鋳型、鍋の耳部分の小型鋳型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鍔の札である鉄製品1点と鉄鍔1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新たに土坑45基・井戸跡2基・溝跡1本・ピット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「T字形」の火葬土坑5基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村日記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村日記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、中道遺跡第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

最新資料としては、令和2・3年度に発掘調査を実施した西原大塚遺跡第234地点の地下式坑（912号土坑）から、人骨（女性2体）と完形品の播鉢が共存する良好な資料が発見された。人骨は「通常とは異なる状況」で埋葬されたと考えられ（田中 2022）、播鉢は古瀬戸後期IV古～新段階（藤澤 2008）に比定されることから、時期は中世（15世紀中葉～後葉）のものと考えられる。

また、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、中・近世の土壇・井戸跡・溝跡などの多くの遺構が検出され、中世における『宗岡宿』の様相や近世における千光寺に関連する墓域群などを知ることができる貴重な成果につながった。

## 7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鎌などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止水用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの錆着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

---

## 第2節 遺跡の概要

---

ここで、今回本書で報告する中野遺跡について概観することにする。

中野遺跡は、志木市柏町1丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北方約1.2kmに位置している。遺跡は、柳瀬川流域右岸の台地上に立地しており、標高は北端で約9m、南端で約11mを測り、台地縁辺では際立った断崖もみられないまま、ゆるやかに北側の低地に移行する。遺跡の現況は、宅地化が急速に進行している地域で、畑地は減少している。

本遺跡は、これまでに123地点の調査（令和4年8月1日現在）が実施され、旧石器時代、縄文時代早期～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。

### 【注】

- 註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の家主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10か月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

### 【引用文献】

- 神山健吉 1988『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十五坊の所在についての一考察『郷土志木』第7号  
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号
- 田中 信 2022「第3章 調査のまとめ 第3節 中世以降について」『西原大塚遺跡第234地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』  
志木市の文化財第86集 埼玉県志木市教育委員会
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸原の研究』高志書院



第2図 中野遺跡の調査地点 (1/3,000)

令和4年8月1日現在

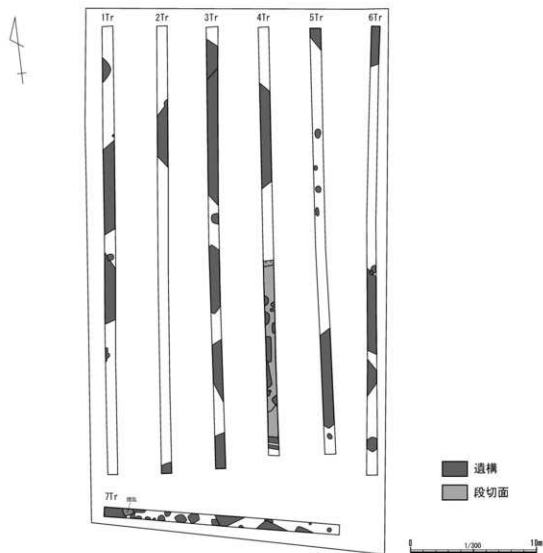
## 第2章 発掘調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

令和3年1月、仲介業者である株式会社リゾンから志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町1丁目1506-5の一部（面積998.59㎡）地において、分譲住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は、当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である中野遺跡（コード11228-09-002）に一部該当及び隣接地であるため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。



第3図 確認調査時の遺構分布図（1／300）

2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

令和3年2月4日、教育委員会は、タクトホーム株式会社（代表取締役 小寺一裕）より確認調査依頼書を受理し、中野遺跡第117地点として、3月1日～3日に確認調査を実施した。確認調査は、第3図に示すように調査区にトレンチ7本（1～7Tr）を設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の住居跡1軒・土坑2基、古墳時代後期から平安時代の住居跡13軒・土坑3基、中世以降の土坑17基など多くの遺構を確認した。教育委員会は、この結果をただちに株式会社リゾンを通じ、タクトホーム株式会社に報告し、保存措置について検討を依頼した。

その後、株式会社リゾンから連絡があったため、保存措置についての事前打合せを実施した。その結果、全体面積（998.59㎡）のうち、宅地部分については盛土保存（面積765.01㎡）、道路新設工事及び浸透トレンチ部分は発掘調査（面積233.58㎡）を実施することとした。

令和3年5月15日、教育委員会は土木工事主体者である個人より埋蔵文化財発掘調査依頼書が提出されたため、発掘調査の実施に向けた事前協議を実施した。

7月14日、土木工事主体者・教育委員会・民間調査組織の三者による事前協議を実施し、7月19日、中野遺跡第117地点埋蔵文化財保存事業に係る協定を、土木工事主体者である個人・教育委員会・株式会社中野技術（代表取締役 菅原広志）の三者により締結した。

教育委員会は、7月14日付けで埋蔵文化財発掘の届出及び発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。以上により、教育委員会を調査主体に7月27日から発掘調査を実施した。

なお、発掘調査に関しては、天候不順に伴い発掘作業に遅延が生じたため、発掘作業の期間延長に関して、9月22日付けで土木工事主体者である個人・教育委員会・株式会社中野技術の三者で変更協定を締結した。変更事項は以下のとおりである。

変更事項 発掘作業期間

【変更前】 令和3年7月26日から令和3年9月30日まで。

【変更後】 令和3年7月27日から令和3年10月9日まで。

---

## 第2節 調査の経過

---

発掘調査は、令和3年7月27日から10月8日まで実施した。調査区は開発対象地の道路新設部分を中心として設定され、調査によって生じた残土は開発範囲内に仮置きした。住居跡の調査は、基本的には十字にベルトを設定し掘り下げた。土層図作成・写真撮影ののち、ベルトを外し、遺物出土状況を記録し完掘した。その後、平面図作成・写真撮影を行いカマドの調査を行った。カマド・貯蔵穴・ピットは状況に応じ、土層の記録を取っている。住居はカマドの調査を終えたのち、貼床を剥がし掘り方の調査を行った。土坑、ピットについては基本的には半載し、記録を取ったのち完掘した。

発掘調査の各遺構の経過については第2表の発掘調査工程表にまとめた。全体的な発掘調査の経過については下記のとおりである。

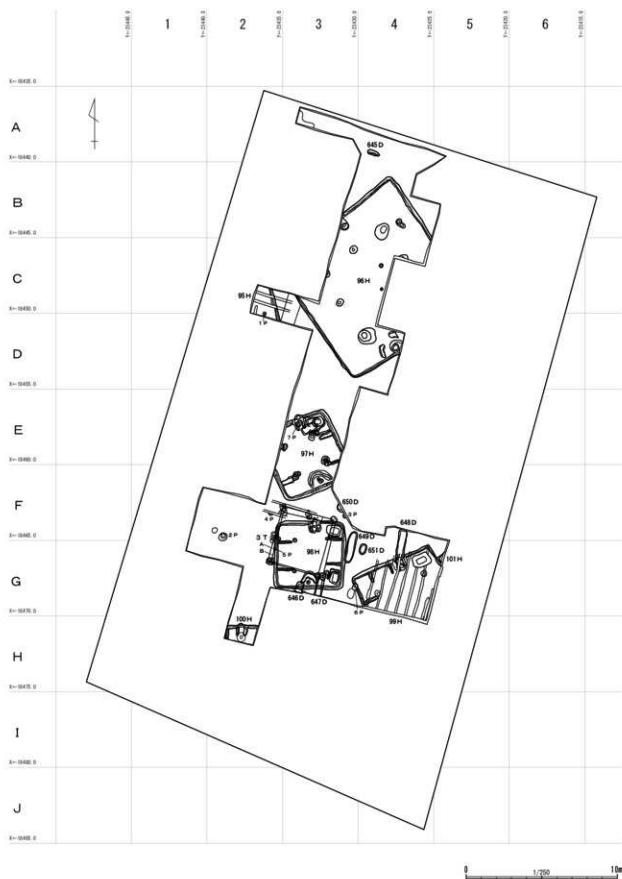
7月27日 鉄板を敷き、用地整備を行う。重機の搬入、ユニットハウス・トイレを設置。

第2章 発掘調査の概要

- 28日 オレンジネットにより周辺的环境整備を行う。重機による表土除去作業開始。
- 30日 表土除去作業終了。排土山をシートにより養生する。遺構確認作業開始。
- 8月2日 遺構確認作業により住居跡6軒が確認される。住居跡には1～6H（後の95～100H）の仮住居番号を付し、調査を進めることとする。
- 3日 ドローン撮影写真により模式図作成。遺構の調査開始。
- 11日～13日 国士館大学学生の現場見学受け入れ。
- 12日 2H（96H）は土層の観察により上層が黒色土、下層の褐色土に焼土が含まれることから焼失家屋の可能性が考えられる。
- 16日 3H（97H）は掘り下げにより当初想定したプランより南側へと広がることが判明する。
- 9月1日 3H（97H）の北西部で遺物が集中して出土した。
- 13日 3H（97H）カマドの調査において、ピット（P7）によって切られていることが判明。内部から土師器甕が出土する。
- 同日 3H（97H）貯蔵穴を掘り下げたところ、重複していることが判明。貯蔵穴のプラン上に多く遺物が出土していることから、遺物取り上げ後にさらに掘り進めることとした。
- 16日 ドローンによる全体写真撮影。
- 同日 5H（99H）の掘り下げにより、5H（99H）と調査対象範囲との間にわずかに住居のプランが確認され7H（101H）とする。
- 17日 6H（100H）を掘り進めたところ、ほとんど煙道をもたないカマドが存在することが判明。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残しているものであった。
- 25日 基本土層の把握及び旧石器時代の遺構・遺物を確認するため、2×2mを基本としたトレンチを4か所設定し、掘り下げを開始する。
- 10月5日 全ての調査を終了する。撤収作業。
- 6日～8日 重機を搬入し、埋め戻し作業を行う。埋め戻し完了後、事業主へ引き渡す。

	7月					8月					9月					10月									
	5日	10日	15日	20日	25日	30日	5日	10日	15日	20日	25日	30日	5日	10日	15日	20日	25日	30日	5日	10日	15日	20日	25日	30日	
表土剥ぎ	7.28					7.30																			
95H						8.3	8.5																		
96H						8.3						9.29													
97H						8.5											10.2								
98H						8.12										9.30									
99H						8.30					9.30														
100H											9.9					9.25									
101H											9.19					9.25									
645D						8.4																			
646D						8.23																			
647D						8.23																			
648D											9.14														
649D						8.26																			
650D						8.26																			
651D						8.30																			
3T											9.30					10.5									
基本土層											9.25					10.5									
埋め戻し																10.6					10.8				

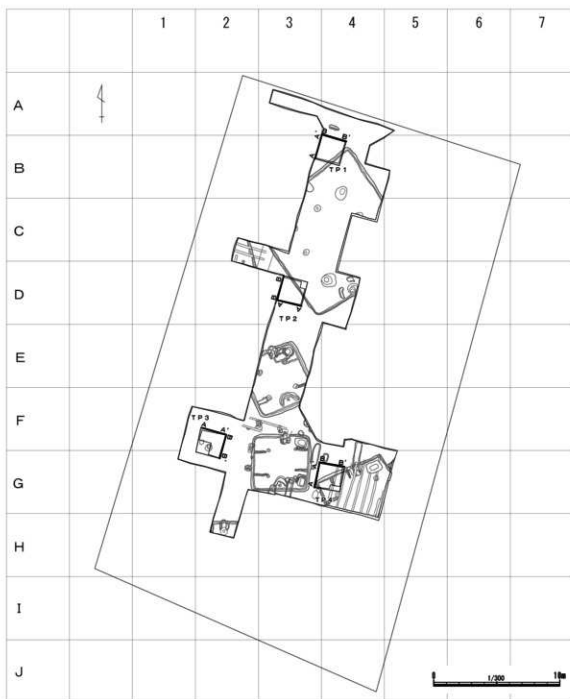
第2表 発掘調査工程表



第4図 遺構分布図(1/250)

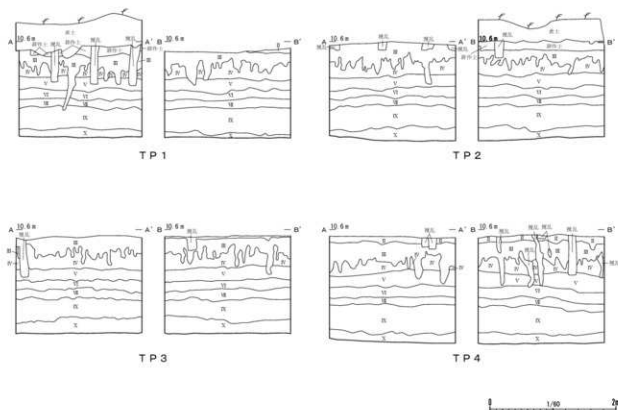
### 第3節 基本層序

基本層序の確認と旧石器時代の調査のため、 $2 \times 2$ mを基本とした試掘坑を4か所（TP1～4）に設定した（第5図）。それぞれ立川ローム層第X層が確認されるまで掘り下げ、表土層から約1.70m、遺構確認面から約1.25～1.30mの深さにおいて第X層が確認された。II層からX層が立川ロームII～X層に相当する。なお、第VIII層は確認されなかった。表土は現在までの耕作土による黒色土層で、TP1、



第5図 試掘坑配置図（1/300）





第6図 基本層序（1／60）

TP2においては表土直下に旧耕作土層と考えられる軟質の暗褐色土が確認される。II層はTP1の北面、TP4を除き、遺構確認面とほぼ同じ高さであるため削平を受け確認されなかった。

II層～X層の基本層序は以下の通りである。

- II層 黄褐色土のローム漸移層。黒色土粒を多量含む。
- III層 黄褐色土のソフトローム ロームブロック（φ30mm大）を含む。
- IV層 淡黄橙色のハードローム 黒色スコリアを多く含む。
- V層 淡暗褐色のハードローム 赤色スコリア・黒色スコリアを多く含む。第一黒色帯。
- VI層 黄暗褐色のハードローム 赤色スコリア・白色粒子を少し含む。AT包含層準。
- VII層 暗褐色のハードローム 赤色スコリア・黒色スコリアを少し含む。第二黒色帯上部。
- IX層 明黒褐色のハードローム 赤色スコリア・白色粒子を少し含む。第二黒色帯下部。
- X層 黄橙色のハードローム 赤色スコリア・黒色スコリア・白色粒子を微量含む。

## 第3章 検出された遺構・遺物

### 第1節 縄文時代の遺構

#### (1) 概要

縄文時代の土坑1基(645D)が検出された。他に土坑、ピットは確認されなかったが、遺構外出土遺物に一定量の縄文土器が認められることから、周辺に遺構が存在している可能性、後世の遺構により削平されてしまった可能性も考慮される。

#### (2) 土坑

##### 645号土坑

**遺 構** (第7図)

**[位 置]** (A-4)グリッド

**[検出状況]** 調査区北部において検出された。一部攪乱の影響を受ける。

**[構 造]** 平面形：楕円形。壁：約45°で立ち上がる。断面形は皿状を呈す。規模：長軸0.84m/短軸0.30m/深さ24cm。主軸方位：N-72°-W。

**[覆 土]** 3層に分層される。

**[遺 物]** なし。

**[時 期]** 覆土の観察から縄文時代と思われる。



第7図 土坑(1/60)

### 第2節 古墳時代後期の遺構・遺物

#### (1) 概要

古墳時代後期の住居跡7軒(95H~101H)、ピット4本(1・2・6・7P)が検出された。一部に耕作による影響を受けているが、遺存状況は比較的良好である。大型の住居跡が1軒(96H)、建替えが行われた住居跡が1軒(97H)である。また、99Hと101Hが調査区境で重複して確認された。

#### (2) 住居跡

##### 95号住居跡

**遺 構** (第8図)

〔位置〕 (C・D-2) グリッド

〔検出状況〕 調査区北西部において検出された。東壁のみ確認され、調査区外へと広がる。1Pに切られ、壁面、床面の一部は耕作による攪乱を受ける。1Pは遺構確認面上で確認されたピットだが、95Hの覆土中で完結し、床面まで達していない。

〔構造〕 平面形：不明だが方形と推察される。規模：南北軸現況2.17m／東西軸現況1.80m／確認面からの深さ29cm。壁：80°で立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：東壁に確認される。上幅25cm／下幅15cm／床面からの深さ16cm。床面：貼床は認められなかった。カマド：調査区内では確認されなかった。貯蔵穴：調査区内では確認されなかった。柱穴：調査区内では確認されなかった。入口施設：調査区内では確認されなかった。

〔覆土〕 9層に分層される。覆土は比較的しまりがある。

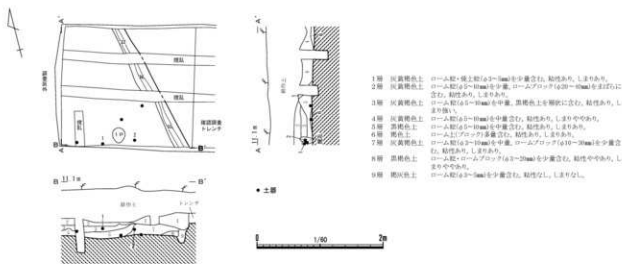
〔遺物〕 土師器環・裏形土器の9点が出土した。遺物は住居跡南側に、まとまって出土している。

〔時期〕 古墳時代後期（6世紀中葉）。

〔遺物〕 (第9図、図版11-1、第3表)

〔土器〕 (第9図1・2、図版11-1-1・2、第3表)

1は土師器環形土器で、2は土師器裏形土器である。いずれも、口縁部～頸部のみの破片である。



第8図 95号住居跡(1/60)



第9図 95号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

検出番号 図版番号	種類 名称	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・敷土	出土位置
第9図1 図版11-1-1	土師器 環	口縁部 20%	口 [16.2] 高 [3.0]	有段杯/口縁部は直線的に外傾し、底部との境に明確な段差を有する/内外面黒彩	内外面：横ナデ	赤褐色/砂粒・白色 粒子	東側の覆土
第9図2 図版11-1-2	土師器 裏	口縁部一頸部 破片	高 [3.5]	口縁部はやや肥厚し、外反する	内面：ハケによる横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、頸部に縦位へナデナ	浅黄褐色土/石莖・ チャート・黒色粒子	西側の覆土

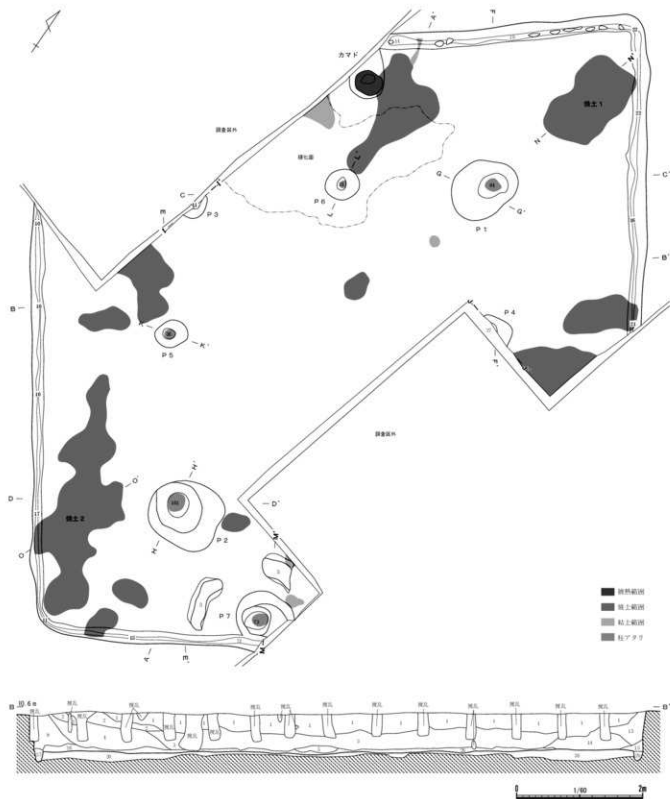
第3表 95号住居跡出土土器一覧

96号住居跡

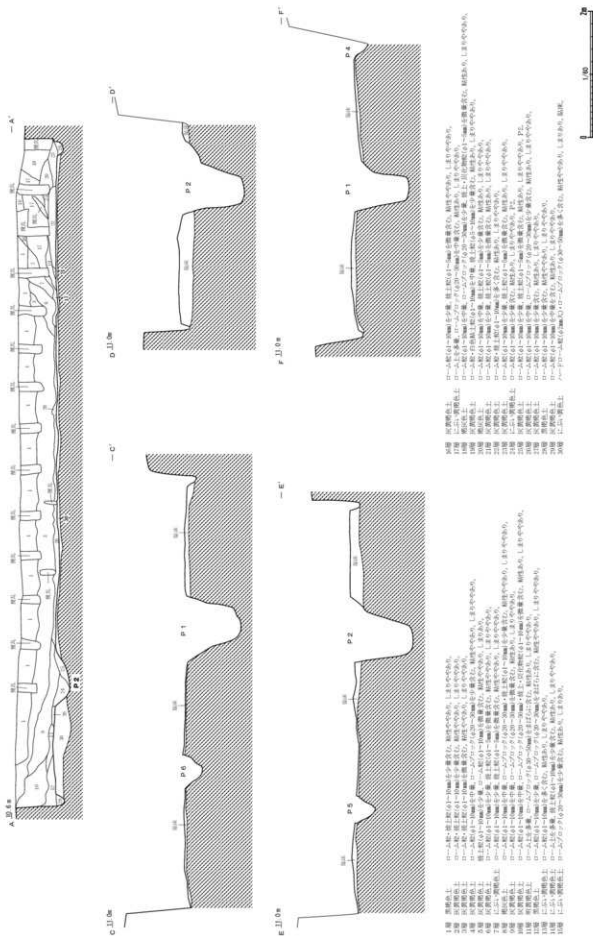
**遺構** (第10～15図)

[位置] (B・C・D-3・4) グリッド

[検出状況] 調査区北寄りで検出された。北西隅、南東隅は調査区外へと広がる。

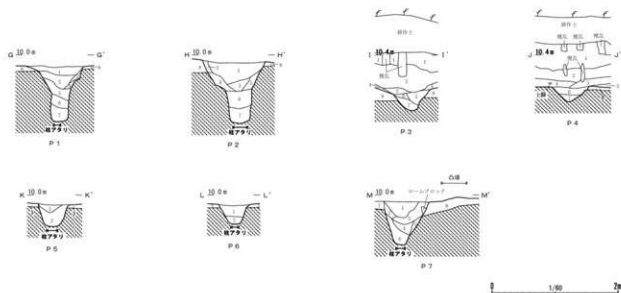


第10図 96号住居跡1 (1/60)



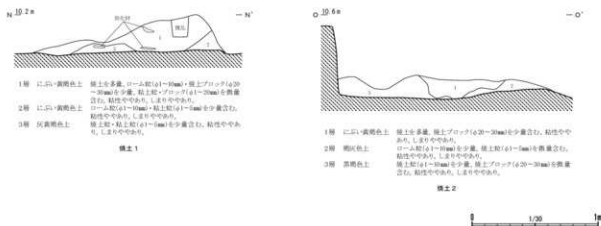
第11図 96号住居跡2 (1/60)

1 階 須賀赤土  
 2 階 須賀赤土  
 3 階 須賀赤土  
 4 階 須賀赤土  
 5 階 須賀赤土  
 6 階 須賀赤土  
 7 階 須賀赤土  
 8 階 須賀赤土  
 9 階 須賀赤土  
 10 階 須賀赤土  
 11 階 須賀赤土  
 12 階 須賀赤土  
 13 階 須賀赤土  
 14 階 須賀赤土  
 15 階 須賀赤土  
 16 階 須賀赤土  
 17 階 須賀赤土  
 18 階 須賀赤土  
 19 階 須賀赤土  
 20 階 須賀赤土  
 21 階 須賀赤土  
 22 階 須賀赤土  
 23 階 須賀赤土  
 24 階 須賀赤土  
 25 階 須賀赤土  
 26 階 須賀赤土  
 27 階 須賀赤土  
 28 階 須賀赤土  
 29 階 須賀赤土  
 30 階 須賀赤土  
 31 階 須賀赤土  
 32 階 須賀赤土  
 33 階 須賀赤土  
 34 階 須賀赤土  
 35 階 須賀赤土  
 36 階 須賀赤土  
 37 階 須賀赤土  
 38 階 須賀赤土  
 39 階 須賀赤土  
 40 階 須賀赤土  
 41 階 須賀赤土  
 42 階 須賀赤土  
 43 階 須賀赤土  
 44 階 須賀赤土  
 45 階 須賀赤土  
 46 階 須賀赤土  
 47 階 須賀赤土  
 48 階 須賀赤土  
 49 階 須賀赤土  
 50 階 須賀赤土  
 51 階 須賀赤土  
 52 階 須賀赤土  
 53 階 須賀赤土  
 54 階 須賀赤土  
 55 階 須賀赤土  
 56 階 須賀赤土  
 57 階 須賀赤土  
 58 階 須賀赤土  
 59 階 須賀赤土  
 60 階 須賀赤土

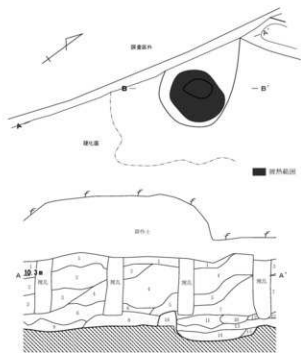


- P1**
- 1層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)・ブロック(φ20-30mm)・粘土粒(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 2層 二色・黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)・ブロック(φ20-30mm)・粘土粒(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 3層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 4層 灰黄褐色土 ローム土を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 5層 二色・黄褐色土 ローム土を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 6層 灰黄褐色土 ローム土を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 7層 二色・黄褐色土 ローム土を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 8層 二色・黄褐色土 ハードローム粒(φ2mm)×ロームブロック(φ30-50mm)を多く含む。粘性ややあり、しまりあり、陥没。
- P2**
- 1層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を中量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 2層 二色・黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘土粒(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 3層 黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を中量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 4層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 5層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘土粒(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 6層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を中量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 7層 灰黄褐色土 ハードローム粒(φ2mm)×ブロック(φ20-30mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 8層 二色・黄褐色土 ハードローム粒(φ2mm)×ブロック(φ20-30mm)を多く含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- P3**
- 1層 黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 2層 黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 3層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 4層 黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 5層 二色・黄褐色土 白色土を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 6層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 7層 二色・黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 8層 二色・黄褐色土 ハードローム粒(φ2mm)×ロームブロック(φ30-50mm)を多く含む。粘性ややあり、しまりあり、陥没。

- P4**
- 1層 黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 2層 黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 3層 黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 4層 黄褐色土 黄土(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 5層 黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 6層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 7層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 8層 二色・黄褐色土 ハードローム粒(φ2mm)×ロームブロック(φ30-50mm)を多く含む。粘性ややあり、しまりあり、陥没。
- P5**
- 1層 黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 2層 二色・黄褐色土 ローム土を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 3層 二色・黄褐色土 ハードローム粒(φ2mm)×ロームブロック(φ30-50mm)を多く含む。粘性ややあり、しまりあり、陥没。
- P6**
- 1層 二色・黄褐色土 ロームブロック(φ30-50mm)を中量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 2層 二色・黄褐色土 ローム土を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 3層 二色・黄褐色土 ハードローム粒(φ2mm)×ロームブロック(φ30-50mm)を多く含む。粘性ややあり、しまりあり、陥没。
- P7**
- 1層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 2層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 3層 二色・黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 4層 二色・黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 5層 黄褐色土 ハードローム粒(φ2mm)×ブロック(φ20-30mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 6層 灰黄褐色土 ローム層(φ1-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
  - 7層 二色・黄褐色土 ハードローム粒(φ2mm)×ロームブロック(φ30-50mm)を多く含む。粘性ややあり、しまりあり、陥没。

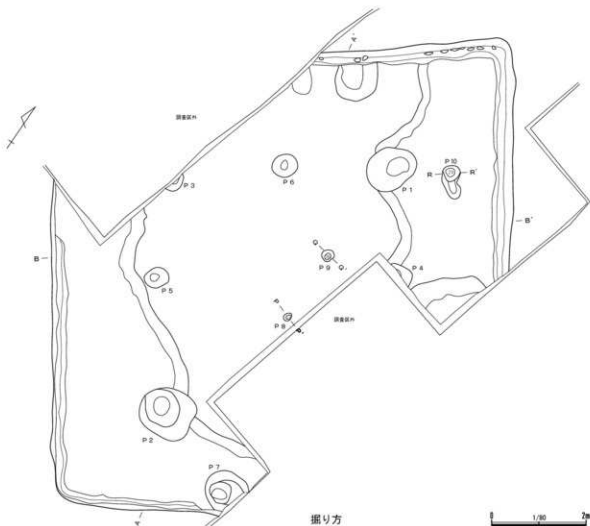
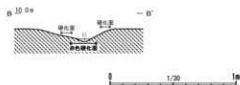


第12図 96号住居跡3 (1/60・1/30)

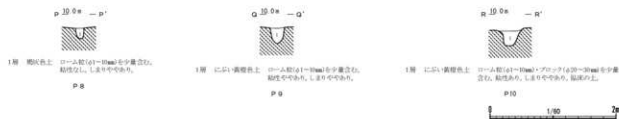


- 1層 二色い黄褐色土 埴土を多量、ローム殻(φ1~10mm)・粘土ブロック(φ20~30mm)を少量、粘土層・ブロック(φ1~20mm)を散見含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 2層 二色い黄褐色土 ローム殻(φ1~10mm)・粘土層(φ1~10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 3層 灰黄褐色土 ローム殻(φ1~10mm)を散見含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 4層 灰黄褐色土 埴土層・粘土層(φ1~5mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 5層 灰黄褐色土 ローム殻・埴土層(φ1~10mm)・粘土層・ブロック(φ1~20mm)を散見含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 6層 灰黄褐色土 埴土層・粘土層(φ1~10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 7層 二色い黄褐色土 ローム殻(φ1~10mm)を散見、埴土層(φ1~10mm)・粘土層・ブロック(φ1~20mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 8層 灰黄褐色土 粘土層(φ1~10mm)を少量、埴土層(φ1~10mm)を散見含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 9層 黄褐色土 粘土層(φ1~10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 10層 二色い黄褐色土 埴土を多量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 11層 二色い黄褐色土 粘土層(φ1~10mm)を少量、埴土ブロック(φ20~30mm)を散見含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 12層 二色い黄褐色土 埴土層(φ1~10mm)を散見含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 13層 黄褐色土 埴土層(φ1~10mm)・埴土ブロック(φ20~30mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 14層 黄褐色土 粘土層(φ1~10mm)・粘土ブロック(φ20~30mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 15層 黄褐色土 埴土層(φ1~10mm)を散見、埴土層(φ1~10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 16層 二色い黄褐色土 埴土を多量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 17層 二色い黄褐色土 埴土層・埴土層(φ1~10mm)を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。

カマド



第13図 96号住居跡4 (1/30・1/80)



第14図 96号住居跡5 (1/60)

**[構造]** 平面形：方形。規模：南北軸推定9.60m／東西軸9.82m／確認面からの深さ71cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-34°-W。壁溝：調査区内は全周している。北側壁溝に工具痕と思われる凹凸が認められる。上幅12～32cm／下幅4～24cm／深さ22cm。床面：硬化面は北側カマド周辺のみ確認された。掘り方は主柱穴を結んだ範囲の外側が深く掘り込まれ、厚さ4～26cmの貼床が施されていた。壁際の床面直上において炭化物を混入する焼土の広がりか認められる。カマド：北西壁ほぼ中央に確認され、一部は調査区外である。調査当初にカマドと認識できなかったこともあり袖等の遺存状態はあまり良くない。長軸現況0.68m／短軸現況0.50m／深さ69cm。貯蔵穴：調査区内では検出されなかった。柱穴：9本（主柱穴3本：P1～3、補助柱穴3本：P4～6、掘り方において3本：P8～10）確認された。主柱穴はP3は調査区外に広がるため判然としないが、住居隅の対角線上に配置されたと考えられ、各主柱穴間に補助柱穴が配置される構成となる。主柱穴は長軸50～52cm／短軸40～50cm／深さ31～36cm、P1、2は底部に柱アタリを残す。補助柱穴は長軸20～70cm／短軸40～50cm／深さ31～36cm、P5、6は底部に柱アタリを残す。P8～10は長軸20～70cm／短軸14～40cm／深さ17～29cm。入口施設：南東壁中央やや西寄りに検出。凸堤内部にビット（P7）。長軸現況92cm／短軸現況69cm／深さ73cm、底部に柱アタリを残す。凸堤は馬蹄形状に造られるが間断があり、上幅16～28cm／下幅28～44cm／高さ2～4cm。

**[覆土]** 30層に分層される。覆土上層は耕作による攪乱の影響を受けているが、床面には及んでいない。基本的に上層は自然堆積の様相を示しており、全体的にややしまりが認められる。

**[遺物]** 土器器坏・壺・甕・甎形土器の361点、土製品（土鍾）2点、鉄製品（不明品）1点等が出土した。遺物の出土傾向として、住居北半分から多くの遺物が出土している。特に坏は北半分側から出土する傾向が見られる。なお、出土した炭化材3点・炭化種実1点について樹種同定を行い、炭化材はコナラ属コナラ節、イネ科草本、炭化種実については桃核であることが判明している。また、炭化材1点について放射性炭素年代測定を行い、6世紀中～後半の歴年代を得ている。詳細は付編参照。

**[時期]** 古墳時代後期（6世紀後葉）。

**[遺物]** (第16・17図、図版11-2・12-1、第4表)

**[土器]** (第16・17図1～29、図版11-2・12-1-1～29、第4表)

1～16は土器器坏形土器、17は土器器壺形土器、18～28は土器器甕形土器、29は土器器甎形土器である。

**[土製品]** (第17図30・31、図版12-1-30・31、第4表)

30・31は土鍾である。

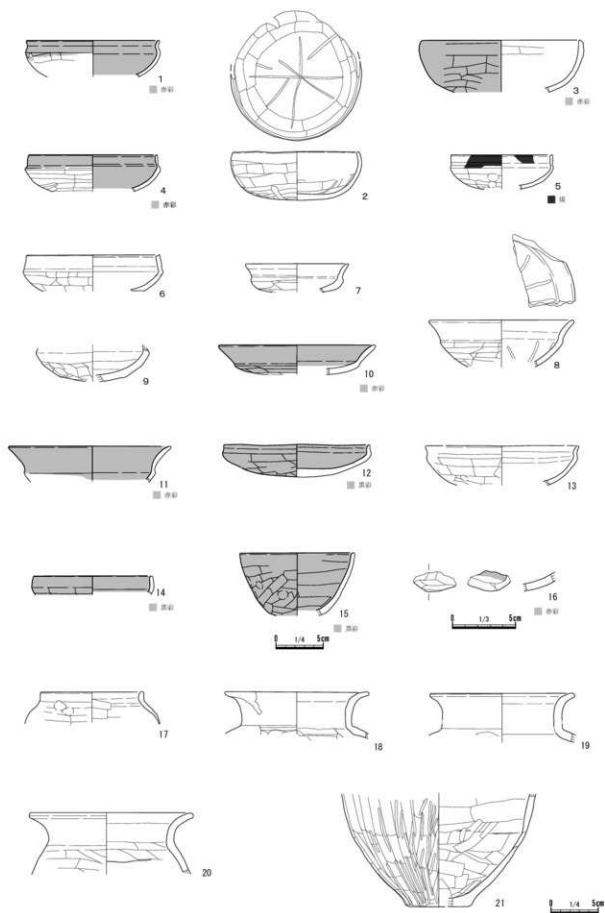
**[鉄製品]** (第17図32、図版12-1-32、第4表)

32は器種不明の鉄製品で、板状の製品の裏面中央部に円形の凹みが観察される。

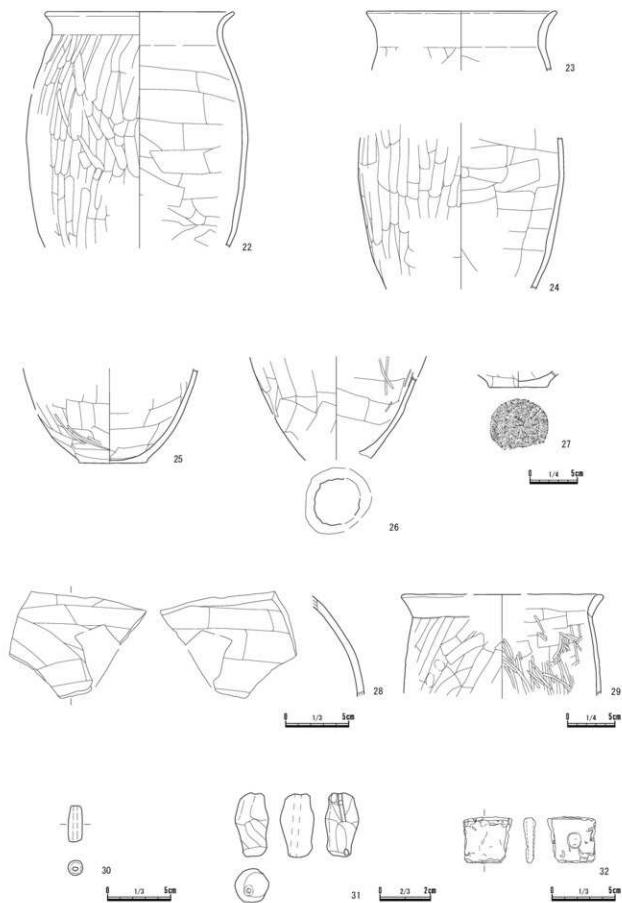




第15図 96号住居跡遺物出土状態(1/80・1/30)



第16図 96号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第17図 96号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3・2/3)

## 第3章 検出された遺構・遺物

探検番号 探検番号	種別 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	形状・形態	文様・調整等	色調・胎土	出土位置
第16図1 探検11-2-1	土師器 環	口縁部～ 体部下平 20%	□ (14.0) 高 [3.9]	いわゆる比型環/口縁部は 強く外反する/底部と口縁部 との間に明確な段を有す/内 面及び口縁部外面は赤彩/入 部黒土附層	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下横位 へウナデ	赤褐色/チャート・ 白色粒子・小礫	P1北側の覆 土上層
第16図2 探検11-2-2	土師器 環	口縁部～底部 70%	□ (13.2) 高 [5.2]	浅タイプ/口縁部は内湾する/ 底面は丸や平型	内面：口縁部横ナデ、以下横位へウナデ、放射状 暗文がうろく集文される/外面：口縁部横ナデ、 以下横・斜位へウナデ	にぶい褐色/チャー ト・白色粒子・砂粒	カマ下南側 のほぼ床面 上
第16図3 探検11-2-3	土師器 環	口縁部～ 体部下平 30%	□ (16.6) 高 [5.5]	塊タイプ/体部は丸みをもつ /外面赤彩	内面：口縁部横ナデ、以下へウナデ/外面：口 縁部横ナデ、以下横位へウナデ	褐色/長石・チャー ト・白色粒子	P7西側の覆 土上層
第16図4 探検11-2-4	土師器 環	口縁部～ 体部下平 20%	□ (13.6) 高 [3.8]	有段環/口縁部は内傾し、口 縁部と底部の間に明確な段を 有する/内面及び外面口縁部 赤彩	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下横 斜位へウナデ	褐色/チャート・P4 石英・砂粒	P4西側のほ ぼ床面上
第16図5 探検11-2-5	土師器 環	口縁部～ 体部下平 20%	□ (10.8) 高 [3.1]	有段環/口縁部はほぼ直立す る/口縁部と底部の間に明確 な段を有する/口縁部内外面 に灰付層	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下横位 へウナデ、一部に灰面押仕	にぶい褐色/石英・ チャート・長石	P4西側のほ ぼ床面上
第16図6 探検11-2-6	土師器 環	口縁部～ 体部下平 35%	□ (14.0) 高 [3.8]	有段環/口縁部は内傾する/ 口縁部は面取り/口縁部と体 部の間に明確な段を有する	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下横位 へウナデ	にぶい褐色/石英・ チャート・長石	住居東壁寄 りのほぼ床 面
第16図7 探検11-2-7	土師器 環	口縁部～ 底部下平 10%	□ (11.0) 高 [3.0]	有段環/口縁部は強く外反す る/口縁部と底部の間に明確 な段を有する/体部は扁平	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下横 斜位、へウナデ	にぶい褐色/白色粒 子・黒色粒子	P1南側の覆 土上層
第16図8 探検11-2-8	土師器 環	口縁部～ 体部下平 30%	□ (13.0) 高 [6.0]	内面：口縁部は外反しなが ら深く/口縁部と底部の間に 明確な段を有する	内面：口縁部横ナデ、以下横位へウナデ/外 面：口縁部横ナデ、以下横位へウナデ	にぶい褐色/チャー ト・砂粒・白色粒子	カマ下付近 のほぼ床面 上
第16図9 探検11-2-9	土師器 環	体部～底部 30%	高 [3.9]	有段環/口縁部欠損/口縁部 と底部の間に明確な段を有す る	内面：口縁部は横ナデ、以下横位へウナデ/外 面：口縁部から段下部横ナデ、以下横・斜位 へウナデ	にぶい褐色/石英・ 長石・黒褐色粒子・ 砂粒	覆土
第16図10 探検11-2-10	土師器 環	口縁部～ 底部下平 40%	□ (16.6) 高 [3.2]	有段環/口縁部は直線的に外 傾し大きく開く/口縁部と底 部の間に明確な段を有する/ 底面の内外面中心付近を除き 赤彩	内面：口縁部横ナデ、以下ナデ/外面：口縁部 横ナデ、以下横位へウナデ	赤褐色/チャート・ 砂粒	南側壁近く の床面直中 ・覆土直中 から散在的
第16図11 探検11-2-11	土師器 環	口縁部～ 体部下平 10%	□ (16.4) 高 [3.8]	有段環/口縁部は強く外反 し、底部の間に明確な段を 有する/内面と口縁部外面赤 彩	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下斜位 へウナデ	褐色/白色粒子・P1 黒色粒子	P1の覆土上 層
第16図12 探検11-2-12	土師器 環	体部～底部 45%	□ (15.4) 高 [3.5]	有段環/口縁部は強く立ち上 がり、口縁部と底部の間に明 確な段を有す/内外面黒彩	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下斜位 へウナデ	灰褐色/石英・チャ ート・砂粒	カマ下南側 の覆土
第16図13 探検11-2-13	土師器 環	口縁部～ 体部下平 30%	□ (16.0) 高 [4.2]	有段環/口縁部は強く外反す る/口縁部と底部の間に段を 有する	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下横位 へウナデ	にぶい褐色/石英・ チャート・赤褐色粒 子	カマ下南側 の覆土
第16図14 探検11-2-14	土師器 環	口縁部～ 体部上位 30%	□ (12.4) 高 [2.0]	有段環/口縁部は内傾する/ 口縁部と底部の間に段を有 する/口縁部内外面黒彩	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下横位 へウナデ	灰褐色/長石・白色 粒子	P4北側のほ ぼ床面上
第16図15 探検11-2-15	土師器 環	口縁部～ 底部下平 25%	□ (12.0) 高 [6.7]	深きタイプ/口縁部から体部 にかけて内湾しつつ開く/内 外面黒彩	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、以下横 斜位へウナデ、一部に灰面押仕	灰褐色/石英・長石 ・砂粒	覆土
第16図16 探検11-2-16	土師器 環	体部～底部 破片	高 [1.5]	体部破片/内面のみ上平赤彩	内面：横ナデ/外面：横・斜位へウナデ	にぶい褐色/角閃 石・チャート・白色 砂粒	覆土
第16図17 探検11-2-17	土師器 環	口縁部～ 体部下平 20%	□ (10.6) 高 [3.3]	頸部は短く、ほぼ垂直に立ち 上がる/頸部は丸みをもつて 張り出す/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下横位へウナデ/外 面：口縁部横ナデ、以下横位へウナデ、一部に 灰面押仕	褐色/角閃石・チャ ート・砂粒	P1付近のほ ぼ床面・床 面
第16図18 探検11-2-18	土師器 環	口縁部～ 体部上位 10%	□ (15.0) 高 [5.1]	頸部は直線的に立ち上がり、 口縁部は強く外反する/在地 系	内面：口縁部横ナデ、以下横ナデ、頸部との接 続部は縦かへウナデで接合する/外面：口縁部 横ナデ以下、へウナデ	明赤褐色/石英・ チャート・白色粒子	P5・6間の 覆土上層
第16図19 探検11-2-19	土師器 環	口縁部～ 体部上位 20%	□ (14.6) 高 [5.2]	口縁部は強く外反する/頸部 は直立し、頸部へ向かって張 り出す/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下横位へウナデ/外 面：口縁部横ナデ、以下横・斜位へウナデ	明赤褐色/石英・角 閃石	北西側及び 中央部の覆 土から散在 的
第16図20 探検11-2-20	土師器 環	口縁部～ 体部下平 20%	□ (17.5) 高 [6.5]	口縁部は強く外反する/頸部 は丸や平型/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下横・斜位へウナ デ/外面：口縁部横ナデ、以下横・斜位ハ ウナデ	にぶい褐色/長石・ チャート・赤褐色粒 子	南側コーナ ーの覆土中 層
第16図21 探検11-2-21	土師器 環	頸部下平～ 底部 30%	高 [11.9] 底 [7.0]	頸部は丸みをもつて張り出 す/外面磨ける/在地系	内面：多方面のへウナデ/外面：縦位へウナ デ、斜位へウナデ調整	にぶい褐色/石英・ 長石・チャート	北東コーナ ーの床面 上
第17図22 探検12-1-22	土師器 環	口縁部～ 体部下平 50%	□ 19.7 高 [25.0]	口縁部は外反する/最大径は 頸部上位にもつ/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下へウナデ/外 面：口縁部横ナデ、以下縦方向のへウナ デ、斜位方向のへウナデ	にぶい褐色/石英・ チャート・白色粒子	南側コーナ ーを中心 に、床面・ 床面上・覆 土から散在 的

第4表 96号住居跡出土土器・土製品・鉄製品一覧(1)

発掘番号 採取番号	種別 種類	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・粘土	出土位置
第17図23 図版12-1-23	土師器 甕	口縁部～ 胴部上半 20%	口 [19.4] 底 [6.3]	口縁部はゆるやかに外反し、 胴部と胴部の境はスムーズ/ 在地系	内面：口縁部横ナデ、以下斜位ヘラナデ/外 面：口縁部横ナデ、以下縦・斜位ヘラ削り	にぶい黄褐色/石 灰・白色粘土・砂粒	中央部腹土 から散在的
第17図24 図版12-1-24	土師器 甕	胴部上半～ 下半 40%	高 [17.6]	胴部上方は張り出し、下方は まばらな/在地系	内面：横位ヘラナデ/外面：縦位ヘラ削り後、 一部ナデ	にぶい黄褐色/石 灰・チャート・砂粒	P1・4の周 のほぼ床面 直から散在 的
第17図25 図版12-1-25	土師器 甕	胴部中位～ 底部 40%	高 [16.0] 底 6.7	胴部から底部にかけて丸みをも つ/在地系	内面：横位ヘラナデ/外面：縦・斜位ヘラ削り後、 一部ヘラ磨き調整	にぶい褐色/長石・ チャート・白色粘土・ 砂粒	P4北側の床 面
第17図26 図版12-1-26	土師器 甕	胴部中位～ 底部 40%	高 [11.0]	胴部下部はゆがむ/笠部は粘 土混合部で欠損しており、胴 への転用か/在地系	内面：横位ヘラナデ後、まばらに斜位ヘラ磨き 調整/外面：縦・斜位ヘラ削り	にぶい褐色/石灰 ・チャート・砂粒	南コーナー 及び中央部 の床面直 上・腹土上・ 中継から散 在的
第17図27 図版12-1-27	土師器 甕	底部 破片	高 [1.7] 底 6.1	胴部は底部から立ちあがった 後外へ張り出す/在地系	内面：斜位ヘラナデ/外面：斜位ヘラ削り、直 面周辺は横位ヘラ削り/底面：縦・横位ヘラ削り	にぶい褐色/長石・ チャート・赤色粘土・ 黒色粘土	カマド西側 の腹土中継
第17図28 図版12-1-28	土師器 甕	胴部 破片	高 [8.5]	丸みをもつ内湾する胴部/ 在地系	内面：横位ヘラナデ/外面：横・斜位ヘラ削り 後ナデ	褐色/石灰・白色粘 土・砂粒	P3西側の腹 土中継
第17図29 図版12-1-29	土師器 甕	口縁部～ 胴部上半 20%	口 [20.4] 底 [10.5]	狭口縁/口縁部は外反する/ 胴部はゆるやかに丸みをもち、中 位で最大径を測るか/在地系	内面：口縁部は横ナデ、以下横ヘラナデ後、縦・ 斜位ヘラ磨き調整/外面：口縁部横ナデ、以下 斜位ヘラ削り、表面研直前	にぶい褐色/石灰 ・チャート・砂粒・褐 色粘土	カマド東側 腹土上層
発掘番号 採取番号	種別 器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第17図30 図版12-1-30	土製品 土鏝	2.9	1.25	1.1	4.6	中央部がややふくらむ/上下端は平坦/扁平な穴が貫通している/外面：縦位ヘ ラ削り・ナデ/色調・粘土は褐色、石灰・砂粒を含む	P5北側の腹 土上層
第17図31 図版12-1-31	土製品 土鏝	2.5	1.35	1.3	4.0	上下端部は平坦で、中央部が張り出す/上面中央から下面部にかけて斜めに径 1.5mmの穿孔/上面中央から体部中央に向け、幅1.5mmの溝が見られ、穿孔を渡っ たと思われる/色調・粘土は褐色、石灰・砂粒	P1腹土中継
発掘番号 採取番号	種別 器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第17図32 図版12-1-32	鉄製品 不明	3.7	3.9	9.5	22.1	ほぼ正方形を呈し、上方にわずかに厚みをもつ/表面は平坦、裏面中央部に円形 の浅い凹みが見られる	東側の腹土 上層

第4表 96号住居跡出土土器・土製品・鉄製品一覧(2)

## 97号住居跡

## 遺 構 (第18～22図)

[位 置] (E・F-2・3) グリッド

[検出状況] 調査区中央やや南寄りで検出された。北西隅、南東隅は調査区外へと広がる。調査区内で検出したカマドは1基であるが、貯蔵穴が3基検出され、また、主柱穴に造り替えが認められることから3回の建て替えが行われた住居と判断される。なお、住居を拡張した痕跡は確認できなかった。またカマドの天井部とカマド西側袖の一部を壊す形で7Pにより掘り込まれている。7P内出土土師器裏形土器と、住居跡出土土器との時期差はさほどないと考えられる。

[構 造] 3回の造り替えが行われており、新しい順にA～Cとした。基本的な構造で規模等に変化が確認されない付帯施設については共通の計測値となる。平面形：方形。規模：南北軸5.17m/東西軸4.90m/確認面からの深さ59cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-23°-W。壁溝：カマドを除き調査区内を全周している。東側壁溝、南側壁溝及び、西壁の一部において工具痕と思われる凹凸が認められる。上幅15～26cm/下幅5～14cm/床面からの深さ9cm。床面：硬化面はカマド南西、凸堤北側で確認された。掘り方は床面全体で確認され、床面は一面しか確認できず、厚さ2～22cmの貼床が施されていた。間仕切りが3か所確認される。P2へ延びる間仕切り1は長さ0.60m/幅0.20m/床面からの深さ14cm。P3へ伸びる間仕切り2は長さ0.76m/幅0.30m/床面からの深さ10cm。住居北東で床下から確認された間仕切り3は長さ0.86m/幅0.25～0.36m/床面からの深さ2～3cm。間仕切り1、2は住居Aに付帯するが、間仕切り3は住居B、Cのどちらに付帯するかは不明で

ある。カマド：北壁中央やや東寄りで確認された。貯蔵穴Cはカマド袖、焚口の一部の下にプランが確認されたため、調査区外に住居Cのカマドが存在している可能性が高い。残存状態は良く、粘土を主体として構築され、煙道付近の天井の一部が崩落せず残存していた。長軸現況1.16m/短軸現況0.87m/床面からの深さ54cm。貯蔵穴：カマド東側で新しい方から順にA～Cの3基が確認された。貯蔵穴Aについては床面レベルにおいて、遺物の出土状況等からプランを把握することができたが、貯蔵穴B・Cについてはカマドとの重複や遺物の出土状況から平面プランの把握が困難で、土層断面等から新旧関係を判断している。カマドに貯蔵穴Aは付帯するが、貯蔵穴Bは不明で、貯蔵穴Cは付帯しない。貯蔵穴A：長軸0.75m/短軸0.62m/床面からの深さ68cm/貯蔵穴Aに伴うと考えられる凸堤が確認される。長さ1.00m/幅0.35～0.55m/床面からの高さ7cm。貯蔵穴B：長軸現況0.50m/短軸現況0.30m/床面からの深さ36cm。貯蔵穴C：長軸1.04m/短軸0.62m/床面からの深さ58cm。柱穴：11本(住居A：主柱穴4本、入口施設1本、住居B・C：主柱穴5本、入口施設1本)確認された。P4・7～11については住居Aより古い住居B・Cのいずれかに対応するかは判然としない。ただし北東隅の柱穴3本(P1・7・11)については新旧関係が明らかである。また、P6は調査区外に広がっているが、いずれの時期においても住居隅の対角線上に配置されたと考えられる。主柱穴のビットは住居A(P1～3・6)：長軸39～48cm/短軸35～40cm/深さ48～59cm、住居B(P7)：貯蔵穴Cを掘り込む形で確認された。長軸38cm/短軸35cm/床面からの深さ76cm、住居C(P11)：長軸36cm/短軸32cm/床面からの深さ39cm。住居B・C(P4・9・10)：長軸34～58cm/短軸26～42cm/深さ58、68cm。入口施設：住居南側で半円状の凸堤に囲まれる形で床面から住居Aに付帯する1本(P5)、床下から住居B・Cに付帯する1本(P8)の柱穴が確認された。P5は長軸20cm/短軸18cm/床面からの深さ14cm。凸堤は上幅10～19cm/下幅20～44cm/高さ4cm。P8は長軸31cm/短軸25cm/床面からの深さ14cm。凸堤が付帯するかは不明。

〔覆土〕 30層に分層される。覆土上層は耕作による攪乱の影響を受けているが、床面には及んでいない。やや特徴的な堆積状況を示しており、南側はローム土を多量に含んでおり、全体的な土層を見ても中層～下層にロームブロックを比較的多く含んだ層となっている。

〔遺物〕 土師器高環・環・甕・甎形土器の271点、土製品(支脚)2点、石製品(玉造製作関連の剥片・砥石)3点、桃核2点が出土した。遺物は貯蔵穴周辺と住居中央から西側に集中して出土している。特にカマド東側と壁溝の交点付近、カマド西側と壁溝の交点付近からそれぞれ甕が正位で出土したほか、甕と甎が貯蔵穴の右角を囲むように出土した。これらは貯蔵穴B・C上に位置するため、貯蔵穴B・Cの埋没後に配置されたと考えられる。なお、出土炭化材2点・炭化種実3点について樹種同定を行い、炭化材はコナラ属コナラ節、炭化種実は桃核であることが判明している。また、炭化材1点について放射性炭素年代測定を行い、5世紀前半～6世紀後半の歴年代を得ている。詳細は付編参照。

〔時期〕 古墳時代後期(6世紀前半～中葉)。

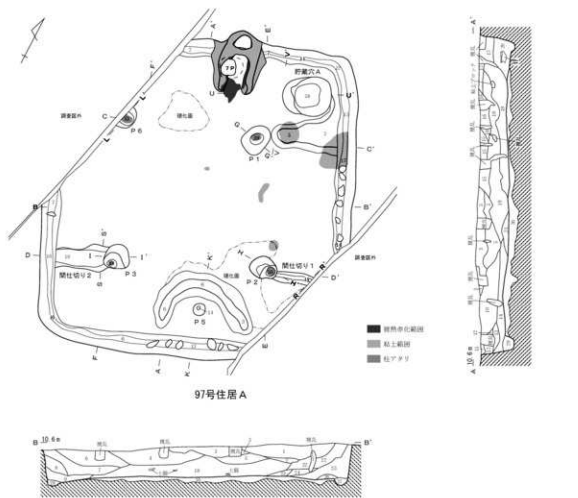
〔遺物〕 (第23～25図、図版12-2・13・14・15-1、第5表)

〔土器〕 (第23～25図1～28、図版12-2・13・14・15-1-1～28、第5表)

1は土師器高環形土器で、環部が97号住居跡、脚部が98号住居跡から出土した遺構間接合遺物である。環部が97号住居跡P4付近床面からの出土、脚部は98号住居跡の上層～中層の出土であるため、97号住居跡の遺物として扱うこととする。2～9は土師器環形土器で、10～23は土師器甕形土器、24～28は土師器甎形土器である。

[土製品] (第25図29・30、図版15-1-29・30、第5表)  
29・30は土製品の支脚である。30はカマド中央部からの出土である。  
[石製品] (第25図31～33、図版15-1-31～33、第5表)

31は硬質細粒凝灰岩の剥片で、玉造製作関連のものと思われる。住居跡覆土からの出土である。  
32・33は砥石である。

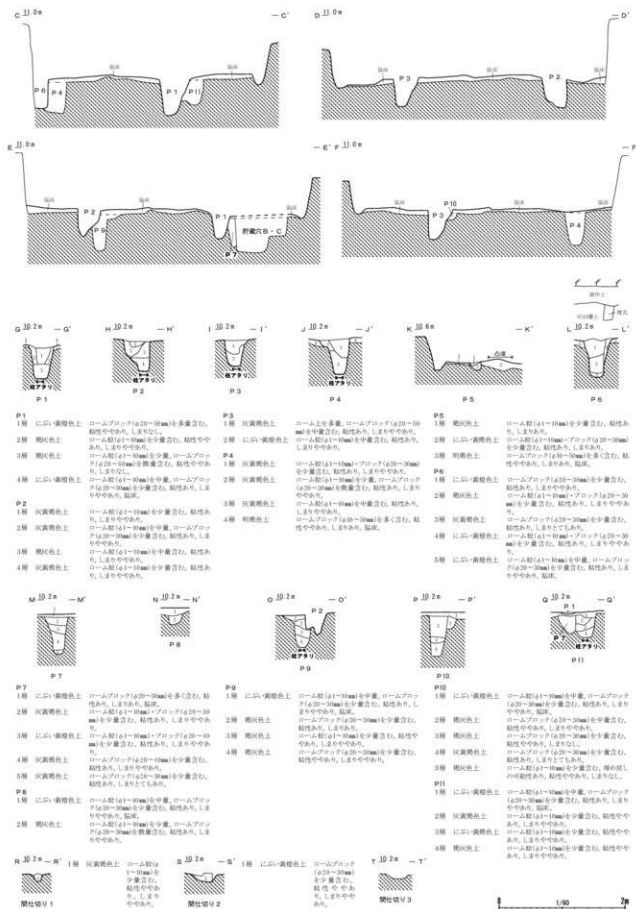


97号住居A

- |           |   |            |   |
|-----------|---|------------|---|
| 1層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を中量、ロームブロック(a20-30cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                 | 11層 灰黄褐色土  | ローム層・自然土層(a1-10cm)を少量、ロームブロック(a20-30cm)・粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。 |
| 2層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                                      | 12層 灰黄褐色土  | ローム層・粘土層(a1-10cm)を少量、自然土層・ブロック(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。              |
| 3層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                      | 13層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 4層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)・ブロック(a20-30cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                       | 14層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 5層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)・ブロック(a20-30cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                       | 15層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 6層 濃い黄褐色土 | ローム層(a1-10cm)を中量、ロームブロック(a20-30cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。 | 16層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 7層 赤褐色土   | ローム層(a1-10cm)を中量、ロームブロック(a20-30cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                 | 17層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 8層 赤褐色土   | ローム層(a1-10cm)を中量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                      | 18層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 9層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、ロームブロック(a20-30cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                 | 19層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 10層 赤褐色土  | ローム土を少量、ロームブロック(a20-30cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                          | 20層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 11層 赤褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、ロームブロック(a20-30cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                 | 21層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 12層 黄褐色土  | ローム土を少量、ロームブロック(a20-30cm)を少量、自然土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。         | 22層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 13層 灰黄褐色土 | ローム層(a1-10cm)を多く含む。粘性あり、しまりや中あり。                                      | 23層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
| 14層 灰黄褐色土 | ローム層(a1-10cm)を中量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                      | 24層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
|           |   | 25層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
|           |   | 26層 濃い黄褐色土 | ローム層(a1-10cm)を少量、粘土層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。                        |
|           |   | 27層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。  |
|           |   | 28層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。  |
|           |   | 29層 灰黄褐色土  | ローム層(a1-10cm)を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。  |
|           |   | 30層 濃い黄褐色土 | ローム土を少量含む。粘性あり、しまりや中あり。   |

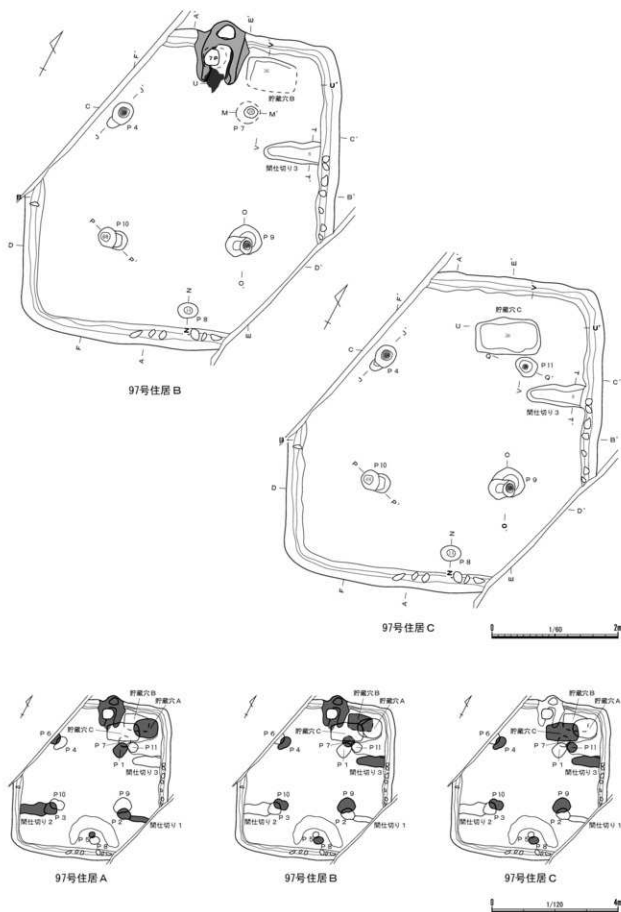
第18図 97号住居跡1 (1/60)

第3章 検出された遺構・遺物

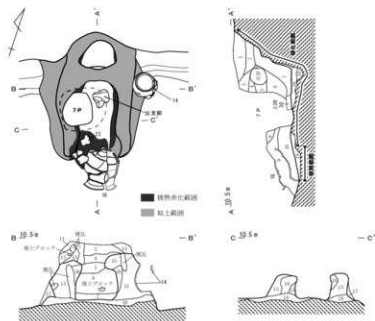


第19図 97号住居跡2 (1/60)





第20図 97号住居跡3 (1/60・1/120)



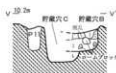
カマド

1/30



野蔵穴 A・B・C

- 1層 灰黄褐色土  
 コームブロッコ (φ10-10mm) を多く含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 野蔵穴A
- 2層 灰黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm) を中量。壁土粒 (φ1-10mm)・粘土粒・ブロッコ (φ1-20mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 3層 灰黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm)・壁土粒・ブロッコ (φ1-20mm)・粘土粒・ブロッコ (φ1-20mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 4層 灰黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm)・ブロッコ (φ20-30mm) を少量。粘土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 5層 灰黄褐色土  
 コームブロッコ を多量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 6層 褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm) を少量。壁土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 野蔵穴B
- 7層 灰黄褐色土  
 コーム粒・粘土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 8層 二色・黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 9層 灰黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm)・ブロッコ (φ20-30mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 野蔵穴C
- 10層 灰黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm) を中量。壁土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 11層 褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 12層 褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm)・ブロッコ (φ20-30mm)・粘土粒・ブロッコ (φ1-20mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 13層 褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm)・ブロッコ (φ20-30mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。



野蔵穴B

- 1層 二色・黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 2層 二色・黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm) を少量。コームブロッコ (φ20-30mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 3層 灰黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm)・ブロッコ (φ20-30mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 4層 褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm)・ブロッコ (φ20-30mm)・粘土粒・ブロッコ (φ1-20mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。

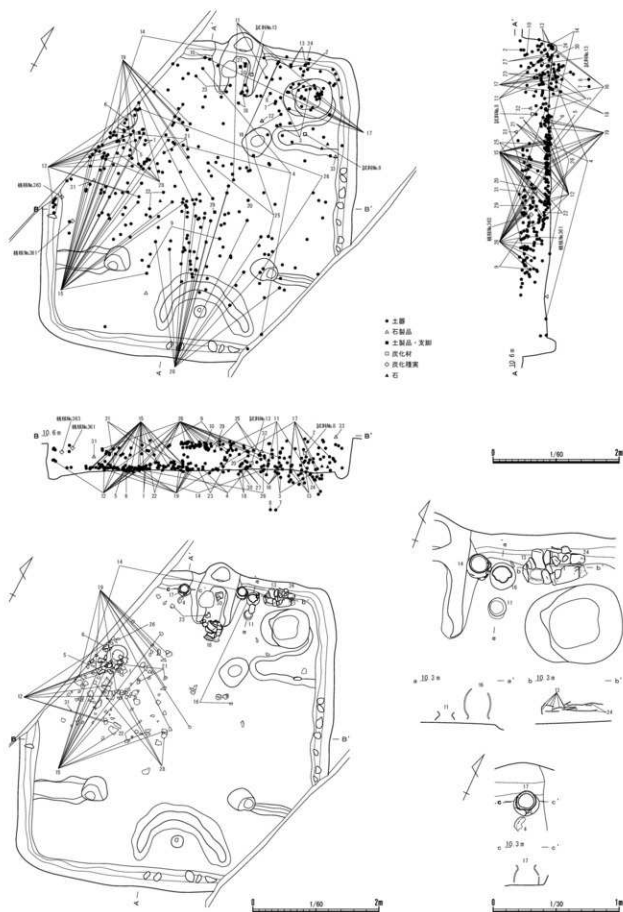
- 1層 灰黄褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を中量。粘土ブロッコ (φ20-30mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 2層 二色・黄褐色土  
 壁土粒・ブロッコ (φ1-20mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 3層 灰黄褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を中量。壁土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 4層 灰黄褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を中量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 5層 褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を中量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 6層 褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 7層 二色・黄褐色土  
 コームブロッコ (φ20-30mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。
- 8層 灰黄褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 9層 灰黄褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を少量。粘土ブロッコ (φ20-30mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 10層 灰黄褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を中量。壁土ブロッコ (φ20-30mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 11層 灰黄褐色土  
 壁土粒・粘土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 12層 灰黄褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を少量。壁土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 13層 二色・黄褐色土  
 壁土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 14層 褐色土  
 壁土粒・粘土粒・焼物をして構成している。壁土ブロッコ (φ10mm) を少し含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 15層 二色・黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性や中あり。しまりや中あり。
- 16層 灰黄褐色土  
 コーム粒 (φ1-10mm)・壁土粒 (φ1-10mm) を少量含む。粘性あり。しまりや中あり。



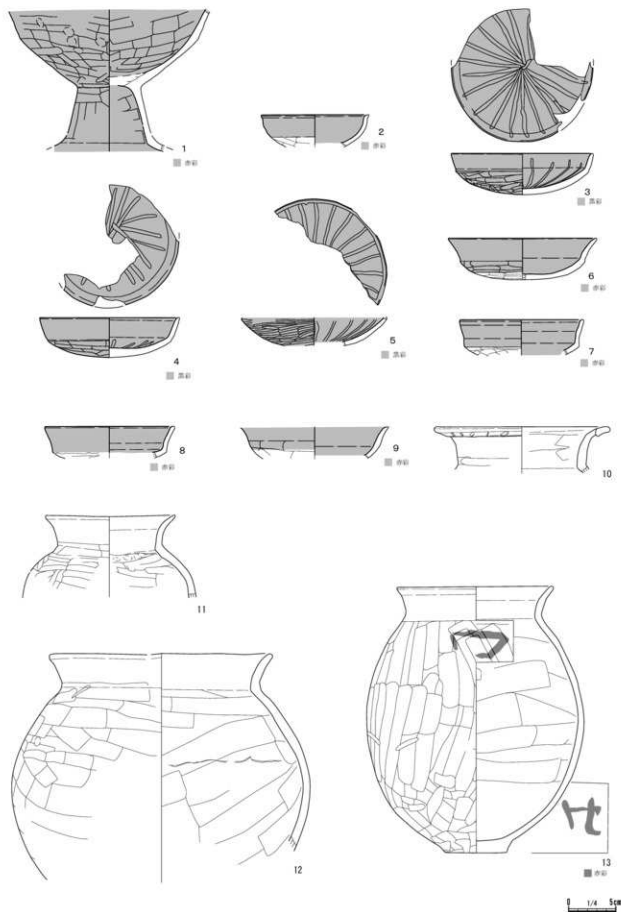
掘り方

1/30

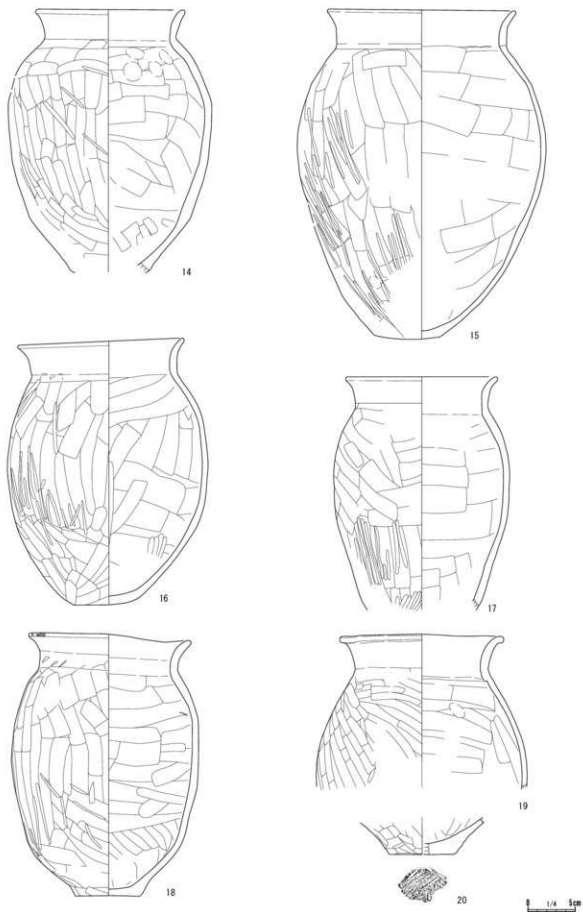
第21図 97号住居跡4 (1/30・1/60)



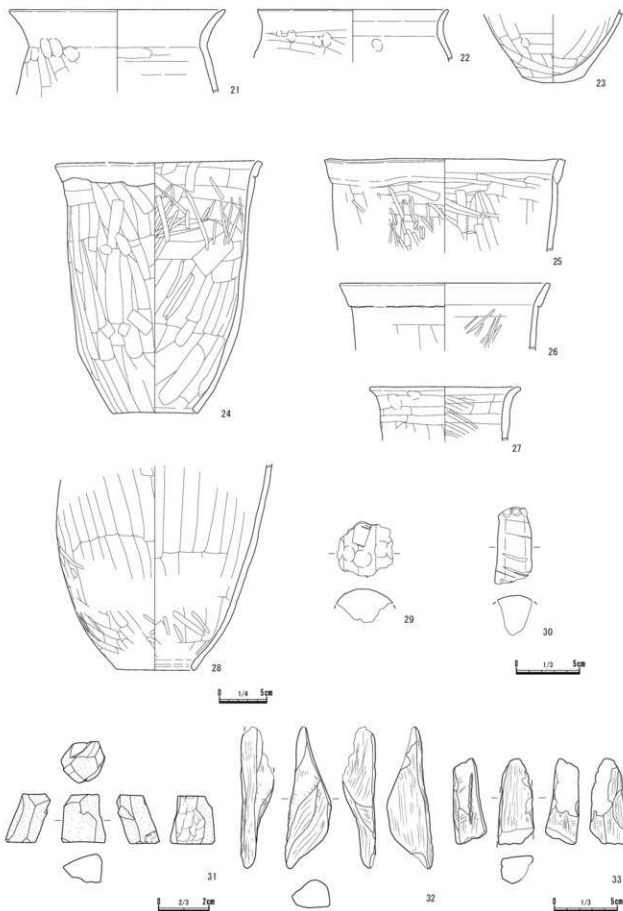
第22図 97号住居跡遺物出土状態(1/60・1/30)



第23図 97号住居跡出土遺物1 (1/4)



第24図 97号住居跡出土遺物2 (1/4)



第25図 97号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3・2/3)

発掘番号 図版番号	種別 図種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・胎土	出土位置
第23図1 図版12-2-1	土師器 高杯	口縁部～ 底部下平 70%	高 [15.0]	杯部が深身のタイプ/杯部は内湾しなかに開く/中部に強い稜を有する/頸部/胴部は直線的で胴部で大きく開く/内外面赤彩	内面:杯部ヘラナデ後、ナデ/外面:杯部横位ヘラナデ、放射状調整/胴部:縦・横位ヘラナデ、胴部は一部縦・ナデ	赤褐色/石灰・チャート・角閃石・砂粒	P4東側の覆土から散在的分布 97M 頸部は98Bの遺構間接合
第23図2 図版12-2-2	土師器 杯	口縁部～ 体部下平 10%	口 [11.0] 高 [3.4]	いむゆる比企型頸/口縁部上部は強く外反する/体部は丸みをもつ/内面及び外面口縁部赤彩	内面:口縁部横ナデ、以下横ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ後、ナデ	にぶい褐色/白色粘土・チャート	北側コーナ →付近の覆土上層
第23図3 図版12-2-3	土師器 杯	70%	口 [15.0] 高 [4.4]	有段杯/口縁部は僅かに内湾しつつ外反する/口縁部と底部の境に稜を有する/内外面赤彩	内面:口縁部横ナデ、以下ナデ後、放射状調整/外面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ	黒褐色/チャート・砂粒	貯蔵穴の床面 →床面
第23図4 図版13-4	土師器 杯	45%	口 [14.8] 高 [4.3]	有段杯/口縁部は直線的に外反する/口縁部と底部の境に強い稜を有する/内外面黒彩/人頭土師器	内面:口縁部横ナデ、以下ナデ後、放射状調整/外面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ、一部強いナデのため、磨きのような光沢をもつ	赤褐色/チャート・砂粒	遺構全体の覆土から散在的
第23図5 図版13-5	土師器 杯	体部 20%	高 [3.0]	有段杯/口縁部欠頂/口縁部と底部の境に稜を有する/内外面黒彩/人頭土師器	内面:縦2・3mmの放射状調整/外面:体部に横位ヘラナデ磨き調整、底面はヘラナデ	褐色/長石・石英・赤色粘土・砂粒	P4西側の覆土上層
第23図6 図版13-6	土師器 杯	45%	口 [15.6] 高 4.4	有段杯/口縁部は強く外反し、口縁部と底部の境に稜を有する/口縁部内外面と外面の境から底面部の半分程赤彩	内面:口縁部横ナデ、以下ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ	褐色/長石・チャート・白色粘土	P4西側下層
第23図7 図版13-7	土師器 杯	口縁部～ 底部上平 20%	口 [13.0] 高 [3.7]	有段杯/口縁部はやや外反する/口縁部内側に稜をもつ/内面及び口縁部外面赤彩	内面:口縁部横ナデ、以下ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下斜位ヘラナデ	にぶい黄褐色/長石・砂粒	貯蔵穴の覆土上層
第23図8 図版13-8	土師器 杯	口縁部～ 底部上平 10%	口 [13.6] 高 [3.4]	有段杯/口縁部はゆるやかに外反する/口縁部と底部の境に稜をもつ/内面・口縁部外面赤彩	内面:口縁部は横ナデ、以下ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ	にぶい黄褐色/チャート・砂粒	貯蔵穴の覆土上層
第23図9 図版13-9	土師器 杯	口縁部～ 体部下平 20%	高 [3.4]	有段杯/口縁部は欠頂/口縁部はゆるやかに外反する/口縁部から底部へわずかに稜をもつ、ゆるやかに磨きする/内面・外面口縁部赤彩	内面:口縁部横ナデ、以下ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ	褐色/石灰・チャート・砂粒	中央部付近の覆土上層
第23図10 図版13-10	土師器 甕	口縁部～胴部 25%	口 [17.0] 高 [4.9]	狭口縁/口縁部は強く外反する/在地系	内面:横ナデ/外面:ハケ調整後、横ナデ、口縁部に連続したヘラの圧痕が見える	にぶい褐色/長石・チャート・石英	カマ下西側覆土上の覆土上層
第23図11 図版13-11	土師器 甕	口縁部～ 胴部上平 20%	口 [13.5] 高 [8.7]	口縁部は上部で大きく開き、胴部は丸みをもつ/在地系/外面は磨ける	内面:口縁部横ナデ、以下放射状調整、横位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下は縦・横位ヘラナデ	にぶい褐色/石灰・チャート・砂粒	カマ下東側の中位の床面・覆土から散在的
第23図12 図版13-12	土師器 甕	口縁部～ 胴部中位 40%	口 [23.0] 高 [24.2]	口縁部はやや直線的に外反する/胴部は丸みをもつ/胴部中位で最大径を測る/外面は放射状に磨ける	内面:口縁部横ナデ、以下内面横・斜位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、口縁部と胴部の境線部から胴部中位にかけて横位ヘラナデ	にぶい褐色/石灰・角閃石・チャート・砂粒	西側の床面 上・覆土から散在的
第23図13 図版13-13	土師器 甕	ほぼ完形	口 [16.3] 高 28.2 底 6.4	胴部は直線的に外反し、口縁部でわずかに外へ開く/胴部中位で最大径を測る/在地系	内面:口縁部横ナデ、上→中部、以下横位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ、下部は強いヘラナデによる磨き状の光沢を帯びる部分もあり、胴部外面上部と下部に赤色顔料による放射状の痕が観察できる	黒褐色/石灰・チャート・白色粘土	カマ下東側覆土上の床面から散在的
第24図14 図版13-14	土師器 甕	口縁部～ 胴部上端 50%	口 [15.4] 高 [27.9]	口縁部は外反して開く/胴部中位で最大径を測る/外面の一部と内面磨ける/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下上部は横位、下部は斜位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、下部は横位ナデ、中部は縦位、下部は斜位ヘラナデ後、ヘラナデ(スリッパか)、一部に斜位ヘラナデ磨き調整	灰黄褐色/石灰・金雲母	カマ下東側及び西側の覆土上層
第24図15 図版14-15	土師器 甕	50%	口 [19.5] 高 34.8	胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する/胴部中位で最大径を測る/在地系/外面は放射状調整	内面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ、中部は強いヘラナデによる磨き状の光沢あり	にぶい褐色/石灰・赤色粘土	西側の床面 上・覆土から散在的
第24図16 図版14-16	土師器 甕	80%	口 [17.2] 高 28.2 底 7.2	口縁部と底部はゆるやかに外反する/胴部中位で最大径を測る/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下内面斜・横位ヘラナデ、口縁部と胴部の接合部に横・縦ナデ(スリッパか)/外面:口縁部横ナデ、下部はヘラナデ	にぶい褐色/石灰・チャート・白色粘土	貯蔵穴近・ 付近中央部の覆土から散在的
第24図17 図版14-17	土師器 甕	口縁部～ 体部下平 50%	口 [15.7] 高 [24.7]	胴部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する/最大径を胴部中位につく/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ後、部分の間にヘラナデ磨き調整	灰褐色/チャート・長石・砂粒、僅かに金雲母	貯蔵穴・カマ下西側の覆土から散在的
第24図18 図版14-18	土師器 甕	完形	口 [16.9] 高 27.9 底 6.8	口縁部から胴部にかけてゆるむ/胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反する/口縁部の一部に丸状突起による凸凹が見られる/胴部中位で最大径を測る/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ、下部は斜位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下上部と下部は斜位、中部は横位ヘラナデ、ヘラナデ(スリッパか)、全体にナデ(スリッパか)、一部ヘラナデ磨き調整	にぶい褐色/石灰・チャート・金雲母・白色粘土	カマ下焚き 口のから散在的

第5表 97号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(1)

## 第3章 検出された遺構・遺物

探検番号 図版番号	種別 図種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・土色	出土位置
第24図19 図版14-19	土師器 甕	□縁部一 部部上位 40%	□ (16.8) 高 [16.4]	□縁部はゆるやかに外反する / □縁部はゆがむ/ 頸部と胴 部の境はスムーズ/ 胴部上位 で最大径を測る/ 在地土師 器/ □縁部外面と胴部の一部 が欠ける	内面: □縁部横ナデ、以下横・斜位へウナデ/ 外面: □縁部横ナデ、以下斜位へウナデ	に濃い褐色/チャ ート・白色粒子・赤色 粒子	P4付近の床 面から散 在的
第24図20 図版14-20	土師器 甕	胴部下平一 底部 25%	高 [3.9] 底 [7.0]	頸部状態の直上か、胴部は大 きく外傾する	内面: 斜位へウナデ/外面: 多方向のへウナデ、 へウナテ痕が明確に現る	に濃い褐色/石莖 ・角閃石・チャ ート	中央部付近 の覆土上層
第25図21 図版14-21	土師器 甕	□縁部上平 20%	□ (22.6) 高 [8.7]	□縁部は外反し、胴部は直線的 / 在地土	内面: □縁部横ナデ、以下横ナデ/外面: □縁 部横ナデ、以下縦位ハケナデ、一部にハケ目 が現る	暗褐色/石莖・角 閃石・砂粒	西側中央部 付近覆土上 層に散在的
第25図22 図版14-22	土師 甕	□縁部上平 20%	□ (20.0) 高 [5.6]	□縁部はゆるやかに外反する / 在地土	内面: □縁部横ナデ、以下ナデ/外面: □縁部 横ナデ、以下へウナテ後、斜位へウナテ、胴部 押圧痕	に濃い褐色/石莖 ・チャート・長石	中央部付近 のはば覆土 上・覆土か ら散在的
第25図23 図版14-23	土師器 甕	胴部中位一 底部 25%	高 [7.7] 底 [6.6]	底面は丸みを持ち、胴部はや や内湾する/ 外面保存層/ 在 地土	内面: 斜位へウナデ/外面: 横・斜位へウナテ 後、縦・横・斜位へウナテ、胴部押圧痕	黄褐色/石莖・長 石・チャ ート	カマド付近 のはば覆土 ・覆土から 散在的
第25図24 図版15-1-24	土師器 甕	光形	□21.3 高26.8 底 8.9	筒状口縁/ □縁部はゆがむ/ □縁部 は外反し、ゆるやかに胴部へ 変る/ 在地土	内面: □縁部横ナデ後、一部横ナデ、以下上 部横ナデ、中部斜ナデ、下部斜ナデ後、上部中心 にへウナテを調整/ 外面: □縁部横ナデ、以下上 部横・斜位へウナテ、中・下部・縦位へウナテ、 へウナテ後一部にナデ調整	に濃い褐色/チャ ート・石莖・長石・砂 粒	北側コーナ ーの床面
第25図25 図版15-1-25	土師 甕	□縁部上平 20%	□ (24.4) 高 [9.8]	筒状口縁/ □縁部はゆがむ/ □縁 部は外反しゆるやかに胴部 に移行する/ 在地土	内面: □縁部横ナデ、以下横位へウナテ後、一 部へウナテを強いナデ/ 外面: □縁部横ナデ、 以下横・縦位へウナテ後、粗いへウナテ調整	に濃い褐色/チャ ート・白色粒子・小石	P1南側覆土 上層
第25図26 図版15-1-26	土師器 甕	□縁部上平 20%	□ (21.4) 高 [7.1]	筒状口縁/ □縁部は強く外傾 する/ 在地土	内面: 横ナデ後、斜位へウナテを調整/ 外面: 胴部、 縦位へウナテ後、□縁部直下は横ナデ	に濃い褐色/長石 ・チャート・砂粒	P2・4付近 の覆土から 散在的
第25図27 図版15-1-27	土師器 甕	□縁部上平 20%	□ (15.4) 高 [5.8]	単純口縁/ □縁部は強く外反 し、直線的な胴部へスムーズ に移行する/ 在地土	内面: ハケ目調整後横ナデ、一部にナデ残しの ハケ目が見られる/ 外面: 体部に縦位へウナテ 後、□縁部に横位へウナテを強し、□縁部に指 頭押圧痕	に濃い黄褐色/石莖 ・チャート・長石・砂 粒	カマド内側 の床面上
第25図28 図版15-1-28	土師器 甕	胴部上位一 底部 70%	高 [21.8] 底 8.0	筒状口縁/ □縁部は直線的で長 径/ 上部の腹形はゆがむ/ 在 地土	内面: 縦位へウナテ、下部にはへウナテを 強いナデ、下部は横ナデ/ 外面: 上部は縦位へ ウナテ、下部は斜位へウナテ後へウナテを強い ナデを部分的に強し	灰黄褐色/長石 ・チャート・砂粒	P4付近及び 中央部から 南端にかけて の床面から 覆土から 散在的

探検番号 図版番号	種別 図種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第25図29 図版15-1-29	土製品 支那	[4.6]	[4.3]	[4.4]	28.1	柱状の基部の一部/ 外面: 縦位へウナテ後、調整する指頭押圧痕が見られる/ 土 ・土・色調は黄褐色、角閃石・砂粒を含む	遺構中央部 の覆土上層
第25図30 図版15-1-30	土製品 支那	[6.1]	[2.7]	[3.1]	35.0	柱状の基部の一部/ 外面: 縦ナデ後斜位の圧痕、上部に指頭押圧痕も見られる/ 土 質変異しい	カマド中心 部覆土

探検番号 図版番号	種別 図種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第25図31 図版15-1-31	石製品 切片	硬質凝結火岩	2.2	1.8	1.2	4.9	正面・左右両側面は平面/ 裏面の一部に磨理面/ 前後面は 平行で、20°に傾斜する角柱状	遺構切り2 北側の覆土 中層
第25図32 図版15-1-32	石製品 凝灰岩	凝灰岩	12.2	3.0	12.2	65.3	上・下部の一部と後部分に欠陥がある他はほぼ定形/ 外形の 中央部は山なりで、両端に向かって薄く傾斜する/ 断面はカ マドコ形/ 全面に浅い磨痕がみられる	P4土物の覆 土中層
第25図33 図版15-1-33	石製品 凝灰岩	凝灰岩	6.8	2.8	2.2	54.8	上下欠陥/ 外形は柱状で、断面は逆台形を呈する/ 四側面と もすべてに磨痕がみられる	東側覆土上 層

第5表 97号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(2)

## 98号住居跡

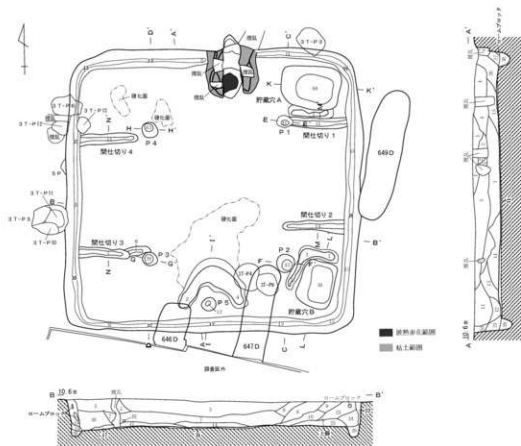
遺 構 (第26～29図)

[位 置] (F・G-2・3) グリッド

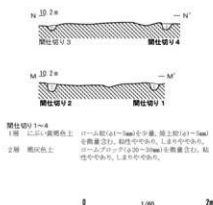
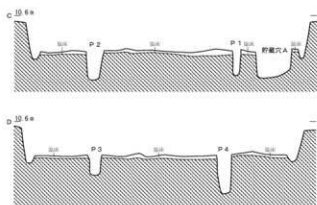
[検出状況] 646D・647D・649D、3T-P3・4・6・9・11～13に切られる。カマドの一部が攪乱の影響を受けている。

[構 造] 平面形: 方形。規模: 南北軸4.64m/東西軸4.72m/確認面からの深さ52cm。壁: 80°で立ち上がる。主軸方位: N-S。壁溝: カマドを除き全周する。上幅16～29cm/下幅5～10cm/床面からの深さ11cm。床面: 硬化面は住居北西隅と入口施設に伴う凸堤の北側から中央付近で確認さ





- |              |                                     |              |                                     |
|--------------|-------------------------------------|--------------|-------------------------------------|
| 1層 灰黄褐色土     | ローム層・黄土層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。 | 16層 灰黄褐色土    | ローム層・粘土層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。 |
| 2層 褐色土       | 粘土層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。      | 17層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 3層 二色(黄褐色土)  | ローム層・黄土層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。 | 18層 黄褐色土     | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 4層 灰黄褐色土     | ローム層・黄土層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。 | 19層 黄褐色土     | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 5層 灰黄褐色土     | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 20層 黄褐色土     | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 6層 黄褐色土      | ローム層・黄土層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。 | 21層 黄褐色土     | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 7層 灰黄褐色土     | ローム層・黄土層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。 | 22層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 8層 二色(黄褐色土)  | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 23層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 9層 黄褐色土      | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 24層 黄褐色土     | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 10層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 25層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 11層 褐色土      | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 26層 二色(黄褐色土) | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 12層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 27層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 13層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 28層 二色(黄褐色土) | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 14層 二色(黄褐色土) | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 29層 黄褐色土     | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 15層 二色(黄褐色土) | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 30層 二色(黄褐色土) | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 16層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     | 31層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |
| 17層 二色(黄褐色土) | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |              |                                     |
| 18層 灰黄褐色土    | ローム層(①-10mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。     |              |                                     |



居住跡1~4

- 1層 二色(黄褐色土) ローム層(①-10mm)を少量、黄土層(①-5mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
- 2層 褐色土 ローム層(①-10mm)を少量、ロームブロック(②0-30mm)を少量含む。粘性あり、しまりややあり。

第26図 98号住居跡1 (1/60)





第28図 98号住居跡遺物出土状態 1 (1/60)

北壁中央で確認された。天井部は崩落していたが、カマド内部より支脚と襖2個体が確認された。長軸1.15m/短軸1.01m/確認面からの深さ47cm。貯蔵穴：住居北東隅（貯蔵穴A）、南東隅（貯蔵穴B）の2基確認された。貯蔵穴Aは遺物が多く含まれていたのに対し貯蔵穴Bからの遺物の出土は認められない。貯蔵穴A：長軸0.95m/短軸0.66m/床面からの深さ88cm。間仕切り1との間に凸堤が確認される。長さ0.94m/幅0.20m/床面からの高さ11cm。貯蔵穴B：長軸0.63m/短軸0.53m/床面から

の深さ59cm。北側から西側にかけてL字状の凸堤が確認される。長さ1.36m/幅0.20m/床面からの高さ1cm。柱穴：5本（主柱穴4本、入口施設1本）が確認された。主柱穴（P1～4）は住居隅の対角線上に4本配置される構成となる。主柱穴の長軸22～29cm/短軸20～28cm/床面からの深さ29～63cm。入口施設：馬蹄状の凸堤に囲まれる形で南側で1本（P5）確認された。P5は長軸24cm/短軸20cm/床面からの深さ12cm。凸堤は、上幅0.15～0.30m/下幅0.25～0.55m/床面からの高さ2～4cm。

[覆土] 32層に分層される。住居中央上層付近において自然堆積の層序を示している。

[遺物] 土師器高坏・坏・壺・甕・甎形土器の265点、土製品（支脚）2点、石製品（編物石・砥石）2点、炭化材等が出土した。遺物は住居北東部に集中する他、南西部にも比較的多く見られる。特に貯蔵穴とカマド周辺からは土師器甕形土器、住居南西部から土師器坏形土器が多数出土している。14は壁溝から、16はカマド内の支脚（28）の上から、15・23・27はカマドと貯蔵穴の間より、上から甎（27）、小型甕（15）、長甕（23）の順で重なり合って出土した。21は貯蔵穴の覆土中から、17・19・20・21・26は貯蔵穴Aの西側から南側にかけてL字状に配された状態で出土し、22はカマド焚口から出土した。なお、出土した炭化材19点・炭化種実4点について樹種同定を行い、炭化材はコナラ属コナラ節・クヌギ節、炭化種実については桃核であることが判明している。また、炭化材1点について放射性炭素年代測定を行い、5世紀前半～6世紀中頃の歴年代を得ている。詳細は付編参照。

[時期] 古墳時代後期（6世紀中葉）。

[遺物] (第30～32図、図版15-2・16・17・18-1、第6表)

[土器] (第30・31図1～27、図版15-2・16・17-1～27、第6表)

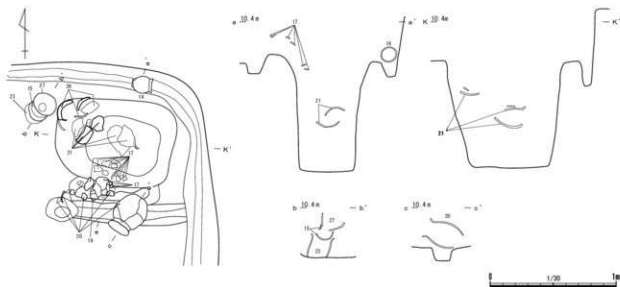
1～12は土師器坏形土器、13は土師器壺形土器、14～24は土師器甕形土器、25は土師器不明品の脚部、26・27は土師器甎形土器である。

[土製品] (第32図28・29、図版17-28・29、第6表)

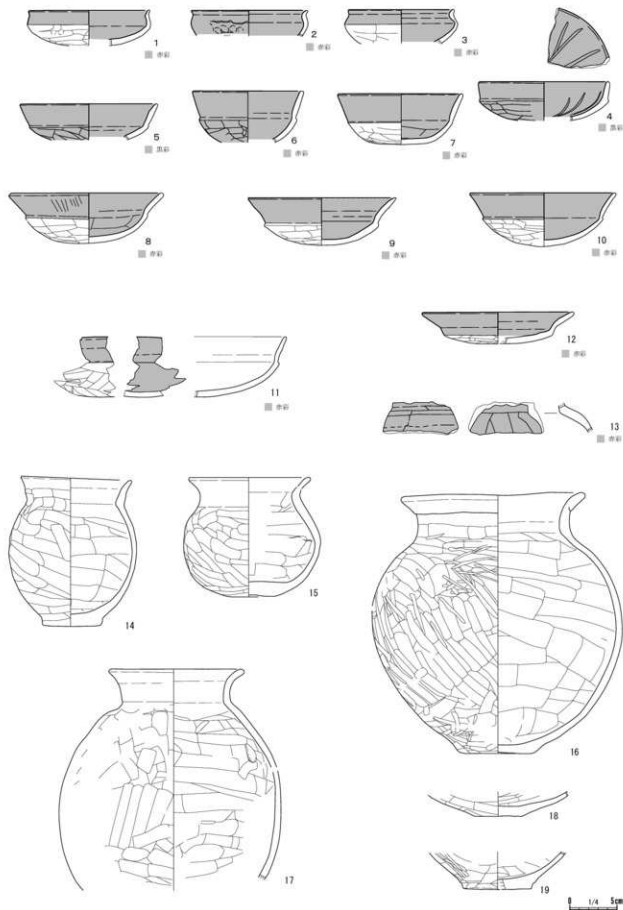
28・29は土製品の支脚である。28はカマド中央部からの出土である。

[石製品] (第32図30・31、図版18-1-30・31、第6表)

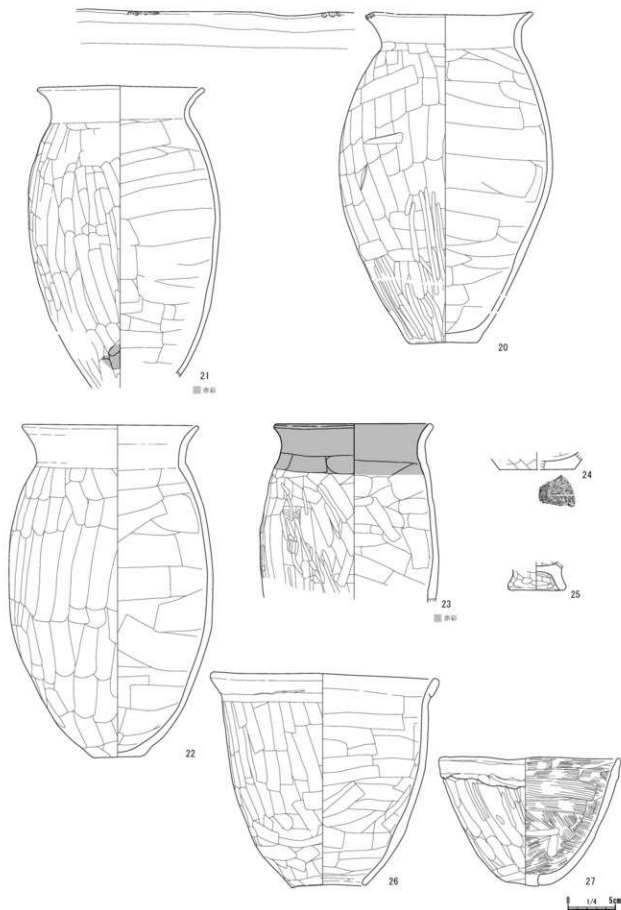
30は編物石、31は砥石である。



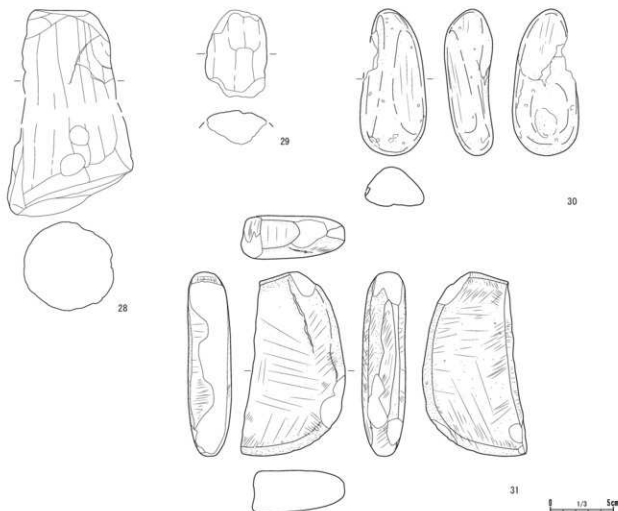
第29図 98号住居跡遺物出土状態2（1/30）



第30図 98号住居跡出土遺物1 (1/4)



第31図 98号住居跡出土遺物2 (1/4)



第32図 98号住居跡出土遺物3 (1/3)

標記番号 図版番号	種別 類種	部位 遺存状態	法量 (cm)	形状・形態	文様・調整等	色調・敷土	出土位置
第30図1 図版15-2-1	土師器 杯	□縁部～ 底部下半 30%	□ (12.8) 高 [3.7]	いわゆる比企型杯/□縁部は 短く外反する/□縁部と底部 の境に丸みを帯びた縁を有す る/内面及び□縁部外面は赤 彩/人間系土師器	内面: □縁部横ナデ, 以下ナデ/外面: □縁部 横ナデ, 以下へう削り後ナデ	にぶい赤褐色/長 石・チャート・砂粒	凸見北側の 覆土
第30図2 図版15-2-2	土師器 杯	□縁部～ 体部中位 10%	□ (12.0) 高 [2.8]	いわゆる比企型杯/□縁部は 短く外反する/□縁部と底部 の境に丸みを帯びた縁を有す る/内面及び□縁部外面赤彩	内面: □縁部横ナデ, 以下ナデ/外面: □縁部 横ナデ, 以下へう削き調整, □縁と底部の境に 連続する指頭押圧痕	にぶい褐色/チャ ート・白色粒子(焼跡 後の飛砂により敷土 色不明)	覆土
第30図3 図版15-2-3	土師器 杯	□縁部～ 体部下半 20%	□ (11.0) 高 [3.6]	いわゆる比企型杯/□縁部は 短く外反する/□縁部と底部 の境に強く折面する縁を有す る/内面及び□縁部外面赤彩	内面: □縁部横ナデ, 以下ナデ/外面: □縁部 横ナデ, 以下横位へう削り後, ナデ	暗灰色/石英・長石・ 砂粒	かマド東側の 覆土
第30図4 図版15-2-4	土師器 杯	□縁部～ 底部下半 20%	□ (13.6) 高 [4.2]	右段杯/□縁部は直立する/ □縁部と底部の境に段を有す る/内外面黒彩	内面: □縁部横ナデ, 以下ナデ後, 放射状暗文 /外面: □縁部横ナデ, 以下横・斜位へう削り	にぶい褐色/石英・ 砂粒	中央部の覆 土
第30図5 図版15-2-5	土師器 杯	□縁部～ 底部上半 20%	□ (14.4) 高 [3.8]	右段杯/□縁部は直線的に外 反し, 大きく開く/□縁部と 底部の境に段を有する/内外 面黒彩	内面: □縁部横ナデ, 以下横位へう削り	灰褐色/長石・チャ ート・赤色粒子	間仕切り3 北東側覆土
第30図6 図版15-2-6	土師器 杯	□縁部～ 底部下半 30%	□ (11.6) 高 [11.9]	右段杯/□縁部は直線的に外 反する/□縁部と底部の境に明 瞭な段を有する/内外面赤 彩, 保存箱	内面: □縁部横ナデ, 以下ナデ/外面: □縁部 横ナデ, 以下横・斜位へう削り	明赤褐色/石英・砂 粒・白色粒子	西南側コー ナーの床面 ・覆土から 散在的
第30図7 図版15-2-7	土師器 杯	30%	□ (13.0) 高 5.4	右段杯/□縁部は直線的に外 反し, 内面がやや肥厚する/ □縁部と底部の境に明・段を 有する/内面及び□縁部外面 赤彩	内面: □縁部横ナデ, 以下横位へうナデ/外面: □縁部横ナデ, 以下横位へう削り	褐色/石英・チャ ート・角型石・白色粒 子・砂粒	中央部の床 面・覆土か ら散在的

第6表 98号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(1)

## 第3章 検出された遺構・遺物

探検番号 図版番号	種別 種類	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・胎土	出土位置
第30図8 図版15-2・8	土師器 坪	60%	□15.6 高 5.4	右段外/口縁部は直線的に大きく外傾する/口縁部と底部の間に段を有する/内面及び口縁部外面赤彩	内面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面:口縁部縦位ハゲ目調整後、横ナデ、以下横位ヘラ削り	にぶい黄褐色/チャート・砂粒・白色粒子	カマダの覆土から散在的
第30図9 図版16-9	土師器 坪	40%	□ (15.4) 高 (5.0)	右段外/口縁部は直線的に外傾する、口縁部と底部の間に段を有する/内面と口縁部外面に赤彩/口縁部から底面上位にかかり腐食	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ・ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラ削り後、一部ヘラ磨き状のナデ	明赤褐色/直:にぶい褐色/長石・チャート・砂粒	中央部のやや北側の覆土から散在的
第30図10 図版16-10	土師器 坪	40%	□ (15.3) 高 15.7	右段外/口縁部は直線的に外傾する、口縁部と底部の間に段を有する/内面及び口縁部外面赤彩	内面:口縁部横ナデ、以下ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後、ナデ	にぶい褐色/石英・チャート/白色砂粒	間近切り3枚面直上から散在的
第30図11 図版16-11	土師器 坪	20%	高 [6.4]	右段外/口縁部は直線的に外傾し/口縁部と底部の間に段を有する/内面及び口縁部外面赤彩	内面:口縁部横ナデ以下、ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後、ナデ	明赤褐色/砂粒・白色粒子/褐色粒子	南西側の覆土から散在的
第30図12 図版16-12	土師器 坪	口縁部～ 底部下平 50%	□15.8 高 [3.3]	右段外/口縁部は直線的に大きく外傾する/底面は扁平/口縁部と底面の間に段を有する/内面中央部分と外面の底面を除き赤彩	内面:口縁部横ナデ、以下横ナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラ削り後、ナデ/体部外面の観察剥落著しい	にぶい赤色/直:暗赤灰色/石英・砂粒	凸足先部の覆土から散在的
第30図13 図版16-13	土師器 覆	胴部下位～ 肩部上平 破片	高 [3.2]	胴部は直立し/肩部は強く張り出す/内面赤彩/在地系	内面:胴部横ナデ、体部縦位ヘラナデ/外面:胴部横ナデ、体部縦位ヘラ削り後、ナデ/体部外面の観察剥落著しい	明赤褐色/長石・石英・チャート/白色粒子	P3南側の覆土
第30図14 図版16-14	土師器 覆	光面	□11.5 高 15.9 底 4.5	胴部はやや外傾し、口縁部はわずかに外へ開く/胴部は丸味を持ち、中位で最大径を測る/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、胴部から胴部横・斜位ナデ、一部磨き状となる	暗赤褐色/石英・チャート/白色粒子・茶褐色粒子	北東側コーナアの床面
第30図15 図版16-15	土師器 覆	80%	□ (12.5) 高 [12.7] 底 4.8	口縁部は直線的に強く外傾する/胴部は球状/底面中央部はやや凹む/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ (筒内味の部分も亦り)/底面周辺ヘラ削り、底面中央部は無調整	灰黄褐色/石英・チャート/赤褐色粒子	カマダ及びカマダ東側の覆土から散在的
第30図16 図版16-16	土師器 覆	80%	□ 17.8 高 27.6 底 7.0	胴部は直立し、口縁部は強く外傾/胴部は中位で最大径を測り、強く張り出す/在地系	内面:口縁部は横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下上位横・斜位ヘラナデ、下位ヘラ削り、部分的に幅2～6mmのヘラ磨き調整	にぶい黄褐色/石英・チャート・長石・白色粒子・砂粒	カマダの覆土(28)に散在的
第30図17 図版16-17	土師器 覆	口縁部～ 胴部上平 40%	□ 13.6 高 [23.4]	胴部は直立しへやや外傾し、口縁部は強く外傾する/胴部は中位で最大径を測る/内面に赤彩/胎土を模形彫に彫付した箇所あり/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ、胴部上平ヘラナデ、下平斜・横位ヘラ削り	暗赤褐色/チャート(赤色系多量)・褐色粒子	野碓穴Aの覆土から散在的
第30図18 図版16-18	土師器 覆	胴部下位～ 底部 破片	高 [2.6] 底 5.0	胴部は底面から大きく張り出す/底面は平直/在地系	内面:斜位ヘラナデ/外面:斜位ヘラ削り後、ナデ	にぶい褐色/石英・チャート・砂粒	東西壁付近の覆土
第30図19 図版16-19	土師器 覆	胴部下位 破片	高 [4.0] 底 7.0	胴部はやや内傾しつつ大きく外傾する/底面は平直/在地系	内面:ヘラナデ/外面:横・斜位ヘラ削り後、一部縦位ヘラ磨き調整	にぶい褐色/黄色/白色粒子・砂粒	野碓穴A及び付随切り1の覆土から散在的
第31図20 図版16-20	土師器 覆	ほぼ光面	□17.2 高 35.1 底 7.0	胴部は直立し、口縁部は外傾する/口縁部はゆがむ/口縁部に丸棒状工具による押圧痕がみられ、軸方向に口縁部にも通経した押圧が施される/胴部中位で最大径を測る/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下縦位ヘラ削り後、一部縦位ヘラ削り、胴下部に集中したヘラ磨き調整を施す	にぶい橙・石英・チャート・砂粒	野碓穴A南側を中心とした床面から散在的
第31図21 図版17-21	土師器 覆	口縁部～ 胴部上平 60%	□ 17.2 高 [31.8]	口縁部は強く外傾する/胴部中位で最大径を測る/胴部下位にベンガラ状の赤彩あり/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下底面方向からのヘラ削り(一部スリッパか)	にぶい褐色/石英・チャート・砂粒多量	野碓穴A及び付随切り1の覆土から散在的
第31図22 図版17-22	土師器 覆	口縁部～底面 90%	□ 18.4 高 35.2 底 4.8	胴部はやや外傾し、口縁部でさらに外傾する/胴部中位で最大径を測る/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面:口縁部直下と胴部下面にやや強い横ナデ、他は横ナデ、以下上平は縦位ヘラナデと一部縦位ヘラナデ、下平は縦位ヘラ削り後と一部ヘラナデ	にぶい褐色/石英・黄褐色・チャート・砂粒多量	カマダ覆土
第31図23 図版17-23	土師器 覆	口縁部～ 胴部中位 50%	□ 16.3 高 [18.6]	口縁部はゆがむかに外傾する/口縁部断面は直線取りされ、鋭い稜が見られる/胴部中位で最大径を測る/口縁部から胴部直下(横ナデ部分)と内面上位に赤彩/在地系	内面:口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ/外面:口縁部横ナデ、以下縦位ヘラ削り後、縦ナデ(一部縦かハゲ目も残る)、部分的に幅4.5mmのヘラ磨き調整	黄褐色/石英・長石・チャート	カマダ東側の床面
第31図24 図版17-24	土師器 覆	底面 10%	高 [1.8] 底 (8.0)	胴部はやや丸みをもって、直線的に立ち上がる/底面に米粒痕/在地系	内面:斜位ヘラナデ/外面:斜位ヘラ削り	にぶい褐色/角閃石・長石・砂粒	野碓穴の覆土
第31図25 図版17-25	土師器 不明	胴部 10%	高 [3.2] 底 5.3	胴部は強くわずかに外傾する/体部は欠損しているが、残存部分の調整から袋状の体部をもつと思われる/在地系	内面:ヘラ削り後、基部のみ横ナデ、底面は粗いヘラ削り/外面:ヘラ削り後、基部のみ横ナデ	褐色/石英・チャート・長石・白色粒子・砂粒	P1南側の覆土
第31図26 図版17-26	土師器 敷	ほぼ光面	□ 22.5 高 23.9 底 7.7	筒状の口縁部/口縁部は直線的に外傾する/胴部は丸みをもって底面へ至る/在地系	内面:口縁部は横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面:胴部は横ナデ、以下縦位ヘラ削り後、下部に斜・横位ヘラ削り	にぶい褐色/チャート・長石・石英・砂粒	野碓穴の覆土から散在的

第6表 98号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(2)



探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・胎土	出土位置	
第31回27 図版17-27	土師器 甌	完形	口18.4 高13.7	筒状けし／寛口縁／一部細いナデにより折り返し部を消す／胴底は直線形で逆三角形を呈する／在胎土	内面：横位へラナデ（先端がさくれ状を呈する指文具）兼ナデ／外面：口縁部細ナデ、胴面は斜位へラナデ（底面時は横位へラナデ）／底面部は横位へラナデ	に赤い黄褐色／石灰・チャート・長石・赤褐色粒子	カマド東側の覆土	
探検番号 図版番号	種別 器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置	
第32回28 図版17-28	土製品 支脚	[16.4]	9.6	7.0	961.5	上面は平坦、下面は斜めのひびつな円柱形／断面は円形／外面に黒ナデと赤面による成層が見られる／赤い黄褐色・砂粒・褐色粒子・白色粒子／塗布率95%	カマドの覆土下層	
第32回29 図版17-29	土製品 支脚	[6.9]	4.9	[2.2]	68.5	柱状の基部の一部／外面は粗い黒ナデ／橙色・砂粒・褐色粒子・白色粒子	カマドの覆土下層	
探検番号 図版番号	種別 器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第32回30 図版18-1-30	石製品 燧石	閃緑岩	11.6	5.2	3.2	258.0	断面三角形の縦長碑を使用／外面磨らなで薄く磨痕が残る／下面は鋭利により赤化	中央部の覆土中層
第32回31 図版18-1-31	石製品 燧石	砂岩	14.6	8.3	3.4	586.0	扁平な円形碑の平割れを利用／表面磨らなで割れ口含む側面に中央部に磨痕が残る／全体が鋭利により赤化	中央部の覆土中層

第6表 98号住居跡出土土器・土製品・石製品一覧(3)

## 99号住居跡

## 遺 構 (第33～36図)

[位 置] (G-3・4・5、H-4) グリッド

[検出状況] 101Hを切り、648D、6Pに切られる。全体的に耕作による攪乱の影響を受けており、床面にまで及んでいる。住居南側1/2程が調査区外へと広がっている。

[構 造] 平面形：方形。規模：南北軸現況4.57m／東西軸5.66m／確認面からの深さ47cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-23°-W。壁溝：カマドを除き調査区内を全周している。北側壁溝のカマド西寄りと西側壁溝において、工具痕と思われる凹凸が認められる。上幅現況16～32cm／下幅現況4～10cm／床面からの深さ16cm。床面：硬化面はカマド周辺と主柱穴で囲まれた範囲を中心に確認された。厚さ2～10cmの貼床が施される。間仕切りが住居北西で3か所確認された。P2へ延びる間仕切り1は、長さ1.06m／幅0.25m／床面からの深さ24cm。P2へ延びる間仕切り2は、長さ0.65m／幅0.22m／床面からの深さ13cm。カマド西袖に平行して延びる間仕切り3は、長さ0.65m／幅0.15m／床面からの深さ12cm。カマド：北辺中央で確認されたが耕作の影響を大きく受けている。天井部は既に崩落している。長軸現況1.08m／短軸0.97m／確認面からの深さ47cm。貯蔵穴：住居北東隅、カマド東寄りで確認された。長軸1.15m／短軸0.84m／床面からの深さ91cm。柱穴：2本（主柱穴2本）確認される。主柱穴（P1・2）は住居隅の対角線上に4本配置されたと推察される。主柱穴は長軸44cm／短軸現況36cm／床面からの深さ74～89cm。入口施設：調査区内では検出されなかった。

[覆 土] 28層に分層される。

[遺 物] 土師器157点が出土した。貯蔵穴とカマド東側周辺から多く出土している。3・14・16・17～19はカマド西側からまとまって出土し、11・14・18は貯蔵穴南東側から並んで出土した。1・2・4・20はP1の上部から出土し、特に1・2は入れ子の状態であった。21は貯蔵穴の中～下位より出土した。

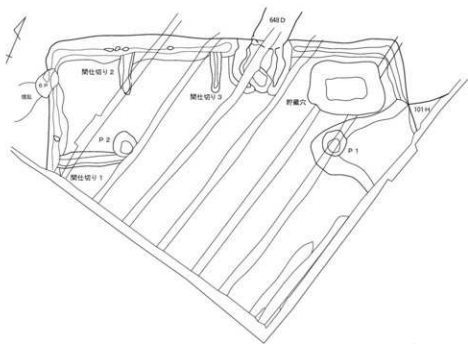
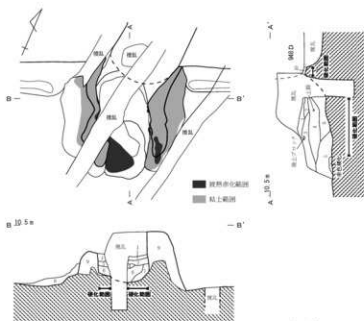
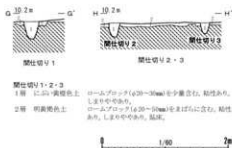
[時 期] 古墳時代後期（6世紀中葉）。

## 遺 物 (第37～39図、図版18-2・19、第7表)

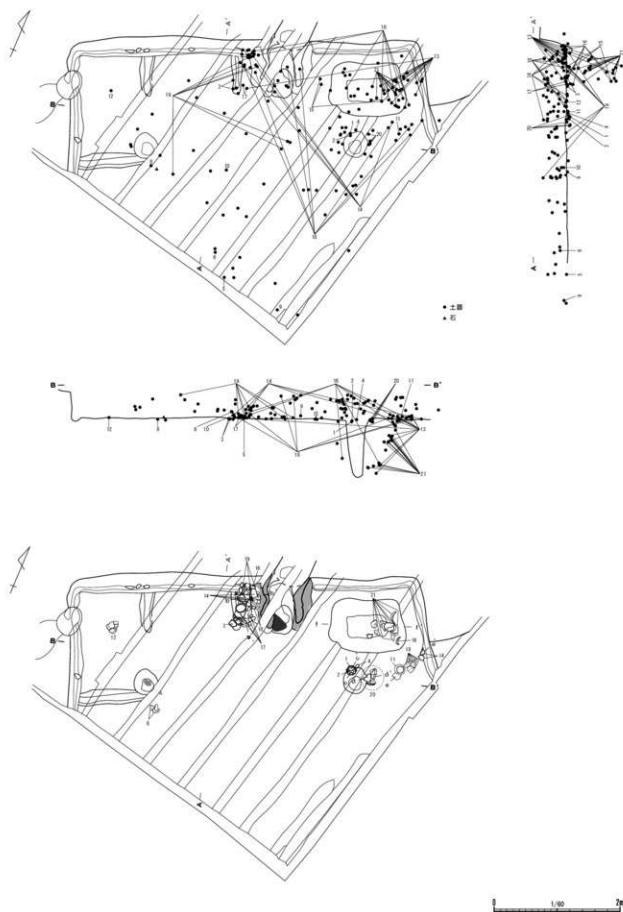
[土 器] (第37～39図1～21、図版18-2-1～13・19-14～21、第7表)

1～10は土師器環形土器、11～19は土師器壺形土器、20・21は土師器壺形土器である。

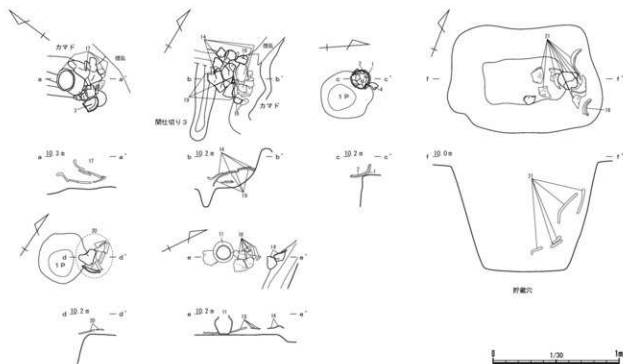




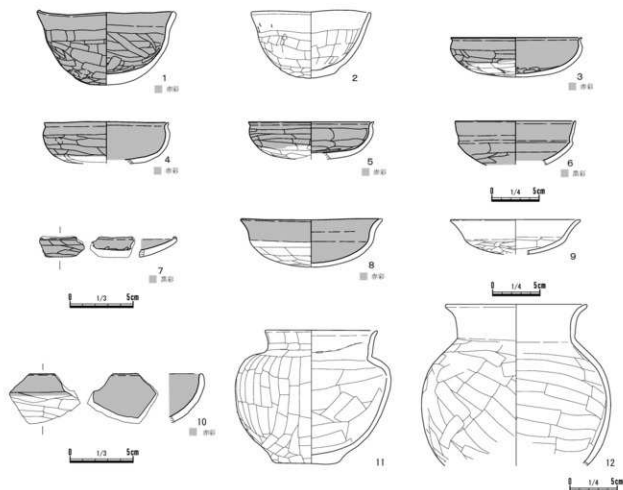
第34図 99号住居跡2 (1/60・1/30)



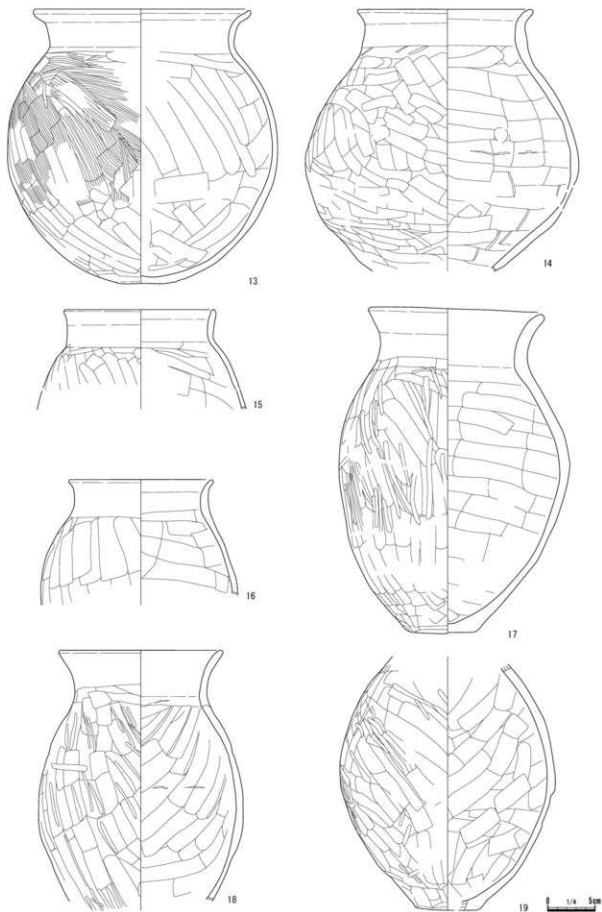
第35図 99号住居跡遺物出土状態1 (1/60)



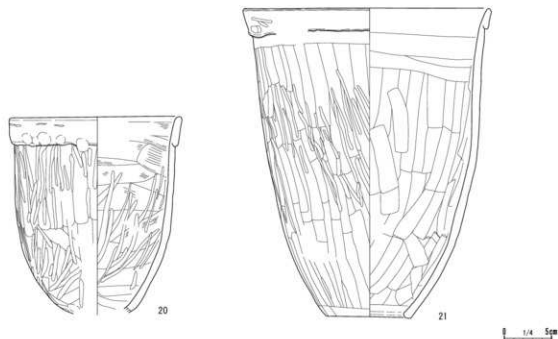
第36図 99号住居跡遺物出土状態2 (1/30)



第37図 99号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第38図 99号住居跡出土遺物2 (1/4)



第39図 99号住居跡出土遺物3 (1/4)

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・土質	出土位置
第37図1 図版18-2-1	土師器 杯	完形	口14.2 高 7.9	深身タイプ/口縁部は直線的 に外反する/口縁部から底部 へゆるやかに移行する体部は 半球状の丸みをもつ/内面 赤彩	内面: 口縁部横ナデ、以下横ナデ後、斜ナデ/ 外面: 口縁部横ナデ、以下横・斜ナデ、底部周 辺に連続する筋頭押圧痕	土に黄褐色/石 灰・チャート・長石・ 小石・褐色粘土	P1覆土
第37図2 図版18-2-2	土師器 杯	ほぼ完形	口12.4 高 7.1	深身タイプ/口縁から底部へ ゆるやかに移行する/体部は 半球状の丸みをもつ	内面: 口縁部は横ナデ、以下横位へラナデ/ 外面: 口縁部は横ナデ、以下横位へラナデ後、 横ナデ/体部から底部への傾目に強い横ナデを強 し段状を呈する/底部は軽いヘラ削り	灰黄褐色/石灰・長 石・チャート・砂粒	P1覆土
第37図3 図版18-2-3	土師器 杯	7割	口(13.8) 高 4.2	いわゆる比企型杯/口縁部は 鋭角薄く、短く外反する/口 縁部と底部の境は丸みをもつ/ 内面及び外面/口縁部から底 部にかけて赤彩、底部外面の 一部にも小範囲の赤彩が見ら れる/入層系土師器	内面: 横ナデ、底面にへラナデ/外面: 口縁部 横ナデ、底部はへラ削り後、軽いヘラナデ	明赤褐色/長石・ チャート・白色砂粒・ 石英	間仕切り3 の北面直上
第37図4 図版18-2-4	土師器 杯	口縁部～ 底部下半 15%	口(13.0) 高 (4.5)	いわゆる比企型杯/口縁部は 短く外反する/口縁部から底 部へ丸みをもつ/内面及び 口縁部から底部外面赤彩/ 入層系土師器	内面: 口縁部横ナデ/外面: 口縁部横ナデ、以 下横位へラ削り	赤色/チャート・長 石・砂粒	P1覆土
第37図5 図版18-2-5	土師器 杯	口縁部～ 底部下半 25%	口(13.2) 高 (4.0)	いわゆる比企型杯/口縁部は 短く外反する/口縁部から底 部へ丸みをもつ/入層系土師 器	内面: 口縁部横ナデ、以下横位へラナデ/外面: 口縁部横ナデ、以下横位へラ削り	赤褐色/長石・チ ャート・砂粒	南側の床直 直上
第37図6 図版18-2-6	土師器 杯	口縁～ 体部下半 15%	口(12.8) 高 (4.6)	有段杯/口縁部と底部との境 に段をもつ/口縁部は外反す る/内外面黒彩	内面: 口縁部横ナデ、以下斜・縦のナデ後に横 ナデ/外面: 口縁下部は段作出後、丸棒状工具 による横ナデのため沈没状を呈する、以下へ ラ削り、ナデがへラ磨き状になっている	暗褐色/長石・チ ャート・白色粘土	南側の覆土
第37図7 図版18-2-7	土師器 杯	底部 破片	高 [1.6]	有段杯/口縁部と底部の間に 段を有する/口縁部は欠欠/ 内外面黒彩	内面: 横ナデ、内底面に放射状暗文/外面: 横 位へラ削り	暗灰色/白色粘土・ 砂	覆土
第37図8 図版18-2-8	土師器 杯	4割	口(14.7) 高 [5.1]	有段杯/口縁部は外反する/ 口縁部と底部の間に傾、段を もつ/内面及び口縁部外面は 赤彩	内面: 口縁部横ナデ、以下横位へラナデ/外面: 口縁部横ナデ、以下横の直下は強い横ナデ、そ の下部は横位へラ削り	明赤褐色/石灰・長 石・チャート・砂粒	P2北側床面
第37図9 図版18-2-9	土師器 杯	口縁部～底部 30%	口(13.5) 高 [3.7]	有段杯/口縁部は大きく外反 する/口縁部と底部の間に傾 を有する/口縁部に浅い沈没 がみえる/小斜型杯	内面: 口縁部横ナデ/外面: 口縁部横ナデ、以 下斜位のへラ削り	土に黄褐色/角 石・白色砂粒・赤色 粘土	南側調査区 コーナアの 覆土
第37図10 図版18-2-10	土師器 杯	口縁部～ 底部中心 破片	高 [4.0]	口縁部は直立し、体部は内湾 する/口縁部と底部の境に傾 をもたない/内面と口縁部外 面赤彩	内面: 横ナデ/外面: 口縁部横ナデ、以下横 斜位のへラ削り	土に黄褐色/チ ャート・白色粘土	中央部の覆 土中～下層

第7表 99号住居跡出土土器一覽(1)

発掘番号 図版番号	種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・胎土	出土位置
第37図11 図版18-2-11	土師器 甕	光形	□11.6 高14.2 底 5.7	口縁部は短く、僅かに外傾する/両部は強く張り出し、胴部は丸みのある近三角形で底部へ至る/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下横・斜位のヘラナデ/外面：口縁部横位のヘラナデ、胴部上位から下部斜位のヘラナデ/底部直上：横位ヘラナデ	にぶい褐色/石炭・チャート・砂鉄・長石	貯蔵穴西側の西側
第37図12 図版18-2-12	土師器 甕	口縁部～胴部下平 30%	□14.6 高17.3	胴部は僅かに外傾し、口縁部で強く外反する/胴部中で最大径を測る/外面備付紐/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下斜位のヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下斜位のヘラナデ後、ナデ	にぶい褐色/石炭・チャート・長石・角閃石・白色粘土	西側カナナ一の床面直上
第38図13 図版18-2-13	土師器 甕	70%	□22.7 高29.0 底 6.0	胴部は直上し、口縁部は内湾しつつ強く外傾する/胴部中で最大径を測る/底部外面に円形の粘土貼付/在地系	内面：口縁部横ナデ、口縁部直下は横ナデ、以下縦・横ナデ、境目が不明瞭なほど上質なナデ部分あり/外面：上へ中は白く調整、中へ下位は斜位のヘラナデ後、ナデ	にぶい黄褐色/チャート・褐色粘土・砂鉄	貯蔵穴近辺の甕土から散在的
第38図14 図版19-14	土師器 甕	口縁部～胴部下平 60%	□18.3 高 [27.7]	胴部は直立し、口縁部は外傾する/胴部はイナナ形を呈し、下位で最大径を測る/在地系	内面：口縁部は横ナデ、以下横位ヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下横・斜位ヘラナデ、下半横位ヘラナデ/主に下半に輪状の溝のナデを施し、磨き調の光沢をもつ	にぶい褐色/石炭・長石・チャート・金剛砂・角閃石	間仕切り3及びカマド近辺・貯蔵穴西側の床面・甕土から散在的
第38図15 図版19-16	土師器 甕	口縁部～胴部下平 10%	□15.7 高 [10.5]	口縁部はほぼ直立し、口縁部の一部は互結状/胴部はゆるやかに張り出す/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下斜位ヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下横・斜位ヘラナデとハナナデ	にぶい黄褐色/石炭・長石・チャート・砂鉄	貯蔵穴西側の甕土から散在的
第38図16 図版19-16	土師器 甕	口縁部～胴部下平 20%	□15.5 高34.4 底 7.0	胴部は直立気味で、口縁部は外傾する/胴部はゆるやかな丸みを持つ、ゆがむ/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下横ヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下斜位ヘラナデ後、ナデ	にぶい褐色/石炭・長石・砂鉄	貯蔵穴の甕土から散在的
第38図17 図版19-17	土師器 甕	ほぼ定形	□17.9 高34.4 底 7.0	口縁部から胴部はゆるやかに外反する/胴部はほぼ直で、中部の一部が丸く張り出す/胴部中で最大径を測る/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下縦位ヘラナデ後、横位ヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下縦位ヘラナデ後、縦・斜位のヘラナデ (スリッパ)	にぶい黄褐色/石炭・褐色粘土	カマド西側の甕土
第38図18 図版19-18	土師器 甕	口縁部～胴部下平 成片	□17.0 高 [27.5]	口縁部胴部は均等に外反する/胴部中で最大径を測る/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下斜位ヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下縦位ヘラナデ後、ナデ (強いナデ部分はヘラナデ)	にぶい黄褐色/長石・チャート・黄褐色粘土	カマド周辺及び貯蔵穴北側の甕土から散在的
第38図19 図版19-19	土師器 甕	体部下平～底部	高 [27.0] 底 6.4	胴部はゆるやかな丸みをもって底部に至る/口縁部欠削り/胴部中で最大径を測る/在地系	内面：上へ中は斜・下位は縦位ヘラナデ/外面：上へ中は斜・下位は縦位ヘラナデ、下部に斜位のヘラナデ、胴部中へ下位に付く粘土の新がれ面が見られる	にぶい褐色/石炭・チャート・長石・小石	カマド及び中央部の床面直上・甕土から散在的
第39図20 図版19-20	土師器 甕	口縁部～底部 75%	□17.7 高 [20.9]	筒状けつとみられる/複合口縁/口縁部、折り返し下部に折返押部による成形痕/在地系	内面：横位ハゲ目調整後、横ナデ、主に中部にヘラナデ調整/外面：口縁部横ナデ後、下部に折返押部、以下上部に縦位ヘラナデ、下部に斜位ヘラナデ後、筒状部のヘラナデ調整	にぶい褐色/石炭・長石・チャート・白色粘土	円東側の床面
第39図21 図版19-21	土師器 甕	70%	□25.8 高32.6 底 8.7	筒状けつ式/複合口縁/胴部は中央へ長引/在地系	内面：口縁部横ナデ、以下下位下横ナデ、上へ下位は縦位ヘラナデ/外面：口縁部横ナデ、以下口縁直下と下横ナデ、中へ下位縦位ヘラナデ (スリッパ) / 一部に縦2・3mmのヘラナデ磨きも施される	にぶい褐色/チャート・白色粘土・砂鉄	貯蔵穴の甕土から散在的

第7表 99号住居跡出土土器一覽(2)

## 100号住居跡

## 遺 構 (第40図)

[位 置] (H-2) グリッド

[検出状況] 北壁中央カマド付近のみが検出され、その他は調査区外へと広がる。

[構 造] 平面形：方形と推察される。規模：南北軸現況1.27m/東西軸現況2.00m/確認面からの深さ58cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：カマドから想定するとN-S。壁溝：カマドを除き調査区内は確認された。上幅現況19～22cm/下幅現況10cm/床面からの深さ10cm。床面：硬化面は確認されなかった。厚さ2～6cmの貼床が施される。間仕切りがカマド西側で1か所確認された。長さ0.65m/幅0.20m/床面からの深さ8cm。カマド：北壁中央と想定される位置で確認された。天井部は崩落していた。袖部分はローム層の掘り残しのため基部がわずかに残存する。長軸現況1.20m/短軸0.65m/確認面からの深さ46cm。貯蔵穴：調査区内では検出されなかった。柱穴：調査区内では検出されなかった。入口施設：調査区内では検出されなかった。

[覆 土] 12層に分層される。床面直上及び下層において5cm程度の粘土ブロックが認められる。



[遺物] 土師器環・甕形土器の7点、鉄製品(釘)3点が出土した。

[時期] 古墳時代後期(6世紀中葉)。

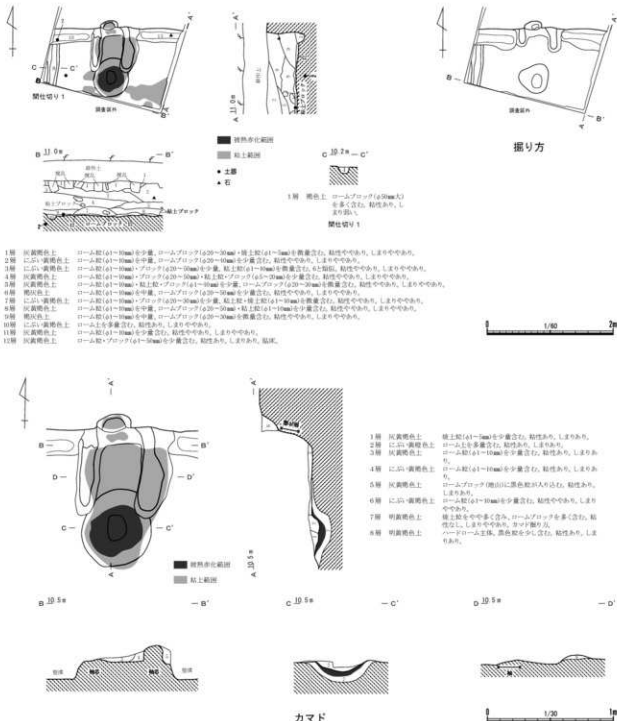
**遺物** (第41図、図版20-1、第8表)

[土器] (第41図1・2、図版20-1-1・2、第8表)

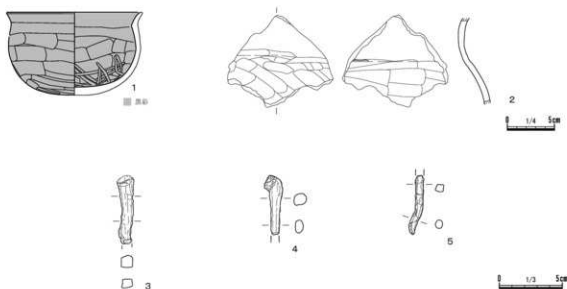
1は土師器環形土器、2は土師器甕形土器である。

[鉄製品] (第41図3~5、図版20-1-3~5、第8表)

3~5は鉄製品の釘である。



第40図 100号住居跡(1/60・1/30)



第41図 100号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

検出番号 採取番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・粘土	出土位置
第41図1 採取20-1-1	土師器 杯	70%	口 (14.2) 高 [8.8]	口縁部は短く外反し、頸部は半球状で丸底に至る/内外面無彫	内面: 口縁部内外面横ナデ。以下内面横位ヘラナデ後。幅1~4mmのヘラ磨き調整/外面: 横位ヘラ削り痕、ナデ。一部にヘラ磨き調整	褐色/石炭・チャート・白色粘土	覆土
第41図2 採取20-1-2	土師器 罎	頸部~ 肩直上平 面片	高 [9.2]	頸部はゆるやかに外反し、肩部は丸みをもつ/内面口縁部と外面全体が滑く赤褐色(一部褐色)で、赤色の可能性もある/在地所土師器	内面: 口縁部横ナデ。以下横位ヘラナデ/外面: 口縁部横ナデ。以下斜位のヘラナデ	にぶい褐色/豆石・砂粒・赤色粘土	カマド西側 軟床内
検出番号 採取番号	種別 器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第41図3 採取20-1-3	鉄製品 釘	[5.4]	1.3	0.9	14.0	下端部欠損/頂部は平坦で下方に向かって緩くなる/断面は方形/全体に錆付着	覆土
第41図4 採取20-1-4	鉄製品 釘	[4.7]	1.0	1.0	11.2	頂部は新れ面り。逆し字形/先端部欠損/上部は断面方形に近く、下部は楕円形に近い形状/頂部中心に全体が錆に覆われる	覆土
第41図5 採取20-1-5	鉄製品 釘	[4.7]	0.7	4.7	0.6	頂部欠損/中位より下でやや傾曲する/上部の断面は方形、先端部は丸形	覆土

第8表 100号住居跡出土土器・鉄製品一覧

## 101号住居跡

## 遺構 (第42図)

[位置] (G-5) グリッド

[検出状況] 99Hに切れ、北西隅の壁溝付近が検出され、その他は調査区外へと広がる。

[構造] 平面形: 不明。規模: 長軸現況0.84m/短軸現況0.43m/確認面からの深さ78cm。壁: 不明。主軸方位: 不明。壁溝: 壁溝のコーナー部分のみが確認された。上幅現況19~22cm/下幅現況2~10cm/床面からの深さ現況10cm。床面: 調査区内では検出されなかった。カマド: 調査区内では検出されなかった。貯蔵穴: 調査区内では検出されなかった。柱穴: 調査区内では検出されなかった。入口施設: 調査区内では検出されなかった。

[覆土] 5層に分層される。

[遺物] 遺物は検出されなかった。

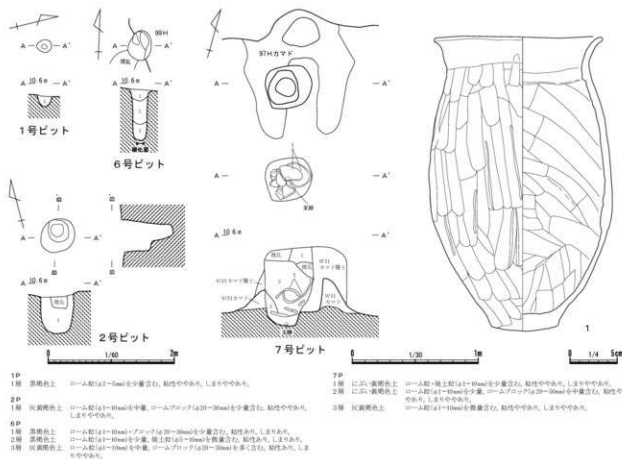
[時期] 重複する99Hとの関係から古墳時代後期(6世紀中葉か)と推察される。



第42図 101号住居跡(1/60)

## (3) ピット

古墳時代後期と判断されるピット4本(1・2・6・7P)が確認された。遺物を伴わないピットに



第43図 古墳時代後期ピット・7号ピット出土遺物(1/60・1/30・1/4)

遺構名	位置グリッド	平面形	規模(m)			壁土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ			
1P	C-2・D-2	円形	28	20	18	単層	遺物なし	古墳時代後期
2P	F-2	円形	56	50	73	単層/95H・9Pを切る	土師器3点(鏝)	古墳時代後期
6P	G-3	楕円形	46	35	85	3層/99Hを切る	遺物なし	古墳時代後期
7P	E-3	隅丸方形	36	32	76	3層/97Hカマドを切る	土師器1点(鏝) 土師器1点(先脚)	古墳時代後期

第9表 古墳時代後期ピット一覧

についても覆土の状況等から古墳時代のピットと判断した。各ピットの詳細については第43図、第9表にまとめ、ここでは97Hカマドを壊す形で内部に土師器甕形土器を伴って確認された7Pについて記述する。

## 7号ピット

**遺 構** (第43図)

[位 置] (E-3) グリッド

[検出状況] 97Hカマドを切る。一部攪乱の影響を受ける。

[構 造] 平面形：隅丸方形。壁：西壁は垂直に、東壁は段を持ちながら立ち上がる。規模：長軸36cm/短軸32cm/確認面からの深さ76cm。

[覆 土] 3層に分層される。1層は一部攪乱の影響を受けている。

[遺 物] 土師器甕形土器1点が出土した。

[時 期] 古墳時代後期(6世紀中葉)。

[所 見] 97Hを切って造られ、内部に甕が正位で出土している。97Hの出土遺物との時期差はない。

**遺 物** (第43図、図版20-2、第10表)

[土 器] (第43図1、図版20-2-1、第10表)

1は土師器甕形土器である。口縁部の一部を欠失するもほぼ完形である。

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・粘土	出土位置
第43図1 図版20-2-1	土師器 甕	ほぼ完形	口17.4 高31.2 底6.9	胴部中位はわずかに膨らみ、口縁部は外反する/胴部の上から3分の2程で最大径を測る/全体にいびつ/底部中央部は丸みをもつ/色地系	内面：口縁部横ナデ、以下斜位のハケナデ(上部はハケ目状)/外面：口縁部横ナデ、以下斜位ヘラ削り後、ヘラナデ(一部はヘラ磨き状)	灰褐色/石英・チャート・白色粘土	覆土

第10表 7号ピット出土土器一覧

## 第3節 中世以降の遺構・遺物

### (1) 概要

中世以降の遺構は掘立柱建築遺構1棟(3T)・土坑6基(646～651D)・ピット3本(3～5P)、が検出された。掘立柱建築遺構は98Hと重複しており、遺構確認の際はプランが判然としなかった。その後、調査を進めていく段階で掘立柱建築遺構と判断した。

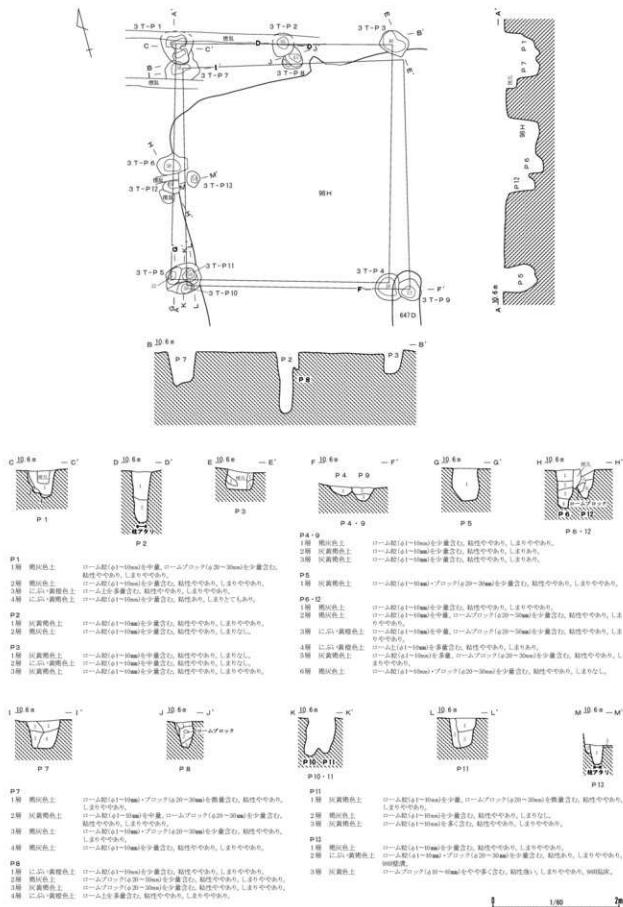
### (2) 掘立柱建築遺構

#### 3号掘立柱建築遺構

**遺 構** (第44・45図)

[位 置] (F・G-2・3) グリッド

[検出状況] 98Hを切って確認される。ピットが重複していることから少なくとも2棟(A・B)存在すると思われる。



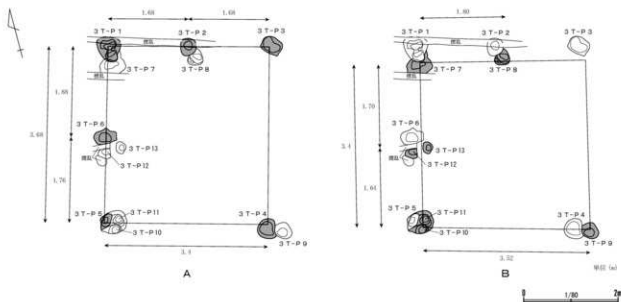
第44図 3号掘立柱建築遺構 (1/60)

[構造] 平面形：2間×2間の建物。規模：A：南北軸3.68m／東西軸3.40m、B：南北軸3.40m／東西軸3.52m。主軸方位：A：N-16°-E、B：N-13°-E。柱穴：A（P1～6）：長軸36～47cm／短軸30～45cm／確認面からの深さ16～95cm。B（P7～13）：長軸25～45cm／短軸21～32cm／確認面からの深さ22～59cm。

[遺物] 古墳時代の遺物が出土しているが、98Hからの流れ込みによるものと思われる。

[時期] 覆土の状況、ピットの形状から中世以降の遺構と判断される。

[所見] Bの時期のP10・11、P12・13については形状・覆土の状況から同一の掘立柱建築遺構の柱穴と判断される。また、西列の北側、中央、南側には、最大3本の柱穴が重複しないし近接して確認されていることから、3時期の建替えが行われた可能性も考えられる。



第45図 3号掘立柱建築遺構模式図（1／80）

遺構名	位置 グリッド	平面形	距離 (m)			覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ			
3T-P1	F-2・F-3	楕円形か	(41)	45	46	4層／3T-P7を切る／覆瓦に切られる	遺物なし	中世以降
3T-P2	F-3	楕円形か	36	(32)	95	2層／3T-P8を切る／覆瓦に切られる	遺物なし	中世以降
3T-P3	F-3	楕円形か	45	35	40	3層／98Bを切る	遺物なし	中世以降
3T-P4	G-3	円形か	44	(42)	16	2層／98Bを切る／3T-P9に切られる	遺物なし	中世以降
3T-P5	G-2	不明	(40)	(22)	52	単層／3T-10・11Pを切る	遺物なし	中世以降
3T-P6	F-2	楕円形か	(47)	30	58	4層／98Bを切る／3T-P12との切合は覆瓦に切られる	遺物なし	中世以降
3T-P7	F-2・F-3	楕円形か	45	(30)	56	4層／3T-P1・覆瓦に切られる	遺物なし	中世以降
3T-P8	F-3	不整形か	33	33	45	3層／3T-P2に切られる	遺物なし	中世以降
3T-P9	G-3	円形	39	32	22	1層／98B・3T-P9を切る／647Dに切られる	遺物なし	中世以降
3T-P10	G-2	円形か	(24)	(15)	59	3T-P5に切られる／3T-P11と重複	遺物なし	中世以降
3T-P11	G-2	円形か	(22)	(22)	56	3層／98Bを切る／3T-P5に切られる／3T-P10と重複	遺物なし	中世以降
3T-P12	F-2・F-3	楕円形か	(30)	(24)	49	2層／98Bを切る／3T-P6との切合は覆瓦に切られる	遺物なし	中世以降
3T-P13	F-2	円形	25	21	34	単層／98Bを切る	遺物なし	中世以降

第11表 3号掘立柱建築遺構柱穴一覧

## (3) 土坑

中世以降と判断される土坑は6基である。覆土の状況等から650・651Dは中世、646～649Dは近世の土坑と判断される。各土坑の規模は第12表のとおりである。



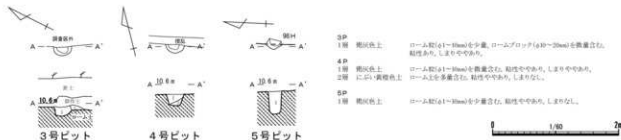
第46図 中世以降の土坑(1/60)

遺構名	色層 グリッド	平面形	規模(m)			長軸方位	覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ				
646D	G-3	隅丸方形か	(0.69)	0.48	0.44	N-15°-E	2層/南側は調査区外/98Hを切る/腐乱に切られる	遺物なし	近世以降
647D	G-3	隅丸方形	(1.49)	0.47	0.67	N-13°-E	3層/98H・3T-P5・4Pを切る	遺物なし	近世以降
648D	F-4・G-4	隅丸長方形	(1.86)	0.55	0.25	N-10°-E	2層/99Hを切る/腐乱に切られる	遺物なし	近世以降
649D	F-3・G-3	隅丸	2.07	0.54	0.07	N-16°-E	単層/98Hを切る	遺物なし	近世以降
650D	F-3	不明	0.63	(0.22)	0.80	不明	3層/東側は調査区外/腐乱に切られる	遺物なし	中世以降
651D	G-4	隅丸形	0.70	0.45	0.12	N-14°-E	単層	遺物なし	中世以降

第12表 中世以降の土坑一覧

## (3) ピット

中世以降のピットは3本である。3～5Pは掘立柱建築遺構の柱穴の可能性も考慮されるが、配列が調査区外へと広がると思われ、把握するには至らなかった。各ピットの規模は第13表のとおりである。



第47図 中世以降のピット(1/60)

遺構名	位置 グリッド	平面形	規模 (m)			埋土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ			
3P	F-3	円形か	29	不明	51	単層/東側は調査区外	遺物なし	中世以降
4P	F-2	円形か	30	不明	25	2層/覆土に切られる	遺物なし	中世以降
5P	G-2	不明	24	不明	37	単層/98Bを切る	遺物なし	中世以降

第13表 中世以降のピット一覧

## 第4節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内からの出土であるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物として、縄文時代の遺物、弥生時代後期～古墳時代前期の土器、奈良・平安時代の土器、中世以降の遺物に分類する。

### (1) 縄文時代の遺物 (第48～50図1～42、図版20-3・21・22、第14・15表)

[石 器] (第48図1～4、図版20-3-1～3・21-4、第14表)

1はチャート製、2は粘板岩製の二次加工のある剥片で、3は打製石斧、4は磨石である。4には擦痕の他に敲打痕も観察された。

[土 器] (第48～50図5～42、図版21-5～29・22-30～42、第15表)

5～8は早期後葉～前期初頭の土器で、5～7は早期後葉の条痕文系土器、8は早期末葉～前期初頭の下吉井式～花積下層式土器である。

9～14は前期の土器で、9は前期初頭の花積下層式土器、10は前期前葉の関山Ⅱ式土器、11～14は前期末葉の土器である。

15～39は中期の土器で、15は中期中葉の阿玉台1b～Ⅱ式、16・17は中期中葉の勝坂式土器、18～39が中期後葉の加曾利E式土器である。16は勝坂1式土器、17は勝坂2式土器、18は加曾利EⅡ式土器で、19は加曾利EⅡ～EⅢ式土器、20～26は加曾利EⅢ式土器、27～39は加曾利EⅣ式土器である。38は有孔鐳付土器の口縁部とみられる。

40～42は後期の土器で、40は後期初頭の称名寺式土器、41は後期前葉の堀之内式土器、42は後期中葉の加曾利B式土器である。

### (2) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器 (第50図43～45、図版22-43～45、第16表)

43・44は壺形土器である。共に肩部で、43は円文、44は山形文内が赤彩されている。45は甕形土器である。

### (3) 奈良・平安時代の土器 (第50図46～52、図版22-46～52、第17表)

46～52は須恵器で、46～48は坏形土器、49・50は埴型土器で、50は佐波理模倣埴である。51・52は甕形土器である。52は内面と側面の欠損面に底面が観察されるため、転用砥石又は硯の可能性がある。また、46～48の坏形土器と49の埴形土器は平安時代の南比企製品、50の埴形土器と51・52の甕形土器は奈良時代の東金子製品である。



## (4) 中世以降の遺物 (第50図53～57、図版22-53～57、第18～21表)

[土器] (第50図53・54、図版22-53・54、第18表)

53・54は共に瀬戸・美濃系の志野皿で、中近世(1590～1660年代)の所産である。

[土製品] (第50図55、図版22-55、第19表)

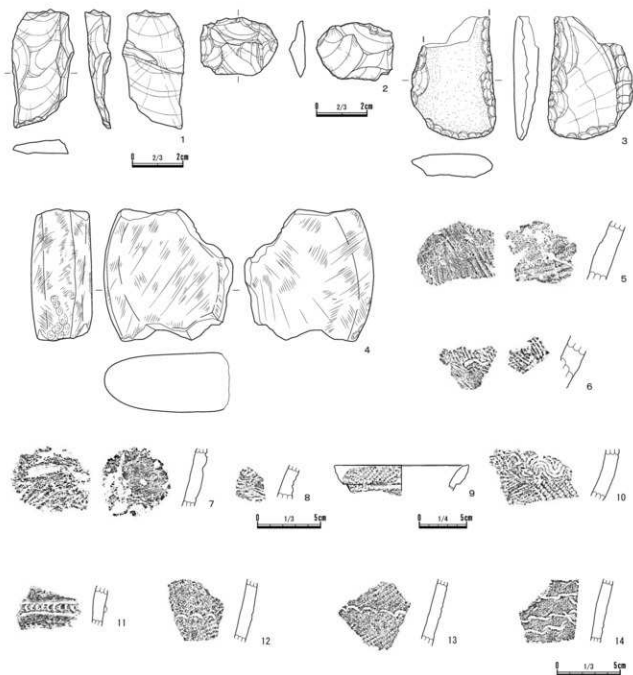
55は碁石を模した泥面子で、近世以降の遺物である。

[銭貨] (第50図56、図版22-56、第20表)

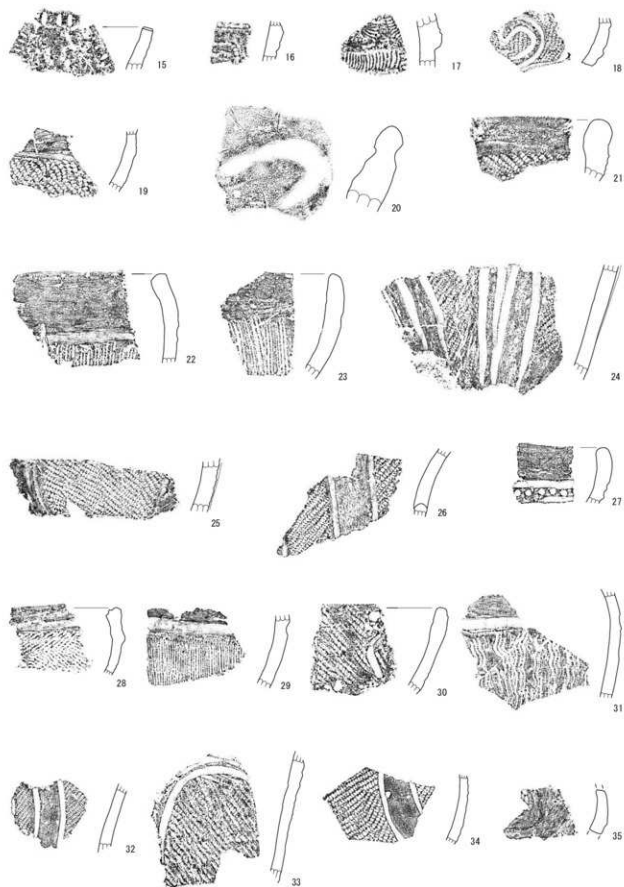
56は寛永通宝と見られ、外径から古寛永の可能性もある。

[鉄製品] (第50図57、図版22-57、第21表)

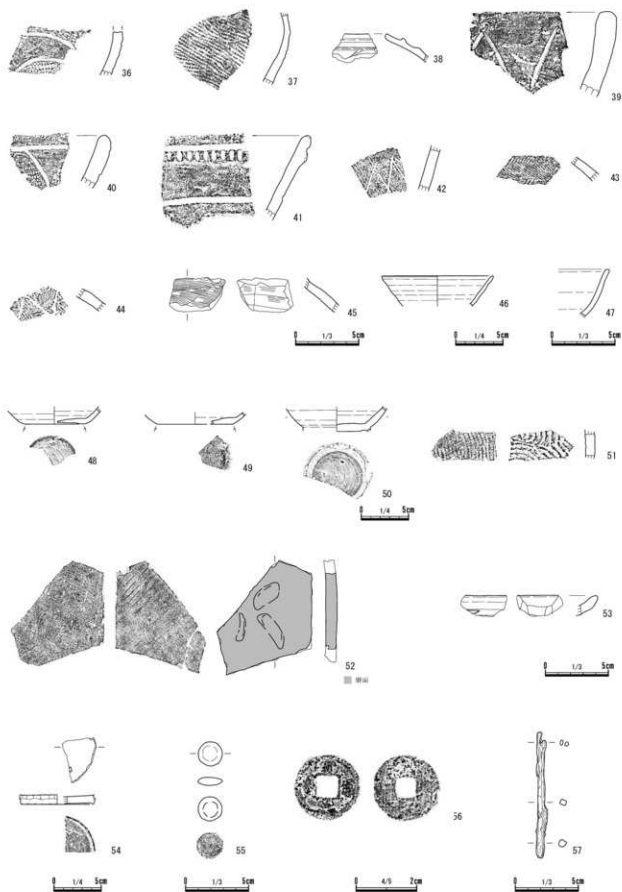
57は先端が二股に分かれる棒状の鉄製品で、器種は不明である。



第48図 遺構外出土遺物1 (2/3・1/3・1/4)



第49図 遺構外出土遺物2 (1/3)



第50図 遺構外出土遺物3 (1/3・1/4・4/5)

## 第3章 検出された遺構・遺物

発掘番号 図版番号	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第48図1 図版20-3-1	二次加工のある割片	チャート	4.6	2.5	0.6	8.0	不定形割片割片/素材片面は平坦面で、打点は明瞭/表面には縦・横位方向の割痕が認められる/素材未端部に二次的割痕が加えられている	97B
第48図2 図版20-3-2	二次加工のある割片	粘板岩	3.1	2.2	0.7	5.2	横長の割片を利用/表面は多方向からの割痕で構成されている/表面に面的な平坦割痕が認められる/表面の割痕に特徴的な連続模様	96B
第48図3 図版20-3-3	打製石片	砂岩	[9.8]	6.7	1.9	152.4	扇形/基部欠損/表面に自然面を残す横長の割片使用/側縁と刃部に連続した調整割痕を有する	96B
第48図4 図版21-4	磨石	砂岩	[10.5]	[10.2]	22.0	751.0	扁平な円盤を使用/円盤状の磨痕が現存/上下面と側面に磨痕。側面に打製痕がみられる/中央付近の割れ口縁面は磨らな丸みを帯びるため、欠損後の二次利用と考えられる	100B

第14表 遺構外出土縄文時代石器一覽

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・敷土	時期 型式等	出土位置
第48図5 図版21-5	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚2.6	器形は直線的に外縁する	内外面に浅い条痕文	ぶい・褐色/砂粒・ 白色砂子・繊維	縄文早期後葉 (条痕文系)	表土
第48図6 図版21-6	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.7	器形は直線的に外縁する	内外面に幅の狭い条痕文	ぶい・黄褐色/白色 砂子・赤色砂子・繊維	縄文早期後葉 (条痕文系)	98B
第48図7 図版21-7	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.1	器形は直線的に外縁する	内外面に浅い条痕文	ぶい・黄褐色/長石・ 白色砂子・繊維	縄文早期後葉 (条痕文系)	96B
第48図8 図版21-8	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.1	口縁部欠損。器形は外反する	外面・横位・弧状の磨痕面直 紋文と斜位の無彫縄文を押し捺 文	ぶい・黄褐色/石 英・長石・白色砂子・ 繊維	縄文早期末葉 ～前期前葉 (下表土～ 花輪下層ⅡC)	99B
第48図9 図版21-9	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚1.1	折り返し口縁/器形は強く外 縁する	幅広の折り返し部に単節L R 縄 文を押し捺文	黄褐色/チャート・ 白色砂子・繊維	縄文前期約前 (花輪下層ⅡC)	96B
第48図10 図版21-10	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.1	器形はやや内湾しつつ外縁す る	上位はコップ状文が施される。底 下に彫刻した単節L R 押し捺 文	ぶい・黄褐色/砂 粒・繊維	縄文前期前葉 (関山Ⅱ式)	96B
第48図11 図版21-11	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.0	器形は直線的で、わずかに外 縁する	無文の胴部に横位の結節縄文を 押し捺	ぶい・黄褐色/石 英・白色砂子・赤粒	縄文前期末葉	96B
第48図12 図版21-12	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.0	器形は直線的に外縁する	外面・横位単節L R 縄文と横位の 5字結節文	ぶい・黄褐色/石 英・赤石・雲母	縄文前期末葉	98B
第48図13 図版21-13	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚0.9	器形は直線的に外縁する	外面・横位単節R L 縄文と横位の 5字結節文	褐色/石英・長石・ 雲母	縄文前期末葉	99B
第48図14 図版21-14	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚0.9	器形は直線的に外縁する	無文の胴部に3段の5字結節 文を横位敷文	ぶい・黄褐色/チャ ート・石英・白色砂 子	縄文前期末葉	97B
第49図15 図版21-15	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚1.1	器形は僅かに内湾し、外縁す る	山形の底状は縁の頂部。外面右 側面に右向きに条痕文。頂部 と両側面に彫みを施す	ぶい・褐色/石英・ 雲母・長石・チャ ート	縄文中期中葉 (阿玉台Ⅰb ～Ⅱ式)	確認調査 67C
第49図16 図版21-16	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.2	器形は直線的に外縁する	縁部による横位区画内に丸縁状 工具による連続押し引き文を 合わせ、中央に横位底状文を敷 文	褐色/角閃石・長石・ 石英・白色砂子	縄文中期中葉 (豊沢Ⅰ式)	99B
第49図17 図版21-17	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.8	器形は直線的に外縁する	腹面を区画する隆帯に沿って横 位のキヤート文を敷文	ぶい・赤褐色/石 英・長石・チャ ート	縄文中期中葉 (豊沢Ⅱ式)	表土
第49図18 図版21-18	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.1	器形は丸みをもちつつ内湾しつ つ外縁する	横位単節L R 縄文に隆帯によ る網子状をチーフを押し捺	ぶい・褐色/石英・ 白色砂子	縄文中期後葉 (加曾利Ⅱ式)	98B
第49図19 図版21-19	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.0	器形は丸みをもちつつ胴部に至 る	横位単節L R 縄文を飾し、 隆帯を彫付し、楕円形の区画 を敷文	ぶい・褐色/石英・ 白色砂子	縄文中期後葉 (加曾利Ⅱ式) ～Ⅲ式	96B
第49図20 図版21-20	縄文土器 尚耳壺	把手 破片	厚3.2	器形は直線的に外縁する	3方の断面欠損/断面に厚みが あり、大型品の把手と推察され る/無文の横文に下向きのJ字 状沈線を敷文する	ぶい・黄褐色/石 英・チャート・白色 砂子	縄文中期後葉 (加曾利Ⅱ式)	98B
第49図21 図版21-21	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚2.1	器形はほぼ直立し、下部に僅 かに内湾する	横位単節L R 縄文に弧状の 沈線で区画を施す	ぶい・黄褐色/長 石・チャート・赤 粒	縄文中期後葉 (加曾利Ⅱ式)	98B
第49図22 図版21-22	縄文土器 鉢	口縁部 破片	厚1.5	器形はやや内湾する	口縁部に横位の無文帯をもち、 横位の横状沈線が施し、直下より 条痕を縦位に敷文	ぶい・黄褐色/長 石・石英・白色砂 子	縄文中期後葉 (加曾利Ⅱ式)	96B
第49図23 図版21-23	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚1.5	器形は直立気味で胴部へと内 湾する	口縁部無文帯の下に横位の単 節L R 縄文を敷文/文様帯は磨 り消し、3本の沈線が施す	ぶい・褐色/長石・ チャート・白色砂 子	縄文中期後葉 (加曾利Ⅱ式)	96B
第49図24 図版21-24	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.2	器形は直線的に外縁する	平行する無文帯間に縦位の単 節L R 縄文を敷文/文様帯は磨 り消し、3本の沈線が施す	ぶい・黄褐色/石 英・角閃石・長石・ チャート	縄文中期後葉 (加曾利Ⅱ式)	98B
第49図25 図版21-25	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.3	器形は僅かに内湾しつつ、外 縁する	弧状の隆起彫文による区画内 に縦位の単節L R 縄文を敷文/ 区画外縁り消し	ぶい・褐色/石英・ 長石・黄褐色砂子	縄文中期後葉 (加曾利Ⅱ式)	98B

第15表 遺構外出土縄文土器一覽(1)

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・胎土	時期 型式等	出土位置
第49図26 図版21-26	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.1	器形は強く外反し、外縁する	地文単距R L縄文/2本1対の 沈線を伴う横溝縞文/内外面 磨ける	ぶい・褐色/黄褐色 粒子・赤褐色粒子	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	97B
第49図27 図版21-27	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚1.2	器形は内湾する	口縁部は縞文の下に平行沈線を 伴い、下に凹み部を有する 縞文とする。間に凹み部を有 する縞文とする。	ぶい・褐色/チャート・ 赤褐色粒子・黒色 粒子	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	96B
第49図28 図版21-28	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚1.2	器形は内湾する	口縁部の無文帯の下に横溝縞 帯付/深部の下面から下位 に無紋、横溝縞単距R L縄文 文による羽状縞文	ぶい・褐色/石灰 ・チャート・赤色 粒子	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	96B
第49図29 図版21-29	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.1	器形は内湾しつつ僅かに外縁 する	横溝縞縞文の直下に細かな縞 帯を縦位に施文	ぶい・褐色/長石・ 白色粒子・赤色粒子	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	97B
第49図30 図版22-30	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚1.3	器形は僅かに内湾しつつ外縁 する	地文は無紋Lを縦位縞文/単沈 線による横溝縞文を垂下 する	ぶい・褐色/長石・ 白色粒子・小礫	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	97B
第49図31 図版22-31	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚0.9	器形は内湾しつつ直立する	内面：磨き状の横ナデ/外面： 無文帯の下に横溝縞文を垂下 /直下に反折の縞帯を垂下する	ぶい・褐色/長石 ・チャート・赤色 粒子	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	98B
第49図32 図版22-32	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚0.9	器形は僅かに外反する	内面：横ナデ、磨き/外面：地 文縦位単距Lを施文/高向の沈 線による縞帯を垂下する	ぶい・黄褐色/石灰 ・白色粒子・赤色 粒子	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	98B
第49図33 図版22-33	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.0	器形は直線的に外縁する	地文は縦位の単距L L縄文/沈 線による逆折子区画	ぶい・褐色/長石・ チャート・小礫	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	表土
第49図34 図版22-34	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚0.8	器形はやや内湾する	地文は縦位の単距L L縄文/平 行する沈線を伴う逆折子区 画縞文	灰黄褐色/長石・ 白色粒子・黒色粒 子	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	96B
第49図35 図版22-35	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚1.1	器形は内湾する	幅広い平行する沈線による逆 折子区画/沈線間は無文	ぶい・黄褐色/チャ ート・白色粒子	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	96B
第50図36 図版22-36	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚0.8	器形は内湾する	地文単距R L縄文に弧状平行沈 線を施文/沈線間磨り消し	褐色/石灰・長石 ・チャート・砂粒	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	96B
第50図37 図版22-37	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚0.7	いわゆる瓶型の胴部/器形は 強く内湾する	単距L L縄文を縦・斜位に施 文	褐色/赤褐色粒子・ 黒色粒子・磨粒	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	96B
第50図38 図版22-38	縄文土器 有孔貯付 土器か	口縁部 破片	厚1.8	器形は強く内湾する	無文の口縁部に横溝縞帯を施 り、下段の隆帯直下に隆帯の強 いナデ	ぶい・黄褐色	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	98B
第50図39 図版22-39	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚2.6	器形はわずかに内湾	沈線による縦列する山形文内に 横位の細かなナデが施される/ 他は無文	ぶい・褐色/赤褐色 粒子・黒色粒子・石 ・チャート・長石	縄文中期後葉 (加普利EⅡ式)	98B
第50図40 図版22-40	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚1.3	器形は僅かに内湾しつつ外縁 する	強い無文帯の下に横溝縞縞を 施す/内面の平行沈線内に斜位の 横溝縞 L L縞文を施文する	褐色/赤褐色/長石 ・チャート・石灰	縄文後期前葉 (株名寺式)	100B
第50図41 図版22-41	縄文土器 深鉢	口縁部 破片	厚1.1	器形は直線的に外縁する	口縁部に横溝縞縞と隆帯を帯付 隆帯に等間隔に施す/内面を磨 す/無文帯をほさず、横位沈線 を施文	明褐色/石灰・長 石・赤褐色粒子	縄文後期前葉 (堀之内式)	98B
第50図42 図版22-42	縄文土器 深鉢	胴部 破片	厚0.8	器形は直線的に外縁する/外 面磨ける	外面に単沈線を斜位に交差さ せ、縞帯状とする	ぶい・黄褐色/石 ・チャート・砂粒・ 褐色粒子	縄文後期前葉 (加普利EⅡ式)	96B

第15表 遺構外出土縄文土器一覽(2)

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・胎土	時期 型式等	出土位置
第50図43 図版22-43	弥生土器 甕	胴部 破片	厚0.7	胴部は内湾する	地文 横位の単距R L羽状縞文 に、赤色の内文を施文	ぶい・黄褐色/石 ・チャート・砂粒	弥生後期～ 古墳前期	97B
第50図44 図版22-44	弥生土器 甕	胴部 破片	厚0.8	胴部は僅かに内湾する	山形沈線文区画内に単距L L縞 文を羽状に施文/下向き山形 文内は赤色	ぶい・褐色/チャ ート・褐色粒子	弥生後期～ 古墳前期	96B
第50図45 図版22-45	弥生土器 甕	胴部 破片	厚2.1	胴部は大きく内湾して腹面に 至る/外面うすく磨ける	内面：横位ヘラナデ/外面：横・ 斜位のハケ目調整後、ナデ	灰黄褐色/長石・ チャート・褐色粒 子・白色粒子	弥生後期～ 古墳前期	96B

第16表 遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期土器一覽

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・胎土	時期 型式等	出土位置
第50図46 図版22-46	須石器 杯	口縁部～ 体部下半 高	口 [11.4] 高 [3.3]	口縁部～胴部にかけて直線的に 外縁する	ロクロ成形/外面のロクロ目調 磨/南北企製品	褐色/長石・チャ ート・海神骨針	平安時代 (9c後半か)	96B
第50図47 図版22-47	須石器 杯	口縁部～ 体部下半 破片	高 [3.8]	口縁部はゆるやかに外反する	ロクロ成形/外面の磨擦調整/ 南北企製品	灰色/長石・海神 骨針	平安時代 (9c後半か)	96B
第50図48 図版22-48	須石器 杯	体部下半～ 底部 25%	高 [1.9] 底 [6.0]	体部はわずかに内湾し、内底 中央部は凹む	ロクロ成形/底部面を糸切り 磨、調整/南北企製品	褐色/長石・小石・ 砂粒・海神骨針	平安時代 (9c後半か)	確認調査 1Tr

第17表 遺構外出土奈良・平安時代の土器一覽(1)

### 第3章 検出された遺構・遺物

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	色調・胎土	時期 型式等	出土位置
第 50 図 49 図版 22-49	瓦車器 椀	体部下平～ 底面 15%	高 [1.3] 底 (8.0)	胴部は僅かに丸みをもち、内 底面は凹む	底面回転糸切り後、無調整/ロ タロ成形/南北土製品	灰黄褐色/砂粒・小 石・海綿質粒	平安時代 (9c後半)	遺構外
第 50 図 50 図版 22-50	瓦車器 高台付椀	体部～底面 60%	高 [2.6]	表面粗粒散粒、体部は直線内 に外張する/体部外面上端は ふくらみをもち、胴部は直線 的に外張する	ロタロ成形/外面：体部下端へ うすり、底面回転糸切り後、 底面回転糸切り後、高台取付後、 底面回転糸押し入れ/東金子製品	黄灰色/長石・砂粒・ 小石	奈良時代 (8c後半)	遺構外
第 50 図 51 図版 22-51	瓦車器 鉢	胴部 破片	高 [2.3]	胴部は僅かに内湾する	内面：同心円当具痕/外面：格 子タタキ/東金子製品	白～黄褐色/白色 粒子・砂粒	奈良時代 (8c)	遺構外
第 50 図 52 図版 22-52	瓦車器 鉢 (転用砥石 又は皿)	胴部 破片	高 [9.1]	僅かに内湾する胴部破片	内面：細かな同心円当具/外面： 平行タタキ/割縁のうち一面を 研磨/内面に磨痕の凹みが見ら れるため、砥石か磨盤は無いが 礎として再利用したと思われる /東金子製品	黄灰色/長石・砂粒	奈良時代 (8c)	確認調査 5T

第 17 表 遺構外出土奈良・平安時代の土器一覽 (2)

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期	出土位置
第 50 図 53 図版 22-53	陶器 皿	口縁部 5%	高 [1.7]	ロタロ成形/口縁部は内湾する/外面のロタロ目明顯/内外 面志野輪 (長石輪)	瀬戸・美濃系	中近世 (1390～1660年代)	表土
第 50 図 54 図版 22-54	陶器 皿	底面 25%	高 [1.0] 底 (7.3)	ロタロ成形/底面は中心に向かってやや傾斜する/体部は意 図的に打ち欠かれる/内外面志野輪 (長石輪) /買入器/見 込みに目跡	瀬戸・美濃系	中近世 (1390～1660年代)	確認調査 1T

第 18 表 遺構外出土中世以降の陶器一覽

発掘番号 図版番号	種別 器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第 50 図 55 図版 22-55	土製品 記念品	1.9	1.9	0.52	1.7	鉄石を模したと思われる、表面面とも薄らかに顔面調整されている/色調・胎土は 褐色、砂粒を含む	覆土

第 19 表 遺構外出土中世以降の土製品一覽

発掘番号 図版番号	銭貨名	初周年	外径 (cm)	方孔一辺 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第 50 図 56 図版 22-56	寛永通宝か	1636年	2.2	0.7	0.1	1.8	正面上に「寛」、右に「通」と読み取れ、他は不明/形状・ 外径から古寛永の可能性がある	確認調査 5T

第 20 表 遺構外出土銭貨一覽

発掘番号 図版番号	種別 器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第 50 図 57 図版 22-57	鉄製品 不明	10.0	0.6	0.6	9.3	棒状で頂部は二部に分岐し、長さはそれぞれ長短の違いがみられる/上下部端の 断面は円形、中部は方形/下部に跡が多く付着	確認調査 5T

第 21 表 遺構外出土金属製品一覽

## 第4章 調査のまとめ

### 第1節 中野遺跡第117地点の成果

中野遺跡第117地点の発掘調査では縄文時代の土坑1基、古墳時代後期の住居跡7軒・ピット4本、中世以降の掘立柱建築遺構1棟・土坑6基・ピット3本が検出された。ここでは当地点の主体を占める古墳時代後期の住居跡について出土遺物からまとめることにする。

#### (1) 土器の器種構成と分類について

今回出土した古墳時代後期の土器は、土師器高坏・坏・壺・甕・甔形土器の5器種である。

古墳時代後期の主な出土遺物である土師器の高坏・坏・埴・壺・鉢・甔・甕形土器については志木市で詳細な編年が行われている（尾形 1999・2000・2001）。当遺跡の出土遺物の編年の位置づけを得るため、同様の分類を試み、志木市の編年と照らし合わせる。なお、中野遺跡の分類であるため、下記のカテゴリ項目は志木市の編年と併せて中野遺跡第25地点（尾形・深井 2001）の細分を参考にしつつ、一部変更した上で当遺跡の出土遺物と対応させたものである。

#### 1. 坏形土器

本遺跡において実測可能な土器は総数49個体であった。

A類 頸部にくびれを有し、器高の高いもの（100H-1）。

B類 口縁部が「S」字状を呈するもの。

- 1 器高の高いもの（該当なし）。
- 2 いわゆる比企型坏（水口 1989、尾形 1999）と呼ばれるもの。
  - a 初現段階の比企型坏である（97H-2、98H-1～3）。
  - b 大型化した比企型坏である（96H-1、99H-3～5）。
  - c 定型化した比企型坏である（該当なし）。

C類 底部から口縁部にかけて、大きく内湾するもの。

- 1 器高の高いもの（96H-15、99H-1・2）。
- 2 1より扁平のもの（96H-2・3）。

D類 有段口縁を呈するもの。

- 1 口径12～14cmを呈するもの。
  - a 口縁が直立、もしくは外傾するもの（97H-7、98H-4～7、99H-6）。
  - b 口縁が内傾するもの（96H-4～6）。
- 2 口径15cm以上の大型のもの。
  - a 口縁が外傾するもの（95H-1、97H-3～5）。
  - b 口縁が外反するもの（96H-8・10・11、97H-6、98H-8～10・12、99H-8）。
- 3 有段口縁の段が消去されたもの。

- a 口縁が外反するもの (97H-8・9)。
  - b 口縁が内湾するもの (96H-12・13)。
  - c 口縁が短く内傾するもの (96H-14)。
- 4 小針型環 (99H-9)。

## 2. 高坏形土器

当遺跡からは1点のみの出土であった。

- A類 長脚を基本とするもの (該当なし)。
- B類 短脚を基本とするもの (97H-1)。

## 3. 甔形土器

実測可能な土器は9個体であった。

- A類 筒抜け式で、複合口縁を呈するもの。
  - 1 口縁から底部にかけてすぼまるもの (96H-29、98H-26・27)。
  - 2 長胴のもの (97H-24～26、99H-20・21)。
- B類 単純口縁を呈するもの (97H-27)。

## 4. 甕形土器

実測可能な土器は51個体であった。

- A類 球状の胴部をもつもの。
  - 1 a 小型のもの・「く」の字形口縁 (98H-14・15、99H-11)。
  - 2 a 中型のもの・「く」の字形口縁 (95H-2、97H-12)。
  - 2 b 中型のもの・「コ」の字形口縁 (96H-18・19、97H-10・11、98H-16・17、99H-12～14)。
- B類 長胴の兆しがあるもの。
  - 1 a 中型のもの・「く」の字形口縁 (97H-13・14、99H-15)。
  - 1 b 中型のもの・「コ」の字形口縁 (97H-15～17、98H-20)。
  - 1 c 中型のもの・弓状口縁 (96H-20、97H-18・19、98H-21、99H-16～18、7P-1)。
- C類 長胴化したもの。
  - 1 最大径が胴部中位にあるもの (98H-22・23)。
  - 2 最大径が胴部上半にあるもの (96H-22)。

## 5. 壺形土器

実測可能な土器は1個体であった。

- A類 複合口縁を呈するもの (該当なし)。
- B類 単純口縁を呈するもの (96H-17)。



## (2) 各住居跡および7号ピットから出土した土器について

前述した項目に則り個々の土器を分類し、遺構ごとの様相をみていく。ただし、101号住居跡は、時期を決定する遺物が出土していないため触れていない。結果見出された第117地点における各器種の変遷は第51・52図に示した。

今回の調査では古墳時代後期の中でも6世紀の住居跡がまとめて検出されており、建て替えながら間断なく存続した住居の遺物の遺物は区分が難しく、該期を1期（6世紀前葉～6世紀中葉・6世紀2/5～3/5）と2期（6世紀後葉・6世紀4/5）に区分し、6世紀前葉に主体があるものを1期前半、中葉に主体があるものを1期後半として考察していくこととする。なお、志木市の編年においては5世紀から7世紀までを1期20年として15期に分けており、6世紀代は6期（6世紀1/5）～10期（6世紀5/5）に相当する。

### 1期前半（6世紀前葉～中葉）- 97号住居跡（第23～25図、図版12-2・13・14・15-1）

実測可能な土器は高環形土器（以下、「形土器」省略）1点、環8点、甕14点、甌5点である。

1の高環は環部の稜が弱く、深身のもので、全体に粗いナデ調整が施されている。1は中野遺跡第25地点で6点、13地点で1点出土している高環の中で、中野遺跡第25地点14号住居跡5と形状・調整が類似するB類の短脚タイプである。5世紀後葉とされる14号住居跡の高環より一回り大型で、より粗雑な造りであることから後出的とみられ、6世紀前葉の所産と考えられる。

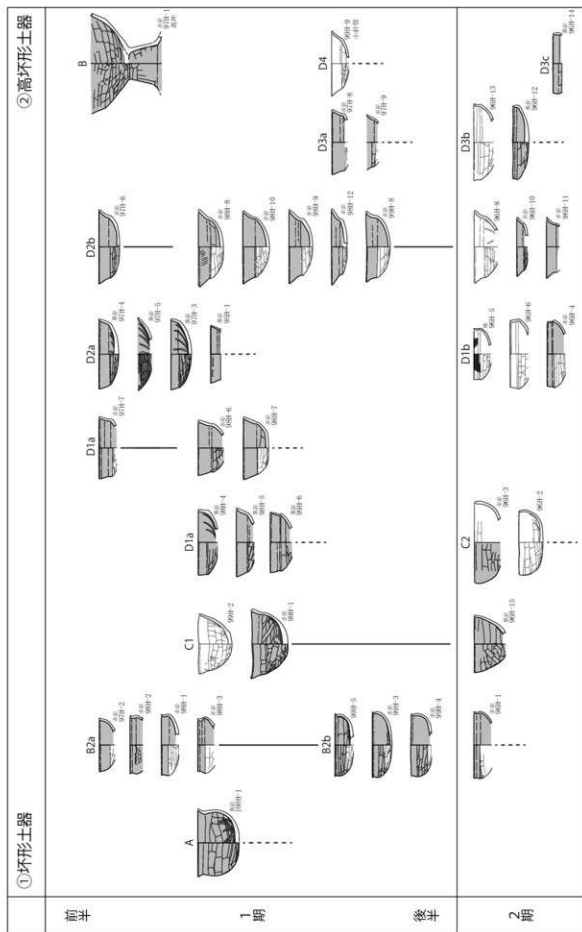
環は8点で、2はB2a類のいわゆる初現的な比企型環である。D類は7点と主体を占め、内3～5はD2a類の暗文が施される黒色系土器で、4・5は胎土が赤褐色を基調とすることから、いわゆる「入間系土師器」（以下、入間系土師器）である（尾形 2008）。他D2b類の6、D1a類の7、D3a類の8・9は赤色系である。

甕は10が球胴状の甕とみられ、複合口縁のA2b類に分類される。同じく複合口縁を有する城山遺跡第62地点244号住居跡11・246号住居跡14などはいずれも5世紀中～後葉に比定されているが、10の頸部は口唇部が強く外反し、しっかりとした「コ」の字形状を呈することから、6世紀前葉の所産ととらえたい。

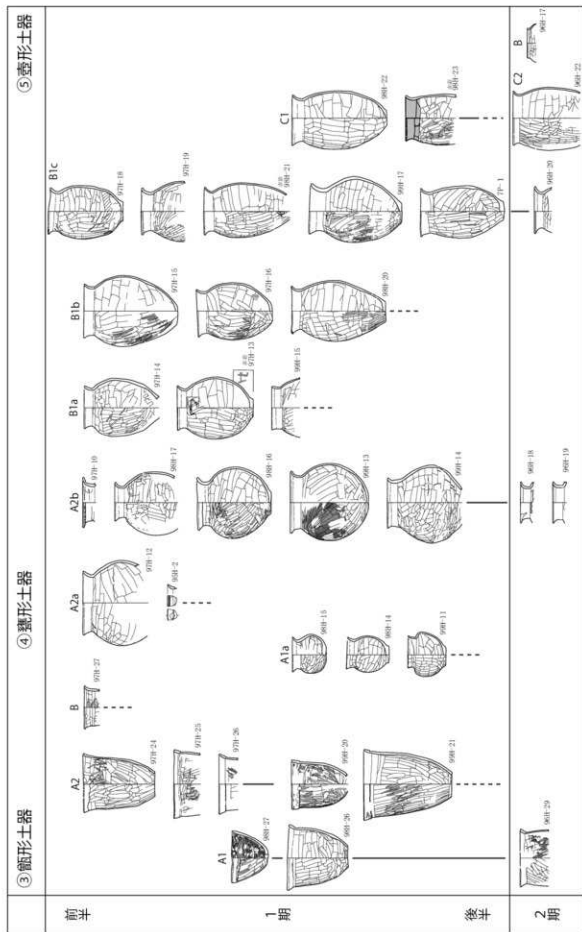
他の甕はA類がA2b類の11、A2a類の12の2点、B類がB1a類の13・14、B1b類の15～17の5点、B1c類の18・19の2点、C類が2点であり、胴部が長胴化に至らず、卵形のものが主体を占める。13は胴部が球胴に近い甕で6世紀前葉の要素が強く、胴部に赤色顔料で記号のようなものが描かれている点の特筆される。

甌は5点出土し、A2類が3点、B類が1点、口縁部が不明で長胴のものが1点である。A2類の24～26は全て口縁部が横ナデ調整されており、胴部にハケ目調整が見られず、粗いヘラ磨き調整が施される。27はB類で内面はナデ残されたハケ目調整痕がみられる。志木市ではB類は6世紀前葉から確認されており、ハケ目をナデ消す調整などから27も同期のものと考えられる。97号住居跡は貯蔵穴が重複していることから、住居跡内出土遺物にも時期差が表れないか検討したが、貯蔵穴内からの出土遺物が極めて少なく、分類に反映できるほどの時期差は見いだせなかった。しかし、他の住居に比べ、ある程度長い期間存続していたと考えられる。

甌と甕に6世紀前葉の要素を有するものが散見されるが、環は有段環が主体をなし、6世紀中葉の様相を示すことから、遺物の全体としての時期は1期前半（6世紀2/5～3/5）と考えられ、志木市



第51図 环・高环形土器の変遷 (1/8)



第52図 甔・壺・甔形土器の変遷(1/14)

編年の7期～8期に相当する6世紀前葉から中葉と考えられる。

#### 1期後半（6世紀中葉）—95号住居跡（第9図、図版11—1）

本住居跡の実測可能土器は坏1点、甕1点の2点のみで、いずれも小片であった。

坏は大型の有段坏で、口縁部外傾・黒色系土器であることからD2 a類とした。

甕は頸部の半ばまでの残存であるが、口縁が「コ」の字には至らず、「く」の字の形状に近く、内面にハケ目調整痕が残ることからA2 a類に属すると思われる。このタイプの甕は6世紀中葉まで残るとされている（尾形 2000）。

大型の有段坏と甕の特徴から、95号住居跡は1期後半（6世紀3/5）、志木市編年の8期に相当する6世紀中葉の所産と考えられる。

#### 1期後半（6世紀中葉）—98号住居跡（第30～32図、図版15—2・16・17・18—1）

実測可能な土器は坏12点、壺1点、甕11点、甔2点である。

坏は1～3がいわゆる比企型坏のB2 a類で、いずれも口径が13cm未満で口唇部に沈線がまわらず、内面及び口縁部外面が赤彩される。1は胎土が赤褐色の入間系土師器であり、2は胴部に磨き調整が施され、3は体部の屈曲が強く1・2とはやや異質な印象を受けるが、1と同様の調整・出土層位であるため、3点全てを初現的な要素をもつタイプとして分類する。D1 a類は4・5が黒色系、6・7が赤色系である。D2 b類は8～12の4点で、全て赤色系である。

甕は14・15が小型甕のA1 a類、16・17はA2 b類で球胴状である。20はB1 b類の長胴化したつづあるタイプで、口縁部に弥生時代から古墳時代初めまでみられるハケ目調整痕に付けられるような連続刻みを持つ。21はB1 c類、22・23はC1類で頸部が弓状に変化しつつある甕、23は口縁部から胴部への移行がスムーズで、口縁部内外面が赤彩されている甕である。

甔の26・27は複合口縁のA1類。27は胴部が逆三角形の小型のもので内面にハケ目調整が残る。このタイプは5世紀末からの調整方法を受け継ぐもので、志木市では6世紀中葉まで残るとされている（尾形 2004）。

坏1～3のいわゆる比企型坏は6世紀前葉に、4～12のD類の有段坏は6世紀中葉に比定され、時期差がみられるが、1～3は住居跡覆土上～中層の出土であるのに対し、D類の大半が床面付近からの出土であること、甕にC1類の長胴化したものが入ることから、本住居跡の遺物の時期は1期後半（6世紀3/5）と考えられ、志木市編年8期に相当する6世紀中葉とらえたい。

#### 1期後半（6世紀中葉）—99号住居跡（第37～39図、図版18—2・19）

実測可能な土器は坏10点、甕8点、甔2点であった。

坏は1・2が深身のC1類で、口縁部と体部の間にわずかに括れを有する。志木市ではC類は5世紀からの系譜をもち、6世紀中葉まで少数ながら存続するとされている（尾形 2003）。3～5のいわゆる比企型坏は3点ともB2 b類で、口縁直下に稜をもち、13～14cmのやや大型化したもののみで構成されている。6はD1 a類、8はD2 b類、9はD4類に分類され、胎土が精錬された小針型坏である。10は口縁部がわずかに内湾し、体部に稜を有さない坏とみられ、C2類に属する可能性がある。

甕は11～14がA類で、11がA1 a類、12～14のA2 b類である。そのうち13は外面上位にハケ

目調整が施され、古相を帯びつつも口縁部は「コ」の字型の新しい要素を持ち合わせた土器である。15～19はB類で、15はB1a類、16～18はB1c類に分類され、口縁部は弓状で卵型の胴部に粗いヘラ磨き調整が施される。19はB1類の胴部である。

甗はA2類の20・21が出土している。20は内面にハケ目調整が施され、折り返し口縁部の一部を胴部になじませるように粗い指頭押圧を施す点などから、21と同時期の6世紀中葉の所産とみられる。

やや大型化した比企型環と大型の有段環、小針型環との共伴、長胴化しつつある甗の形態の組み合わせなどから99号住居跡の土器は1期後半（6世紀3/5）、志木市編年8期に相当する6世紀中葉と位置づけられる。

### 1期後半（6世紀中葉）－100号住居跡（第41図、図版20－1）

実測可能な土器は坏1点と甗1点のみである。坏は深身の黒色系土器A類で、ヘラナデとヘラ磨き調整が比較的丁寧に施され古相を帯びる。甗は頸～肩部のみの破片であるが、残存部から口縁部は弓状を呈し肩部は丸みをもつ点、調整はヘラナデとヘラ削りが併用されている点から、6世紀中葉段階のB類と思われる。甗が岡溝内覆土から出土しており、また、坏が接合により一個体に復元された一括資料であることから、本住居跡は1期後半（6世紀3/5）、志木市編年8期に相当する6世紀中葉と考えられる。

### 1期後半（6世紀中葉）－7号ピット（第43図、図版20－2）

1のほぼ完形の甗はB1c類である。頸部が弓状で長胴化しつつある形態から1期後半（6世紀3/5）、志木市編年8期に相当する6世紀中葉の所産と考えられる。7号ピットは97号住居跡のカマドを切るように設けられているが、97号住居跡とはさほど時期差がないと考えられる。

### 2期（6世紀後葉）－96号住居跡（第16・17図、図版11－2・12－1）

本住居跡の実測可能土器は坏16点、壺1点、甗12点であった。

坏はB・C・D類で構成される。1は口径が14cmとやや大型の比企型環であり、口縁直下に明瞭な稜を有するためB2b類と分類する。2・3はC2類で口縁部が内湾する器高の高い坏で、2には暗文が施される。4～14はD類の有段環である。4～6はD1b類の須恵器坏身模倣坏で、体部が内傾し、堅緻な造りである。4のみ赤色系、5・6は無彩系である。7は小ぶりて底部のヘラ削りは他に比して粗く、D1aとする。D2b類は8・10・11である。10は底部が扁平で、器高が低い。他に口縁が内湾するD3b類の12・13や、14の体部の段が消失したD3c類・黒色系須恵器坏身模倣坏が共伴している。14は4～6に比べると、全体的にシャープさに欠け、緻密な造りではないことから後出的なものととらえ、別類型とした。15は黒色系・深身・底部がすぼまる形状でC1類とした。C類は5世紀中葉から出現し、6世紀中葉まで存続するタイプで、6世紀後葉での出土例を見ないものである。今後類例が現れるか注視される。

坏にはD類の多様な形態のものが共伴しており、定型化したいわゆる比企型環は不在である。

17は短頸の壺形土器のB類である。小型壺で、口縁は直立気味に立ち上がり、胴部には横位ヘラケズリ調整が施される。同じ特徴をもつタイプとして志木市城山遺跡第59地点168号住居跡から出土した壺（168H-12）が挙げられ、須恵器短頸壺に類似するタイプの6世紀中葉のものと考察されており、

17も同様のものととらえたい。

甕はA・B・C類で構成される。A類の球胴状甕の18・19はA2b類に細分され、頸部は「コ」の字状を呈する。20はB1c類で、21はA類の胴部と思われる。22はC2類、23はC類の口縁とみられ、頸部は弓状を呈するものである。

甗は29の1点のみでA1類に属し、胴部は不明である。なお甕の26は甗に転用したとみられる。

大型の比企型環や須恵器環身横做坏などの多様な坏の共存、そこに定型化したいわゆる比企型環が登場しない点、甕に6世紀後葉に主流となるC2類の長胴化した形態のものが入る点等を勘案すると、96号住居跡の土器は2期（6世紀4/5）、志木市編年の9期に相当する6世紀後葉のものと考えられる。

### (3) 第117地点における住居跡の年代観について

今回の調査において、切り合い関係によって新旧関係が明らかになっている住居跡は99・101号住居跡の2軒のみであり、101号住居跡→99号住居跡の関係が成立している。99号住居跡が6世紀中葉とみられることから、101号住居跡は必然的にそれ以前の年代となるが、遺物が検出されていないので具体的な年代は不明である。

前述の遺物の検討から導かれた各住居跡の年代観は、6世紀前葉～中葉の住居跡が97号住居跡、6世紀中葉の住居跡は95・98・99・100号住居跡、6世紀後葉の住居跡は96号住居跡である。

1・2期を通じて、坏においては、いわゆる初現的な比企型環から大型品への変化、有段環が盛行し、北関東からの搬入品と考えられる黒色系土師器環や坂戸市東部からの搬入品である入間系土師器環、埼玉古墳群周辺、もしくは埼玉古墳群以東からの搬入品である小針型環と無彩系の在地系土師器環との共存といった傾向が見てとれ、甕においては「く」の字状口縁から「コ」の字状、弓状口縁への移行、胴部の球胴状から長胴化への変化などが顕現し、5世紀末から継承されてきた形態・調整手法が7世紀からの新しい形態・調整手法へと移行していく様相が再確認された。

今回の第117地点の調査によって、これまでの中野遺跡の調査結果に、まとまった6世紀代の貴重な資料が追加されたと言える。

---

## 第2節 中野遺跡における古墳時代の遺構分布

---

### (1) 第117地点に見られる住居跡分布

今回の発掘調査では7軒の住居跡が検出された。そのうち時期の推察が困難な101号住居跡を含め、いずれも古墳時代後期の住居跡と判断される。前節において出土遺物から住居跡の年代を求め、6世紀中葉を中心とした住居跡が配置されていることが明らかとなった。6世紀前葉に97号住居跡が造られ、3回に渡る造り替え、最終的には6世紀中葉まで存続したと考えられる。同時期に95・98・99・100号住居跡の4軒が造られる。その後、6世紀後葉に96号住居跡が造られている。

今回の発掘調査の成果の一つとして注目されるのが、一辺8.0mを越す大型住居跡である96号住居跡の検出である。中野遺跡では第25地点（尾形・深井 2001）の発掘調査において大型住居跡が1軒確認されており、調査報告書が既刊されている中では2例目となる。第25地点の調査報告書において尾

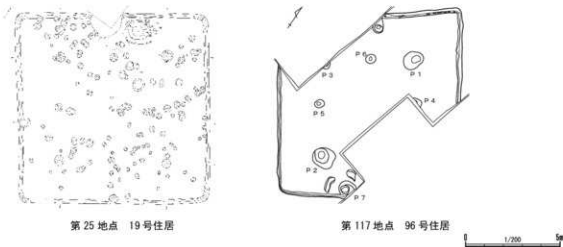
形氏は大型住居跡を含む市内の古墳時代後期の住居跡について、構造的な考察を行っている（尾形 2001）。第53図は第25地点19号住居跡と96号住居跡を同縮尺で示したものである。19号住居跡は長軸10.27m、短軸10.07mの規模であり、96号住居跡の長軸9.69m、短軸現況7.63mを上回っている。19号住居跡が7世紀前葉、96号住居跡が6世紀後葉と年代的な違いはあるが、構造的には似ており、集落内においても同様の役割を果たしていたことも推察される。第25地点の調査報告書刊行から20年以上の年月が経過し、時代は異なるが、城山遺跡第62地点251号住居跡（尾形・徳留・深井・青木 2012）をはじめ、志木市内や近隣市町遺跡において、大型住居跡の頻例が増加しており、それらを含めた比較検討が必要であろう（註1）。

次にほぼ同時期の遺物が出土している95・97・98・99・100号住居跡について考えたい。出土土器からこれらの住居跡の変遷を追うのは困難だが、すべてが同時期に存在したとは考えにくい。そこで、これらの住居跡の変遷について主軸方位、位置関係から次のように考えられる（第4図）。

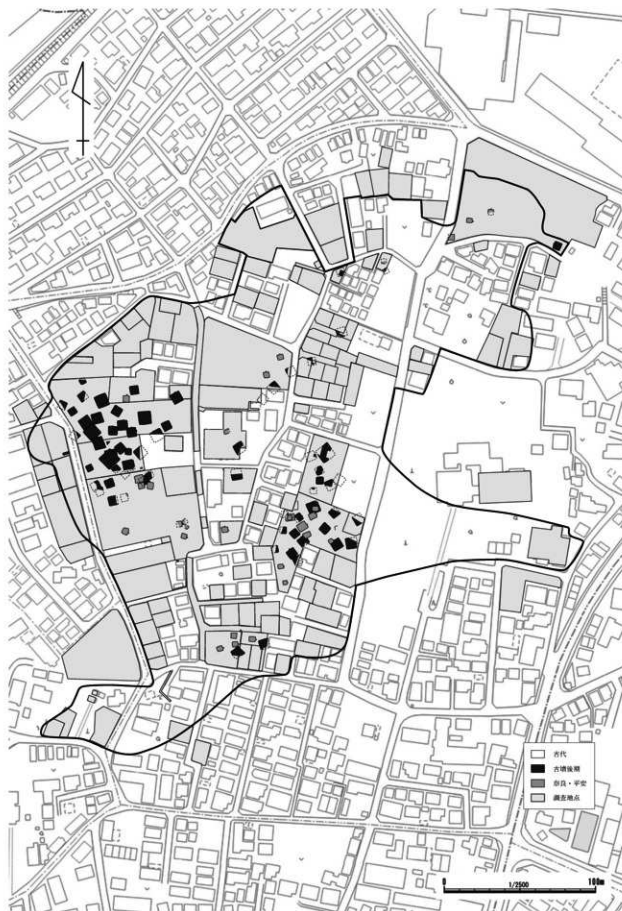
まず、97号住居跡は6世紀前葉に造られ、最終的には中葉まで使用された。97号住居跡の南約6mの距離に99号住居跡が存在する。この2軒の住居跡は主軸方位を揃えて造られ、また97号住居跡の東壁のラインを延長すると99号住居跡のカマドを通る中心線（主軸）を走ることとなる。このことから99号住居跡は97号住居跡を意識して建てられ、同時期にセット関係を持って存在していたと考えることも出来よう。また、同様に98号住居跡についても調査範囲が狭小ではあるが100号住居跡と2.5mの距離で主軸方位をほぼ揃えて建てられているようであり、セット関係で捉えることが可能である。95号住居跡については今回の調査範囲内でセット関係で捉えられる住居跡は確認されなかった。

このように主軸方位等により住居跡を類型化する集落の構造研究は、1970～80年代の集落研究の中心で、「個々の集落跡やそれを構成する個々の住居跡の分析を基本に、人間集団の営みを具体的に復元すること」を課題としていた（黒崎 1977）。

しかし、1981年に群馬県黒井峯遺跡（石井 1991）が発見され、多様な住居形態や関連施設が存在することが明らかとなった。そのことが住居跡を類型化する集落構造分析による集落研究の信頼性に大きな影響を与え、以後は集落の立地や消長が変化する画期を捉える動態分析が主流となっている（道上 2021）。実際に黒井峯遺跡や谷を隔てて立地する西組遺跡の発掘調査では、1軒の屋敷単位は約2,000m<sup>2</sup>を垣根で囲み、竪穴住居だけでなく、平地式建物、家畜小屋、高床式建物、畠等により構成



第53図 中野遺跡の大型住居跡（1 / 200）



第54図 中野遺跡住居分布図—古墳後期～奈良・平安—(1/2,500)



されていたことが明らかとなっている（石井 1991、大塚 1996、桐生 2015）。

いずれにせよ、今回の発掘調査の範囲内において住居跡の配置について考えるには限界があり、確認調査時の遺構分布図（第3図）をみると開発範囲内に少なくとも4～5軒は住居跡が存在している状況から、遺跡全体を俯瞰して考えていく必要がある。

## （2）中野遺跡の古墳時代住居跡の変遷

中野遺跡ではこれまでに古墳時代以降の住居跡103軒が確認されている。内訳をみると古墳時代後期が69軒、奈良・平安時代33軒、不明1軒となり、2/3を古墳時代後期が占めている。

第54図は中野遺跡の古墳時代後期と奈良・平安時代の住居跡の分布図、第22表は計測データである。この図と表には古墳時代後期33軒、奈良・平安時代13軒の未報告の住居跡も含まれるため、全体の傾向を捉えるために示した。ただし、盛土保存（現状保存）によって発掘調査を実施していない住居跡については反映されていない。分布図をみると古墳時代後期の住居跡は遺跡の西側及び、第117地点を含む中央南側に比較的多くの住居跡が集中していることが看取される。奈良・平安時代の住居跡は古墳時代後期の集中地域を含めた全体に広がっているようである。

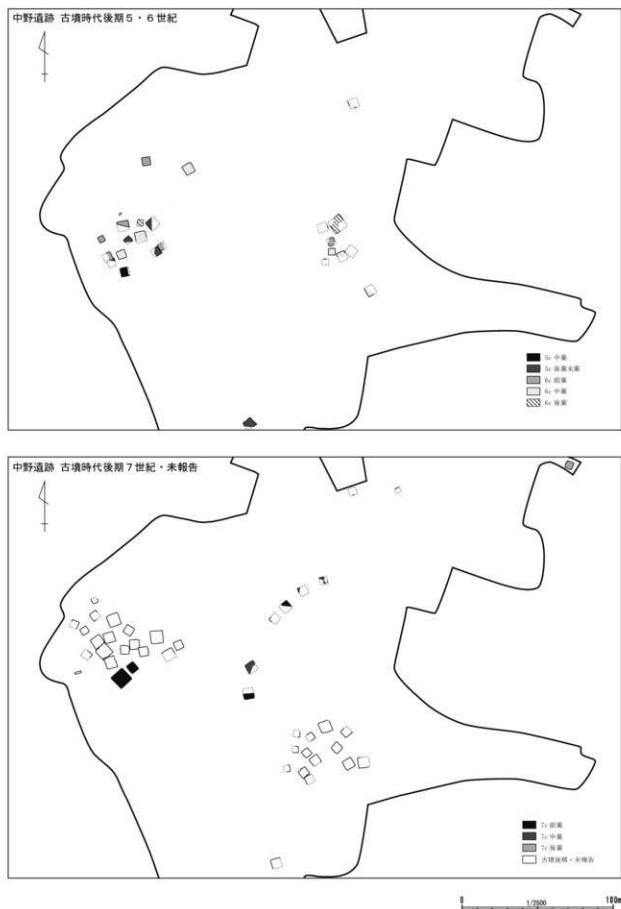
第55図は古墳時代後期の住居跡を調査報告書の年代観に基づいてさらに細分した図である。69軒の住居跡のうち半数近い33軒が未報告であるため、全体の傾向が反映されているか心許ないが、5世紀中葉に遺跡の台地西側に住居跡が出現し、6世紀には台地西側だけでなく台地内部にも住居跡が進出している。また、遺跡北側にも数軒単位の纏まりがみられる。さらに7世紀前半葉では台地西側の大型住居跡と台地中央に住居跡がみられるが、中葉から後葉には極端に住居跡が減少するようである。さらに、集落には住居跡だけでなく掘立柱建築遺構や井戸跡などの遺構も検出されるが、中野遺跡では、刊行された調査報告書には調査事例が報告されていない（註2）。本来であれば、住居跡や掘立柱建築遺構、井戸跡などを含め考えていくことが基本であるが、それらが存在しない集落である可能性も含めて総合的な分析が必要になるだろう。

集落構造を探る上では、少数や偏った資料による分析は、全体の傾向を正しく示していない可能性もあり、集落の変遷を全て網羅するためには調査報告書の刊行されていない地点や盛土保存遺構の数量なども考慮する必要があるため、極めて難しい作業である。今後は調査報告書の刊行で資料を蓄積し、集落構造を分析しては検証を重ねる基礎研究の積み重ねが求められている。さらに、出土物の編年研究は日進月歩であり、さらに細かな集落動態を導き出せる可能性を秘めている。また、周辺に存在する同時代の遺跡との関係についても今後の課題であろう。中野遺跡でいえば、同時代の城山遺跡や田子山遺跡との関係は集落構造の相関関係、周辺環境や交通路等、古墳時代後期から奈良・平安時代の地域を明らかにする上で重要な視点を与えてくれると思われる。今回の中野遺跡の調査による資料の提示は研究課題としておき、今後の資料の増加によりさらに中野遺跡の研究が深化することを期待したい。

### 〔註〕

註1 同じ柳瀬川（新河岸川）の下流域にある朝霞市ハケタ・中通遺跡第8地点の発掘調査において、古墳時代後期の8mを超す住居跡が3軒確認されている（未報告）。朝霞市教育委員会のご厚意により紹介させていただいた。

註2 中野遺跡第95地点で中世以降とされる9号井戸については、平安時代にさかのぼる可能性があるかと報告されている（尾形 2017）。また、志木市教育委員会によると未報告の第91地点において平安時代の掘立柱建築遺構が1棟確認されている。



第55図 中野遺跡古墳後期住居変遷図(1/2,500)

住居番号 (調査地点)	時 期	規模 (m)		土軸方位	カマドの位置	出土遺物	備 考
		長軸	短軸				
1H (第2地点)	古墳後期 6c前半、瓦高式期	5.70	5.60	N-87°-W	西壁中央	土師器環・埴・コップ形・壺・甕	貯蔵穴2基あり/瓦平の塀がカマド掛け口に掘入れられていた
2H (第2地点)	奈良 国分期	4.35	4.20	N-10°-E	北壁中央	須恵器環	床は踏み固められ、可成り床状
3H (第7地点)	古墳後期 瓦高式期	4.20	(1.60)	不明	—	甕	東側は調査区域外/大部分掘瓦で覆われる
4H (第12地点)	古墳後期 6c中葉、瓦高式期	6.66	6.50	N-25°-W	北壁中中央	土師器環・埴・壺・甕・高環	焼失後に埋め戻された可能性あり
5H (第16地点)	平安 9c中葉	(3.80)	3.85	N-10°-E	北壁中央か	須恵器環	北側調査区域外
6H (第16地点)	平安 —	3.70	3.30	N-88°-E	東壁中央	—	遺物僅か
7H (第16-50地点)	古墳後期 5c後半	(5.40)	6.50	N-20°-W	—	土師器環	遺物僅か
8H (第16地点)	平安 9c中葉	3.75	3.20	N-80°-E	東壁中央	土師器環	遺物僅か
9H (第18地点)	古墳後期 6c中葉、瓦高式期	(3.90)	6.70	N-28°-E	—	土師器環・高環・甕、鉄鏝16	鉄鏝多数出土
10H (第25地点)	古墳後期 6c中葉	(6.70)	7.40	N-12°-W	北東コーナー	土師器環・埴・高環・甕・壺、 骨製品、鉄滓	貯蔵穴の周囲に基受けとみられる段あり
11H (第25地点)	平安の可能性 詳細不明	(0.70)	(0.50)	不明	—	—	10Hを切る/カマドと思われる燃焼跡検出
12H (第25地点)	平安 9c後半	(1.20)	(1.00)	不明	—	須恵器壺・環	土坑に切られ、全ての壁なし/大部分調査区域外
13H (第25地点)	古墳後期 5c後半	(4.78)	4.54	N-50°-E	—	土師器環・埴・高環・壺・甕	特に二重の、拡張住居とみられる
14H (第25地点)	古墳後期 5c後半	(5.40)	6.50	N-40°-W	—	土師器環・高環・鉄滓	西隣が二重のため、拡張住居とみられる
15H (第25地点)	古墳後期 6c前半	4.20	4.12	N-11°-E	北壁中央よりやや東	土師器環・埴・壺・甕、 土製品支脚	焼失住居
16H (第25地点)	古墳後期 7c前半	6.40	5.88	N-37°-W	北西壁中央	土師器環・埴・鉢・鉄滓	焼失後に埋め戻された可能性あり
17H (第25地点)	古墳後期 6c前半	(5.00)	7.84	N-82°-E	東壁	土師器環・高環・甕・壺、 土製品支脚	埋め戻しの可能性あり/カマドの掛け口から遺物出土
18H (第25地点)	古墳後期 6c前半	4.20	4.10	N-27°-W	北西壁中央	土師器環・埴・甕・壺	焼失住居
19H (第25地点)	古墳後期 7c前半	10.21	10.07	N-40°-W	北西壁中央	土師器環・埴・高環・甕・壺、 須恵器環・甕、埴輪陶器(扁鏡)、 鉄鏝2、鉄釘、鉄滓	ハラエティー豊富な環や埴輪陶器など遺物多数出土
20H (第25地点)	古墳後期 6c前半	(2.00)	(1.60)	不明	—	土師器環・埴・甕・壺	掘瓦によりかなりの部分が壊される
21H (第25地点)	古墳後期 —	(4.20)	7.08	N-85°-E	—	土師器片	北側調査区域外/掘瓦で大きく壊される
22H (第28地点)	古墳後期						未報告
23H (第28地点)	古墳後期						未報告
24H (第28地点)	古墳後期						未報告
25H (第28地点)	古墳後期						未報告
26H (第28地点)	古墳後期						未報告
27H (第28地点)	古墳後期						未報告
28H (第28地点)	古墳後期						未報告
29H (第28地点)	古墳後期						未報告
30H (第28地点)	古墳後期						未報告
31H (第28地点)	古墳後期						未報告
32H (第28地点)	古墳後期						未報告
33H (第28地点)	古墳後期						未報告
34H (第28地点)	古墳後期						未報告
35H (第28地点)	古墳後期						未報告
36H (第28地点)	古墳後期						未報告

第22表 中野遺跡各地点住居一覧(1)

## 第4章 調査のまとめ

住居番号 (調査地点)	時 期	規模 (m)		土軸方位	カマドの位置	出土遺物	備 考
		長軸	短軸				
37H (第28地点)	古墳後期						未報告
28H (第31地点)	古墳後期 7c前半～中葉、 寛高式期	(4.05)	7.04	N-2°-W	—	土師器環・鏝、灰石、鉄鏝	住居南半分のみ検出
39H (第40地点)	古墳後期						未報告
40H (第40地点)	古墳後期						未報告
41H (第40地点)	平安						未報告
42H (第40地点)	古墳後期						未報告
43H (第40地点)	古墳後期						未報告
44H (第40地点)	古墳後期						未報告
45H (第40地点)	平安						未報告
46H (第40地点)	古墳後期						未報告
47H (第40地点)	古墳後期						未報告
48H (第40地点)	平安						未報告
49H (第40地点)	古墳後期						未報告
50H (第41地点)	古墳後期 —	3.06	3.00	N-84°-E	北壁中央や中葉	土師器環・鏝・鏝、土製品支脚、 土製品紡錘車	カマド燃焼部から上部に坪が埋せられた支脚が定位置で出土した
51H (第41地点)	平安 —	4.33	3.30	N-78°-W	東壁中央	須恵器環・鏝・須恵製用紡錘車、 灰石、半月形鉄製品	多数のビッドが床面及び階床下より検出された。カマド燃焼部から坪が伏せられた状態で出土
52H (第40地点)	古墳後期						未報告
53H (第40地点)	平安						未報告
54H (第40地点)	平安						未報告
55H (第40地点)	古墳後期						未報告
56H (第40地点)	古墳後期						未報告
57H (第40地点)	平安						未報告
58H (第40地点)	平安						未報告
59H (第40地点)	平安						未報告
60H (第40地点)	古墳後期						未報告
61H (第40地点)	古墳後期						未報告
62H (第40地点)	古墳後期						未報告
63H (第40地点)	古墳後期						未報告
64H (第43地点)	平安 8c前半	4.20	3.50	N-2°-E	東壁中央/北壁中央	須恵器環・鏝、土師器鏝、土師 鉄鏝	カマド之基あり/鉄鏝が多数出土しており、観音御遺構か
65H (第49地点)	平安 9c中葉～後葉	3.80	2.85	N-77°-E	東壁か	須恵器環・鏝、土師器鏝	カマドは確認されなかったが、焼土から東壁と推察される
66H (第49地点)	古墳 7c中葉	(3.85)	6.68	N-29°-W	北壁中央	土師器鏝・鏝・鏝、土製支脚、 灰石	遺物多数出土
67H (第91地点)	古墳後期 6c前半	5.16	2.67	N-29°-W	北壁	土師器環・鏝	カマドから鏝が壁面で出土一層2つ掛けのカマドと思われる
68H (第91地点)	古墳後期 6c前半	3.18	(2.80)	不明	—	土師器環・鏝	北西側覆瓦、北側調査区外/69Hより新しい
69H (第91地点)	古墳後期 5c末葉～6cか	(3.75)	(3.21)	不明	—	—	西側から南へかけ大きく覆瓦される/68Hより古い
70H (第91地点)	古墳後期 5c中葉～後葉か	(1.02)	(1.98)	不明	—	土師器高坪	北壁の一部のみ検出
71H (第91地点)	古墳後期 6c中葉	5.82	5.79	N-19°-W	北壁	土師器環、須恵器鏝	南西部分は覆瓦、北西部分は調査区外
72H (第91地点)	平安 8c後半	4.20	2.64	N-73°-E	東壁中央	土師器北武蔵型環・鏝、 須恵器環・鏝、小口埴石口	住居中央から小観治埴/73Hより新しい

第22表 中野遺跡各地点住居一覽(2)

住居番号 (調査地点)	時 期	規模 (m)		土軸方位	カマドの位置	出土遺物	備 考
		長軸	短軸				
73H (第91地点)	平安 9c後葉	(1.80)	(1.20)	不明	—	須史路環	北東隅のみ検出
74H (第91地点)	平安 9c後葉	3.73	3.38	N-73°W	東壁中央	土師器台付甕・甕、須史路環・甕	住居廃絶後、壁土の三角遺構が認められる
75H (第91地点)	古墳後期 5c後葉	4.38	4.32	不明	南東壁	土師器環	72Hより新しい住居の廢絶にあたりカマドを破壊した可能性あり
76H (第91地点)	平安 9c前葉	4.71	4.26	N-85°W	東壁中央	須史路環・甕	北西隅は掘丸、北東は調査区域外
77H (第91地点)	平安 9c後葉	(2.94)	(3.24)	N-37°E	—	須史路環・甕・甕	東壁調査区域外
78H (第91地点)	平安 9c中葉～後葉	(1.92)	(0.57)	不明	—	土師器甕、須史路環・甕	南西隅のみ調査ノ大平は調査区域外
79H (第91地点)	平安 9c後葉	2.28	1.80	N-52°W	北東壁中央	須史路環、土師器甕	西壁掘丸、北西隅が調査区域外
80H (第91地点)	平安 9c前葉	(2.28)	(3.90)	N-84°W	北壁中央/東壁中央	土師器武蔵式甕、 須史路環(東金子、鳩山)、 ミニチュア土器	西壁調査区域外/東壁のカマドの方が新しい
81H (第116地点)	平安						未報告
82H (第95地点)	古墳～平安 —	(2.50)	(2.10)	不明	—	なし	西壁隅のみ検出
83H (第91号地点)	平安						未報告
84H (第91号地点)	平安						未報告
85H (第102地点)	古墳後期 7c中葉	(5.50)	(3.30)	N-4°W	—	土師器環・鉢・甕、須史路環・甕、 土製品支脚	中世の土坑に壊される
86H (第109地点)	古墳後期 7c中葉	(2.06)	(3.42)	N-64°E	—	土師器甕・甕	東壁大部分調査区域外
87H (第109地点)	平安 9c中葉	4.06	3.88	N-14°W	北壁中央	須史路環・環、土師器甕、灰石	中世の土坑・溝・ピットに切られる
88H (第109地点)	古墳後期 7c前葉	(2.52)	(5.88)	N-56°E	北東壁中央	土師器環・甕・鉢・甕・道、 土製品支脚、ミニチュア土器	貯蔵穴からほぼ完形の土師器鉢・甕が出土
89H (第109地点)	平安 9c後葉	4.30	3.84	N-9°W	北壁中央	片輪陶器片類道、須史路環・環、 土師器環・甕、灰石	中世以降のピットに切られる
90H (第114地点)	古墳後期 6c中葉	(5.90)	(4.50)	N-12°W	—	土師器環・高環・甕・甕、桃核	南西隅、南壁周辺のみ検出
91H (第119地点)	古墳後期						未整理
92H (第119地点)	平安						未整理
93H (第116地点)	平安 9c第1～第2四半期	(3.90)	(3.34)	N-1°E	—	須史路環、土師器甕	中世以降の土坑・ピットに掘凡される
94H (第116地点)	古墳後期 7c後葉	(5.00)	(5.00)	N-67°W	西壁中央	土師器環・甕、石製鈴鐺串	住居西側と貯蔵穴付近から遺物多数出土
95H (第117地点)	古墳後期 6c中葉	(2.17)	(1.80)	N-14°W	—	土師器環・甕	東壁のみ確認
96H (第117地点)	古墳後期 6c後葉	9.69	(7.43)	N-34°W	北西壁中央	土師器環・道・甕、土玉、鉄製品	住居北平から遺物多数出土
97H (第117地点)	古墳後期 6c前～中葉	5.17	(4.90)	N-23°W	北壁中央	土師器高環・環・甕・甕、 土製品支脚、玉刺片、灰石	貯蔵穴3回建て替え一住居も3回建て替えか
98H (第117地点)	古墳後期 6c中葉	4.64	4.72	N-0°W	北壁中央	土師器環・形・甕・甕、 土製品支脚、編物片、灰石	貯蔵穴2つ検出ノ遺物多数出土
99H (第117地点)	古墳後期 6c中葉	(4.57)	5.66	N-23°W	北壁中央	土師器環・甕・甕	10Hを切るノ南側半分が調査区域外
100H (第117地点)	古墳後期 6c中葉か	(1.27)	(2.00)	N-0°W	北壁中央	土師器環・甕、鉄釘	カマド付近の他は調査区域外
101H (第117地点)	古墳後期 6c中葉か	(0.84)	(0.43)	不明	—	なし	99Hに切られるノ北西隅のみ検出され、他は遺構外
102H (第116号地点)	平安						未報告
103H (第121地点)	古墳後期						未報告

第22表 中野遺跡各地点住居一覧(3)

【引用・参考文献】

- 石井克己・早田 勉・井川達雄 1991『黒井峯遺跡発掘調査報告書』群馬県北群馬郡子持村教育委員会
- 江口 桂 2016『古代丘陵地の開発と交通路—武蔵・相模国境付近の集落遺跡の検討から—』『日本古代考古学論集』須田 勉 編 同成社
- 大塚昌彦 1996『火山灰下の家屋』『考古学による日本歴史』15家族と住まい 大塚初重他編 雄山閣出版
- 尾形則敏 1999『いわゆる比企型環』の編年基準の要点—小地域を対象とした編年の確立に向けて—』『あらかわ』第2号あらかわ考古談話会
- 2000『志木市における古墳時代の土師器の編年(1)—5世紀から7世紀の環型土器の変遷—』『あらかわ』第3号あらかわ考古談話会
- 2001『志木市における古墳時代の土師器の編年(2)—5世紀から7世紀の環型土器の変遷—』『あらかわ』第4号あらかわ考古談話会
- 2002『武蔵野台地北西部における古墳時代の地域性—集落を中心とする5世紀から7世紀の土器様相—』『あらかわ』第5号 あらかわ考古談話会
- 2008『古墳時代後期の土師器研究の再認識—(仮称)「人間系土師器」の実態と生産地推定を例として—』『埼玉考古 43』埼玉考古学会
- 尾形則敏・深井恵子 2001『埋蔵文化財調査報告書2 中野遺跡第25地点』志木の文化財 第31集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・徳留彰紀・深井恵子・青木 修 2011『志木市遺跡群19 城山遺跡第59地点』志木の文化財 第45集 埼玉県志木市教育委員会
- 2012『城山遺跡第62地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木の文化財 第48集 埼玉県志木市教育委員会
- 桐生直彦 2015『竪穴建物と平地建物』『季刊考古学』第131号 雄山閣
- 鶴持和夫 2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第245集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒崎 直 1977『歴史考古学における集落跡と都城研究』『歴史評論』№331 歴史科学協議会
- 田中広明 1995『関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向—群馬・埼玉県を中心として—』『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 富田和夫 1992『稲荷前遺跡(A区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第120集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 水口由紀子 1989『いわゆる“比企型環”の再検討』『東京考古』第7号 東京考古談話会
- 道上 祥武 2021『古代集落の諸類型—集落研究の現状と方向性』『古代集落の構造と変遷1』第24回古代官衙・集落研究会報告書 奈良文化財研究所研究報告 第30冊 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所編
- 若狭 徹 2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館

[ 付 編 ]

自然 科学 分析





# I. 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子

## 1. はじめに

志木市の中野遺跡第117地点から出土した炭化材3点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

## 2. 試料と方法

試料は、96号住居跡から出土した炭化草本（試料No.5：PLD-46689）と、97号住居跡から出土した炭化材（試料No.8：PLD-46690）、98号住居跡から出土した炭化材（試料No.34：PLD-46691）である。97号住居跡の試料No.8（PLD-46690）と98号住居跡の試料No.34（PLD-46691）は、最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。調査所見による遺構の推定時期は、古墳時代後期である。

測定試料の情報、調整データは第23表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-46689	遺構：96号住居 遺物No.炭2 No.399 試料No.5	種類：炭化草本（イネ科） 試料の性状：その他 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：0.1mol/L, 塩酸：1.2mol/L）
PLD-46690	遺構：97号住居 遺物No.炭1 No.362 試料No.8	種類：炭化材（コナラ属コナラ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L）
PLD-46691	遺構：98号住居 遺物No.炭17 No.316 試料No.34	種類：炭化材（コナラ属コナラ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L）

第23表 測定試料および処理

## 3. 結果

第24表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、第56図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い（ $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730 \pm 40$ 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ: IntCal20）を使用した。なお、1 $\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 $\sigma$ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-46689 試料No.5	-10.83 $\pm$ 0.17	1514 $\pm$ 17	1515 $\pm$ 15	552-584 cal AD (68.27%)	544-599 cal AD (95.45%)
PLD-46690 試料No.8	-23.54 $\pm$ 0.25	1552 $\pm$ 19	1550 $\pm$ 20	441-450 cal AD ( 8.66%)	434-467 cal AD (20.76%)
				456-459 cal AD ( 2.20%)	
				478-496 cal AD (18.24%)	
				535-564 cal AD (39.16%)	
PLD-46691 試料No.34	-27.08 $\pm$ 0.25	1569 $\pm$ 18	1570 $\pm$ 20	436-463 cal AD (26.48%)	432-554 cal AD (95.45%)
				476-499 cal AD (24.80%)	
				511-514 cal AD ( 2.16%)	
				532-546 cal AD (14.84%)	

第24表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

#### 4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2 $\sigma$ 暦年代範囲（確率95.45%）に着目して結果を整理する。

なお、古墳時代の暦年代については赤塚（2009）を参照した。

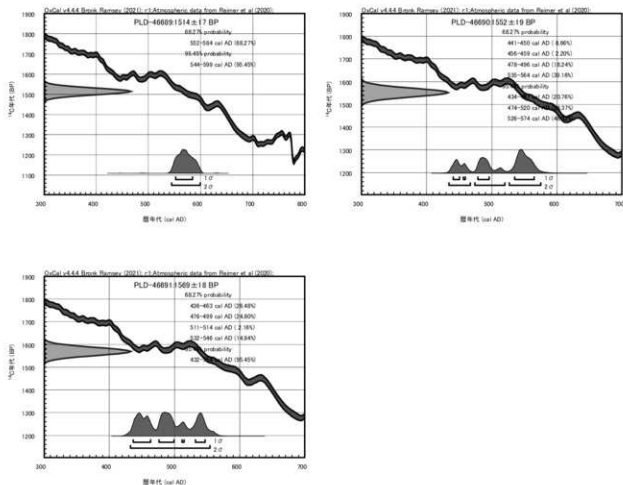
96号住居跡から出土した炭化草本（試料No.5：PLD-46689）は、544-599 cal AD (95.45%) の暦年代範囲を示した。これは、6世紀中頃～末で、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。

97号住居跡から出土した炭化材（試料No.8：PLD-46690）は、434-467 cal AD (20.76%)、474-520 cal AD (28.37%)、526-574 cal AD (46.32%) の暦年代範囲を示した。これは、5世紀前半～6世紀後半で、古墳時代中期～後期に相当する。

98号住居跡から出土した炭化材（試料No.34：PLD-46691）は、432-554 cal AD (95.45%) の暦年代範囲を示した。これは、5世紀前半～6世紀中頃で、古墳時代中期～後期に相当する。

調査所見による遺構の推定時期はいずれも古墳時代後期であり、測定結果は調査所見に対して総合的であった。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。97号住居跡の出土炭化材（試料No.8：PLD-46690）と98号住居跡の出土炭化材（試料No.34：PLD-46691）は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。また、96号住居跡出土の炭化草本（試料No.5：PLD-46689）は、草本が伐採もしくは枯死した年代を示している。



第56図 暦年較正結果

## [引用・参考文献]

- 赤塚次郎 2009「弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代」日本文化財科学会第26回大会実行委員会編『日本文化財科学会第26回大会研究発表要旨集』：14-20p 日本文化財科学会
- Bronk Ramsey, C. 2009「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates.」『Radiocarbon.』51(1)：337-360p University of Arizona
- 中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代編集委員会編『日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代』：3-20p 日本第四紀学会
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, L., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. 2020「The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP)」『Radiocarbon』62(4)：725-757p  
doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41>  
(cited 12 August 2020)

## II. 中野遺跡第117地点出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

志木市の中野遺跡第117地点から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

### 2. 試料と方法

試料は96号住居跡（96H）と97号住居跡（97H）、98号住居跡（98H）から出土した炭化材24点である。遺構の時期はいずれも古墳時代後期と推測されており、年代測定でも整合的な結果が得られている（放射性炭素年代測定の項参照）。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

### 3. 結果

樹種同定の結果、広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）とコナラ属コナラ節（以下、コナラ節）、樹皮、イネ科草本の4分類群が確認された。結果一覧を第25表、遺構別の樹種同定結果を第26表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

（1）コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版23-1a-1c（No.20）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が、単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靱で、加工困難である。

（2）コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版23-2a-2c（No.2）

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。

樹種	96H	97H	98H	合計
コナラ属クヌギ節			7	7
コナラ属コナラ節	2	2	11	15
樹皮			1	1
イネ科草本	1			1
合計	3	2	19	24

第25表 遺構別の樹種同定結果

材は全体的に重硬で、加工困難である。

(3) 樹皮 Bark 図版23-3a (No.19)

師細胞および師部放射組織からなる二次細胞および周皮で構成される樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

(4) イネ科 Poaceae 図版23-4a (No.5)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類である。維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱で、維管束を囲む維管束鞘は薄い。稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

#### 4. 考察

96号住居跡ではコナラ節とイネ科草本、97号住居跡ではコナラ節、98号住居跡ではクヌギ節とコナラ節、樹皮が確認された。クヌギ節とコナラ節の材は、どちらも重硬で加工困難である(平井 1996)。埼玉県を含む関東地方南部では、古墳時代の住居跡から出土した炭化材にクヌギ節やコナラ節が多く確認されている(伊東・山田編 2012)。今回の分析でも同様の傾向を示しており、周辺地域の木材利用傾向と類似している。

No.	遺構名	遺物名	樹種	本取り	残存径	残存年輪数	年代測定番号
2	96H	炭1 No.397	コナラ属コナラ節	破片	1.5×3.0cm	36	—
5	96H	炭2 No.399	イネ科草本	—	0.3×0.1cm	—	PLD-46689
6	96H	炭3 No.400	コナラ属コナラ節	みかん割り状	半径3.2cm	36	—
8	97H	炭1 No.362	コナラ属コナラ節	破片	1.2×1.0cm	3	PLD-46690
13	97H	炭2 No.364	コナラ属コナラ節	破片	0.5×0.3cm	1	—
18	98H	炭1 No.300	コナラ属コナラ節	破片	1.0×0.5cm	3	—
19	98H	炭2 No.301	樹皮	—	0.3×0.5cm	—	—
20	98H	炭3 No.302	コナラ属クヌギ節	破片	0.5×0.8cm	2	—
21	98H	炭4 No.303	コナラ属コナラ節	破片	1.0×2.0cm	24	—
22	98H	炭5 No.304	コナラ属クヌギ節	みかん割り状	半径2.0cm	7	—
23	98H	炭6 No.305	コナラ属コナラ節	破片	1.2×1.3cm	6	—
24	98H	炭7 No.306	コナラ属クヌギ節	破片	1.3×1.0cm	4	—
25	98H	炭8 No.307	コナラ属クヌギ節	破片	1.2×1.0cm	4	—
26	98H	炭9 No.308	コナラ属クヌギ節	みかん割り状	半径2.5cm	20	—
27	98H	炭10 No.309	コナラ属コナラ節	破片	1.0×2.3cm	20	—
28	98H	炭11 No.310	コナラ属コナラ節	破片	1.5×2.0cm	10	—
29	98H	炭12 No.311	コナラ属コナラ節	破片	1.8×2.2cm	15	—
30	98H	炭13 No.312	コナラ属コナラ節	破片	1.5×1.0cm	5	—
31	98H	炭14 No.313	コナラ属コナラ節	破片	2.8×1.6cm	15	—
32	98H	炭15 No.314	コナラ属コナラ節	破片	0.3×0.7cm	2	—
33	98H	炭16 No.315	コナラ属コナラ節	破片	1.7×2.5cm	18	—
34	98H	炭17 No.316	コナラ属クヌギ節	破片	2.5×2.3cm	31	PLD-46691
35	98H	炭18 No.317	コナラ属クヌギ節	破片	1.0×1.0cm	10	—
37	98H	A区一括	コナラ属コナラ節	破片	1.3×1.8cm	18	—

第26表 樹種同定結果一覧

[引用・参考文献]

- 平井信二 1996『木の百科』:394p 朝倉書店  
 伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学—出土土製品用材データベース—』:449p 海青社  
 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』:238p 海青社

### Ⅲ. 中野遺跡第117地点から出土した大型植物遺体

バンドリ スタルシャン (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

埼玉県志木市の中野遺跡第117地点において、炭化種実が出土した。ここでは、古墳時代後期の住居跡から得られた炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物について検討した。

#### 2. 試料と方法

分析試料は、肉眼で確認・回収された現地取り上げの試料、6試料である。試料は、古墳時代後期の住居跡96H(2H)から採取された1試料と、97H(3H)から採取された2試料、98H(4H)から採取された3試料である。試料は、株式会社中野技術によって採取された。

同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、志木市教育委員会に保管されている。

#### 3. 結果

同定した結果、試料はいずれも木本植物のモモ炭化核であった(第27表)。

以下に、出土した炭化種実について遺構別に記載する。

96H(2H):モモの破片が1点得られた。

97H(3H):モモが3点(完形1点、破片2点)得られた。

98H(4H):モモが4点(完形1点、破片3点)得られた。

以下に、得られた分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠した。

(1)モモ *Prunus persica* (L.) Batsch 炭化核 バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点があり、表面に不規則な深い皺がある。また、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。完形の核の大きさは、高さ20.3mm、幅15.5mm、厚さ13.2mm(図版24-1)、高さ19.8mm、幅16.7mm、厚さ15.3mm(図版24-2)、破片の大きさは、残存高17.3mm、残存幅13.7mm、残存厚6.1mm(図版24-3)。

分類群	遺構 出土位置・層位 時期 採取方法	96H(2H)	97H(3H)		98H(4H)	
		炭2 No. 398	No. 361	No. 363	No. 298	No. 299
			古墳時代後期			
			現地取り上げ			
モモ	炭化核(完形)		1			1
	炭化核(破片)	(1)	(2)	(1)	(2)	

第27表 中野遺跡第117地点から出土した炭化種実(括弧内は破片数)

#### 4. 考察

古墳時代後期の住居跡96H(2H)と97H(3H)、98H(4H)から出土した炭化種実を同定した結果、いずれも栽培植物で果樹のモモの炭化核であった。これらのモモ核は、果肉を食べた後に、食用にならない核の部分が捨てられ、燃やされた可能性が考えられる。

#### [引用文献]

米倉浩司・榎田 忠 2003-『BG Plants 和名-学名インデックス (YList)』 <http://ylist.info>





版 图





1. 調査前現況 (北から)



2. 表土剥ぎ (北から)



3. 表土剥ぎ (東から)



4. プラン確認



5. 旧石器試掘坑 T P 1 (東から)



6. 旧石器試掘坑 T P 2 (東から)



7. 旧石器試掘坑 T P 3 (西から)



8. 旧石器試掘坑 T P 4 (東から)



1. 645号土坑完掘(北から)



2. 95号住居跡完掘(東から)



3. 96号住居跡遺物出土状態(北東から)



4. 96号住居跡遺物出土状態(北から)



5. 96号住居跡遺物出土状態(南から)



6. 96号住居跡カマド完掘(南東から)



7. 96号住居跡P2完掘(南から)



8. 96号住居跡焼土(北から)



1. 96号住居跡完掘



2. 96号住居跡掘り方完掘(南から)



3. 96号住居跡作業風景



4. 97号住居跡作業風景



5. 97号住居跡遺物出土状態(南から)



6. 97号住居跡土層断面(北東から)



7. 97号住居跡壁溝遺物出土状態(北から)



8. 97号住居跡カマド遺物出土状態(南から)



1. 97号住居跡カマド遺物出土状態(南から)



2. 97号住居跡カマド完掘(南西から)



3. 97号住居跡貯蔵穴A～C全景(北西から)



4. 97号住居跡P5完掘(南から)



5. 97号住居跡完掘(北から)



1. 98号住居跡遺物出土状態(南から)



2. 98号住居跡貯蔵穴A周辺遺物出土状態(南から)



3. 98号住居跡貯蔵穴A完掘(南から)



4. 98号住居跡貯蔵穴B完掘(西から)



5. 98号住居跡カマド遺物出土状態(南から)



6. 98号住居跡カマド支脚出土状態(南から)



7. 98号住居跡P5完掘(西から)



8. 98号住居跡掘り方完掘(南から)





1. 99号住居跡遺物出土状態(南から)



2. 99号住居跡カマド西遺物出土状態(西から)



3. 99号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状態(南から)



4. 99号住居跡貯蔵穴南遺物出土状態(西から)



5. 99号住居跡P1上面環出土状態(北西から)



6. 99号住居跡貯蔵穴遺物出土状態(南から)



7. 99号住居跡カマド西遺物出土状態(南から)



8. 99号住居跡カマド完掘(南から)





1. 99号住居跡完掘



2. 100号住居跡完掘(北から)



3. 100号住居跡カマド完掘(南から)



4. 101号住居跡完掘(南西から)



5. 1号ピット完掘(東から)



1. 6号ピット完掘(南から)



2. 2号ピット完掘(南から)



3. 7号ピット完掘(南から)



4. 7号ピット遺物出土状態(南から)



5. 3号掘立柱建築遺構完掘(南から)



1. 646号土坑完掘（北から）



2. 647号土坑完掘（北東から）



3. 648号土坑完掘（南西から）



4. 649号土坑完掘（西から）



5. 650号土坑完掘（西から）



6. 651号土坑完掘（南から）



7. 3号ピット完掘（西から）



8. 4号ピット完掘（北から）



1. 5号ピット完掘(東から)



2. 学生見学風景



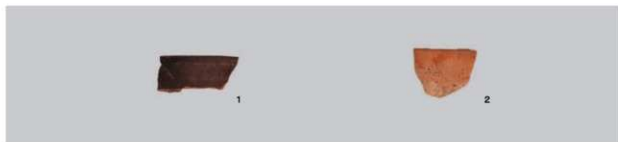
3. 調査区遠景



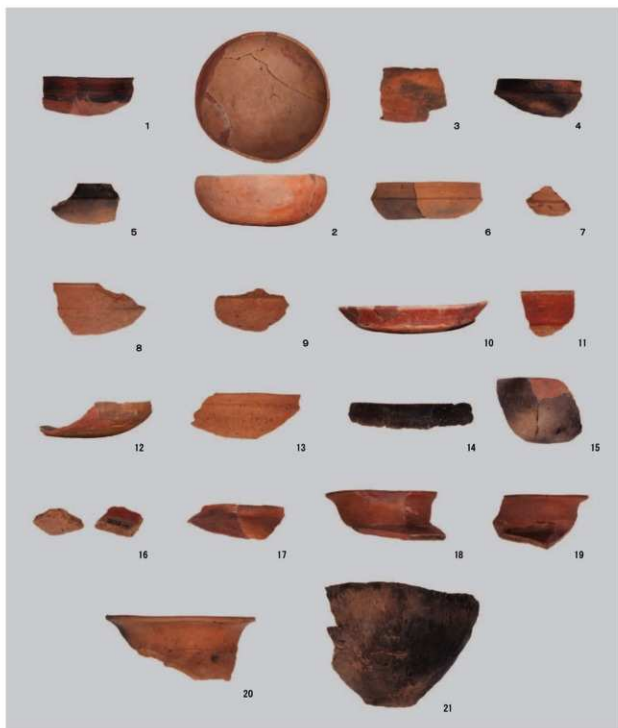
4. 埋め戻し風景



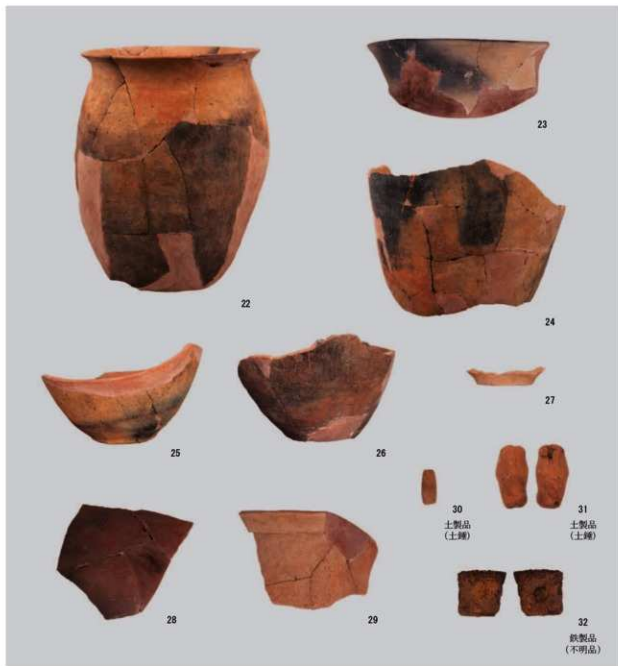
5. 埋め戻し後全景



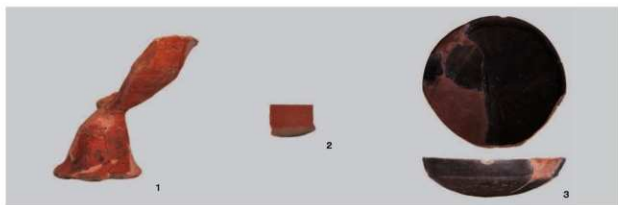
1. 95号住居跡出土遺物



2. 96号住居跡出土遺物 1



1. 96号住居跡出土遺物 2



2. 97号住居跡出土遺物 1



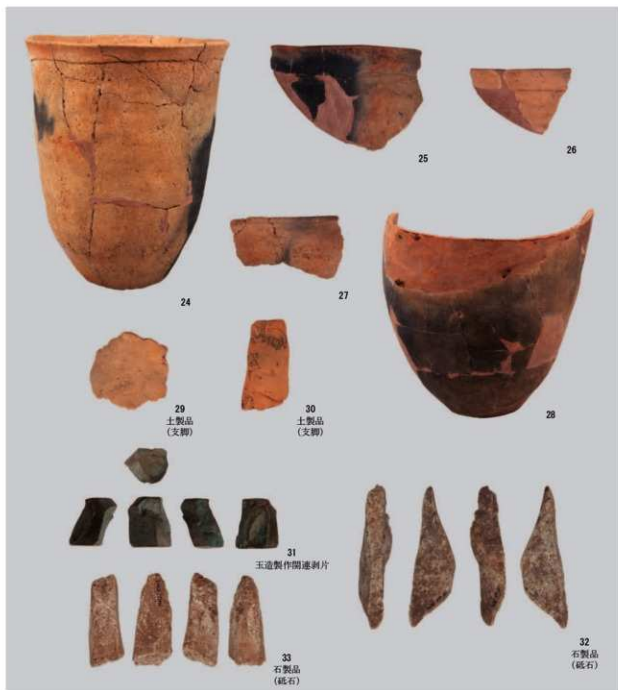
97号住居跡出土遺物 2



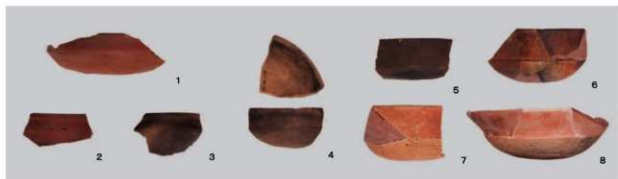


97号住居跡出土遺物 3





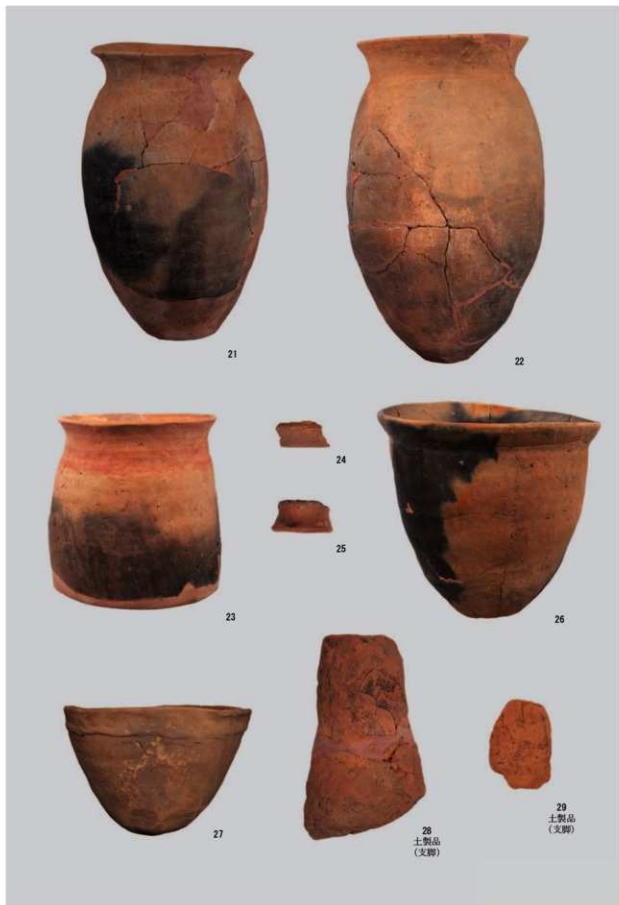
1. 97号住居跡出土遺物 4



2. 98号住居跡出土遺物 1



98号住居跡出土遺物 2



98号住居跡出土遺物 3



1. 98号住居跡出土遺物 4



2. 99号住居跡出土遺物 1



99号住居跡出土遺物 2



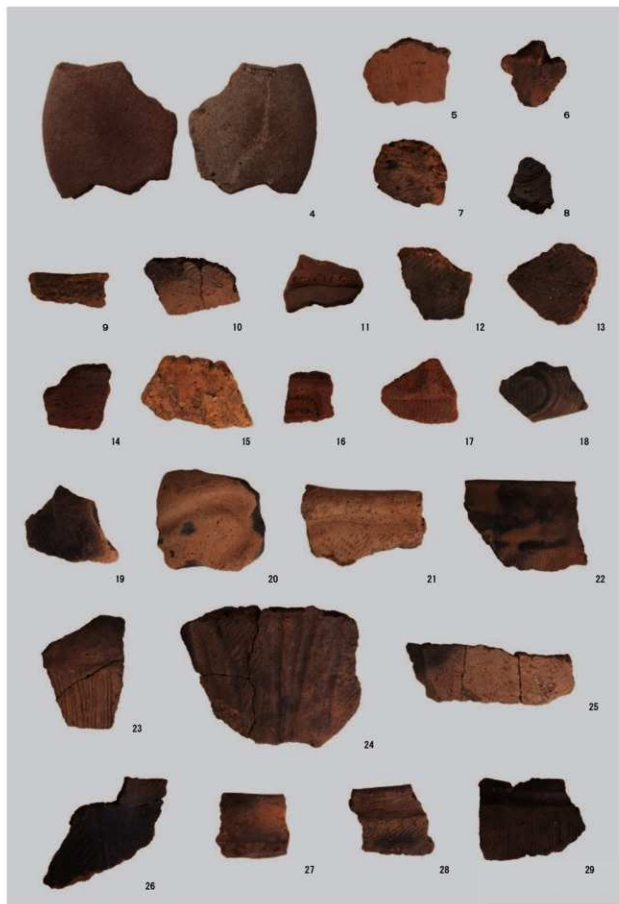
1. 100号住居跡出土遺物



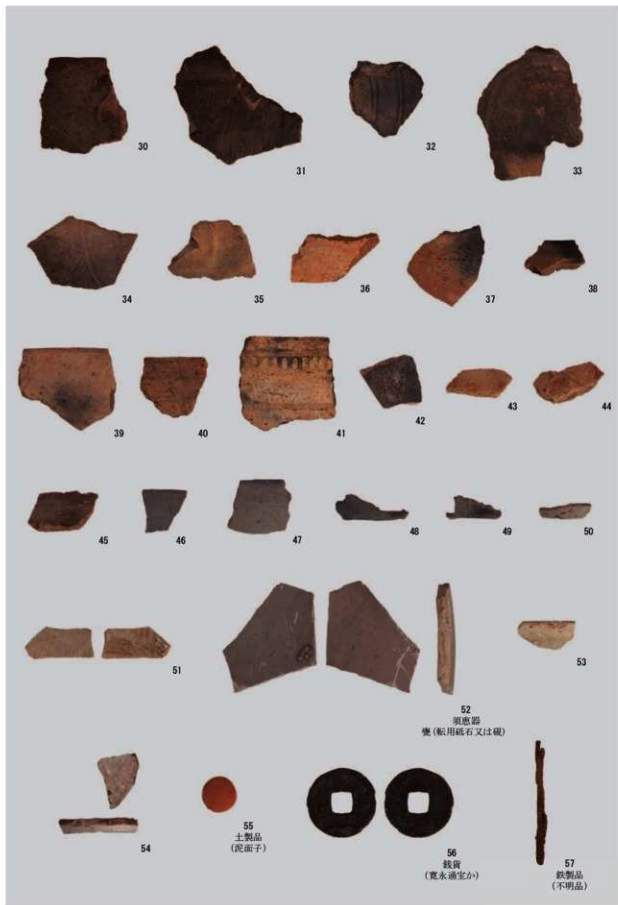
2. 7号ピット跡出土遺物



3. 遺構外出土遺物 1

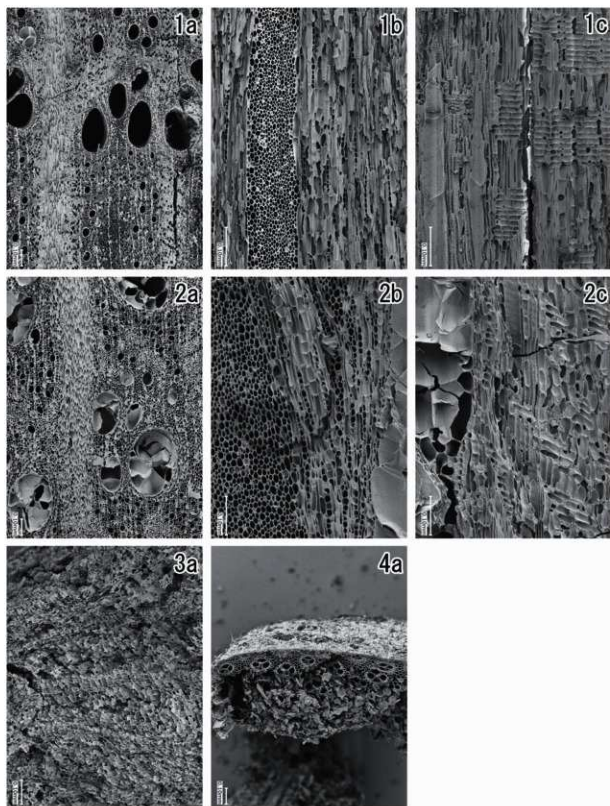


遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3





炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1 a - 1 c. コナラ属クヌギ節 (No.20)

2 a - 2 c. コナラ属コナラ節 (No.2)

3 a. 樹皮 (No.19)

4 a. イネ科 (No.5)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面



- 中野遺跡第117地点から出土した炭化種実
1. モモ炭化核 (完形) (98H (4H)、d区一括)
  2. モモ炭化核 (完形) (97H (3H)、No.361)
  3. モモ炭化核 (破片) (96H (2H)、炭2 No.398)

## 報告書抄録

ふりがな	なかのいせきだい117ちてん まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	中野遺跡第117地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第88集							
編者名	尾形剛敏 徳留彰紀 大久保聡 木村結香 小林陽子 清水理史							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL.048 (473) 1111							
発行年月日	令和4(2022)年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡ (全体面積)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかのいせき 中野遺跡 (第117地点)	しきしおのちゆう 志木市 柏町1丁目 1506-5の一部	11228	09-002	35° 83' 28"	139° 56' 97"	20210727～ 20211008	233.58 (998.29)	分譲住宅建設に伴う道路新設工事及び浸透トレンチ工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中野遺跡 (第117地点)	集落跡・墓跡	縄文時代 古銅器時代前期 中世以降	土坑 1基 住居跡 7軒 ピット 4本 掘立柱建築遺構 1棟 土坑 6基 ピット 3本	土師器・土製品・石製品・鉄製品 土師器		古墳時代後期の6世紀代に位置づけられる住居跡7軒がまとめて検出され、当該期の土器が多数出土した。		
要 約								
中野遺跡は、旧石器時代、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代前～後期、奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡である。今回の第117地点では、縄文時代の土坑、古墳時代後期の住居跡・ピット、中世以降の掘立柱建築遺構・土坑・ピットが検出された。								

志木市の文化財 第88集

## 中野遺跡第117地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市教育委員会  
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号  
発行日 令和4(2022)年10月31日  
印刷 有限会社平電子印刷所